

# 平氏源陸常

HITACHI GENJIGADAIRA

—那賀郡阿波郷丈部里比定地に於ける集落跡の調査—

遺構遺物

1985

那珂郡大宮町教育委員会  
水戸北部中核工業団地内  
埋蔵文化財発掘調査会

# 常陸源氏平

HITACHI GENJIGADAIRA

1985

## 序 文

源氏平遺跡は、昭和56年12月水戸北部中核工業団地造成に伴う現地調査の結果、土師器片や布目瓦が発見されたことに始まります。

この地は、地域振興整備公団が事業主体となり、造成面積165.5ヘクタールという大規模な工業団地の開発がせまったため当公団から大宮町教育委員会に発掘調査の委託を受け、引き続いて、水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会を組織、学術調査を実施することになったものです。

発掘調査は、団長に外山泰久氏をお願いし、昭和58年8月29日から、11月25日まで地元作業員や学生等の参加により実施されました。

調査の結果、遺跡は台地の先端部南東部に集中して、住居址、竪立柱建造物、土壘、土師器、須恵器、文字瓦、墨書土器、紡錘車等が沢山出土しましたが、特に漆紙文字が一般集落址から発見されたのは、全国で二番目で、律令制下の東方の文化を探る貴重な資料として古代の人びとの文化のにおいを直接肌で感じるとともに大きな成果をあげることができました。

また江戸時代には、河岸街道として、久慈川と那珂川を結ぶ輸送路として、諸物資の重要な位置をしめていたことを考えると遠き祖先の在りし日の生活と先人の繁栄をしのぶことができました。

ここに報告書発刊をみることができましたのは、ひとえに地域振興整備公団のご厚意によるものと深く感謝するとともに、事前の発掘調査からご支援、ご指導をいただきました茨城県教育庁文化課、調査団長の外山泰久氏、外関係各位のご協力の賜物であると心より感謝申し上げます。

最後にこの報告書が先人の教訓をかみしめ、強い生存への息吹となって、関係各位の学術的資料として、広く皆様方に活用いただくことを祈念いたします。

昭和60年3月

大宮町教育委員会  
教育長 吉田 一 満

## 例 言

- 1) 本報告は、茨城県那珂郡大宮町大字小野字源氏平1714番地ほかに位置する源氏平遺跡の発掘調査報告を主なものとする。茨城県遺跡地名表登録番号は、〔3746〕に相当した。
- 2) 発掘調査の目的は、水戸北部中核工業団地事業において、その事業地内に位置する源氏平遺跡などの記録保存を行うにある。
- 3) 発掘調査の主体は、大宮町教育委員会（茨城県那珂郡大宮町388-2番地）である。
- 4) 本遺跡の出土遺物の注記及び放射性炭素測定に於ける略称は「GNH」とする。
- 5) 調査費用は、原因者である地域整備振興公園の全額負担によった。
- 6) 発掘調査は、水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査団が中心となり実施した。
- 7) 発掘調査は、昭和58年8月29日から同年11月15日に至る間に実施した。
- 8) 遺物、図面等の整理は、調査終了後、大宮町役場分庁舎等において昭和59年3月までこれを行った。
- 9) 本書は、調査担当者が執筆編集した。
- 10) 発掘調査並びに報告書の作成、刊行にあたっては、多くの機関ならびに先生方の御指導・御助言を賜った。記して感謝したい。（敬称略、順不同）  
国立歴史民俗博物館、茨城県教育委員会、国学院大学考古学研究室、茨城大学人文学部史学研究室、学習院大学年代測定室、桂村教育委員会、新井洋三郎、乙益重隆、小野田正樹、<sup>※</sup>川井正一、川上博義、瓦吹聖、木越邦彦、阿久津久、小林達雄、小林信一、斉藤弘道、佐藤次男、佐藤政則、佐藤正好、塩谷修、<sup>※</sup>相山林継、志田諤一、鈴木靖民、高根信和、永嶋正春、能島清光、林陸郎、平川南、平野卓、福田耕二郎、藤田稔、遠見端、宮田正彦、茂木雅博、吉田恵二
- 11) 漆紙文書の鑑定・保存については、平川南、永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館）の御指導・御協力を賜った。
- 12) 図面中の記号の表示は以下のとおりである。

紡錘車	●	ナイフ	×
鉄滓	▲	土師器その他主要遺物	○
土縄	■	土師器の略は「H」とした。	
凹石	□	須恵器の略は「S」とした。	
石錘	×		

- 13) 出土品などの調査資料は、大宮町教育委員会、大宮町福祉センター内収蔵庫に保管した。
- 14) 調査担当者（調査団長）は、外山泰久（茨城県埋蔵文化財指導員）であった。

# 目 次

序 文

例 言

水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会役員名簿

水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会規約

第 1 章 調査の経過	1
第 1 節 水戸北部中核工業団地の概要	1
第 2 節 発掘調査に至る経過	8
第 3 節 調査日誌	10
第 4 節 発掘調査終了までの事務的経過	23
第 2 章 遺跡と周辺環境	27
第 1 節 人文地理的・自然的環境	27
第 2 節 大宮町の主要遺跡の立地について	32
第 3 節 遺跡周辺の地名（参考資料）	33
第 3 章 調査報告	37
第 1 節 グリッドの設定	37
第 2 節 遺構の分布	41
第 3 節 遺跡の層序	43
第 4 節 遺構の調査	45
第 5 節 出土遺物	92
第 4 章 まとめ	128

# 挿 図 目 次

第 1 図	那珂郡大宮町の位置	6	第 34 図	第 14 号住居址(B)カマド実測図	80
第 2 図	茨城県北西部に於ける主要遺跡	30	第 35 図	第 15 号住居址実測図	83
第 3 図	大宮町内の主要遺跡の立地	31	第 36 図	第 15 号住居址カマド実測図	84
第 4 図	(1)グリッド設定の状況	38	第 37 図	第 16 号・17 号住居址実測図	86
第 4 図	(2)源氏平遺跡付近の地籍図	39	第 38 図	第 16 号住居址カマド実測図	87
第 5 図	グリッドの名称と遺構の分布	40	第 39 図	第 17 号住居址カマド実測図	89
第 6 図	遺跡の基本層序	44	第 40 図	掘立柱建物址実測図(柱穴)	91
第 7 図	F G 16・17 グリッド内の土層堆積状態	45	第 41 図	第 1 号住居址出土土器実測図(1)	93
第 8 図	第 1 号住居址(土層)実測図	47	第 42 図	第 1 号住居址出土土器実測図(2)	95
第 9 図	第 1 号住居址(下層)実測図	48	第 43 図	第 2 号住居址出土土器実測図	97
第 10 図	第 1 号住居址のカマド実測図	49	第 44 図	第 3 号住居址出土土器実測図	98
第 11 図	第 2 号住居址実測図	52	第 45 図	第 4 号住居址出土土器実測図(1)	100
第 12 図	第 2 号住居址カマド実測図	53	第 46 図	第 4 号住居址出土土器実測図(2)	101
第 13 図	第 3 号住居址実測図	55	第 47 図	第 5 号住居址出土土器実測図	102
第 14 図	第 3 号住居址カマド実測図	56	第 48 図	第 6 号住居址出土土器実測図	105
第 15 図	第 4 号住居址実測図	58	第 49 図	第 7, 8 号住居址出土土器実測図	105
第 16 図	第 4 号住居址カマド実測図	59	第 50 図	第 9, 10, 11 号住居址出土土器実測図	108
第 17 図	第 5 号住居址実測図	61	第 51 図	第 10 号住居址出土土器実測図	108
第 18 図	第 5 号住居址カマド実測図	62	第 52 図	第 12 号住居址出土土器実測図	110
第 19 図	第 6 号住居址実測図	64	第 53 図	第 13 号住居址出土土器実測図	111
第 20 図	第 6 号住居址カマド実測図	65	第 54 図	第 14 号住居址出土土器実測図	113
第 21 図	第 7 号住居址実測図	67	第 55 図	第 15 号住居址出土土器実測図	115
第 22 図	第 7 号住居址カマド実測図	67	第 56 図	第 16 号住居址出土土器実測図(1)	117
第 23 図	第 8 号住居址実測図	69	第 56 図	第 16 号住居址出土土器実測図(2)	118
第 24 図	第 8 号住居址カマド実測図	69	第 57 図	第 17 号住居址出土土器実測図	119
第 25 図	第 9 号住居址実測図	70	第 58 図	瓦片の拓影	121
第 26 図	第 10 号住居址実測図	72	第 59 図	簾(石製・土製)と鉄製品	123
第 27 図	第 10 号住居址カマド実測図	72	第 60 図	出土土器の拓影	125
第 28 図	第 11 号住居址実測図	74	第 61 図	石器と石製品	127
第 29 図	第 11 号住居址カマド実測図	74			
第 30 図	第 12 号住居址実測図	76			
第 31 図	第 12 号住居址カマド実測図	77			
第 32 図	第 13 号住居址実測図	78			
第 33 図	第 14 号住居址(A)・(B)実測図	79			

# 表 目 次

第1号住居址出土土器説明表	92	第11号住居址出土土器説明表	106
第2号住居址出土土器説明表	96	第12号住居址出土土器説明表	109
第3号住居址出土土器説明表	98	第13号住居址出土土器説明表	111
第4号住居址出土土器説明表	99	第14号住居址出土土器説明表	112
第5号住居址出土土器説明表	101	第15号住居址出土土器説明表	114
第6号住居址出土土器説明表	103	第16号住居址出土土器説明表	116
第7号住居址出土土器説明表	104	第17号住居址出土土器説明表	119
第8号住居址出土土器説明表	104	瓦片説明表	120
第9号住居址出土土器説明表	106	紡錘車・土鏝・鉄製品説明表	122
第10号住居址出土土器説明表	106	出土土器(拓影)説明表	124

# 写真・図版目次

1 源氏平遺跡遺景 土層の堆積状態	9 4号住居址の完掘状態
2 源氏平遺跡付近の航空写真	4号住居址カマド前の土器出土状態
3 発掘調査前の状態 発掘調査中 グリッドの掘り込み状態	4号住居址土器出土状態
4 1号塚の調査トレンチ 発掘調査中	10 5号住居址の完掘状態
5 1号塚調査前の状態 1号塚の土層状態 2号塚の調査トレンチ	5号住居址のカマド状態
6 1号住居址の床面の状態と土層 1号住居址のカマド経道部とその土器 住居址のあり方	5号住居址のカマド部分
7 1号住居址のカマドの掘り方 1号住居址の石鏝出土状態 2号住居址の土層と床面の状態	11 6号住居址の完掘状態
8 2号住居址の掘り方と3号住居址 3号住居址の完掘状態 3号住居址石器出土状態	7~11号住居址の完掘状態
	7号住居址の完掘状態
	12 7号住居址の壺形土器出土状態
	8号住居址の完掘状態
	9、10号住居址の完掘状態
	13 10号住居址の土器出土状態
	10号住居址の土器出土状態
	11号住居址の完掘状態
	14 12号住居址の完掘状態
	12号住居址のカマド内の土器出土状態
	12号住居址のカマド内の土器出土状態
	15 13号住居址の床面の状態
	14号住居址の文字瓦出土状態

- 15 15号16号住居址の位置  
 16 15号住居址の床面の状態  
 15号住居址の床面の状態  
 15号住居址の白色粘土の確認状態  
 17 15号住居址の漆紙付着土器の出土状態  
 15号住居址の環形土器の出土状態  
 15号住居址の環形土器の出土状態  
 18 16、17号住居址の位置  
 16号住居址の遺物出土状態  
 16号住居址の遺物出土状態  
 19 16号住居址の變形土器の出土状態  
 16号住居址の鉄鍍出土状態  
 17号住居址の環形土器の出土状態  
 20 出土遺物1第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第6号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第7号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第10号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第10号住居址の土器(S)  
 出土遺物1第15号住居址の土器(S)  
 21 出土遺物2第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物2第1号住居址の土器(S)  
 出土遺物2第15号住居址の土器(H)  
 出土遺物2第15号住居址の土器(H)  
 出土遺物2第5号住居址の土器(H)  
 出土遺物2第2号住居址の土器(H)  
 出土遺物2第12号住居址の土器(H)  
 出土遺物2第12号住居址の土器(H)  
 22 出土遺物3第1号住居址の土器(H)  
 出土遺物3第5号住居址の土器(H)  
 出土遺物3第1号住居址の土器(H)  
 出土遺物3第7号住居址の土器(H)  
 23 出土遺物4第4号住居址の土器(H)  
 出土遺物4第4号住居址の土器(H)  
 出土遺物4第4号住居址の土器(H)  
 出土遺物4第4号住居址の土器(H)  
 24 出土遺物5第1号住居址の土器(H)  
 出土遺物5第16号住居址の土器(H)  
 出土遺物5第16号住居址の土器(H)  
 出土遺物5第16号住居址の土器(H)  
 出土遺物5第16号住居址の土器(H)  
 25 出土遺物6第11号住居址の土器(S)  
 出土遺物6第10号住居址の土器(S)  
 出土遺物6鉄製品と鉄滓  
 出土遺物6砥石  
 出土遺物6石製品  
 出土遺物6第14号住居址(A)の文字瓦(部分)  
 出土遺物6第13号住居址の土器(底部の墨書)  
 26 出土遺物7紡錘車  
 出土遺物7土鏝  
 出土遺物7瓦片(凹面)  
 出土遺物7瓦片(凸面)  
 出土遺物73号住居址の紡錘車  
 出土遺物7四石(表面)  
 出土遺物7四石(裏面)  
 27〔出土遺物8と周辺の神社(1)〕  
 第12号住居址の灰軸陶器(内面)  
 第12号住居址の灰軸陶器(外面)  
 第15号住居址の漆紙文書(断片)  
 第15号住居址の漆紙文書付着土器(底部墨書)  
 阿波山上神社拝殿(権現造)(東茨城郡桂村)  
 28〔周辺の神社(2)〕  
 石船神社の石造明神造鳥居(東茨城郡桂村)  
 石船神社の御舟石(東茨城郡桂村)  
 29〔周辺の神社(3)〕  
 石船神社の石船(神体石) (= 兜石)  
 (東茨城郡桂村)  
 鹿島神社(東茨城郡桂村)のお神倉(祭器具庫)

## 水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会役員名簿

(昭和58年度)

役員名	氏名
会長	大越 四郎 (大宮町教育委員会教育長)
副会長	鈴木 勝一 (大宮町文化財保護審議会会長)
理事	中村 昭次, 中崎 侃治, 住谷 順, 野沢 弘, 浅川 克己, 芳賀 毅, 宇留野 修, 高瀬 潤, 細谷 篤正, 外山 泰久
監事	豊田 収二, 奥村 義三
幹事	中村 淳公, 大貫 亨, 斉藤 幸子 (事務局)

## 水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会規約

### 第1章 総 則

(目 的)

第1条 この会は、町が積極的に行う水戸北部中核工業団地の誘致にともない、工業団地内における遺跡の発掘調査を行い記録保存を図ることを目的とする。

(名 称)

第2条 この会は、水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会（以下「調査会」という。）という。

(事 業)

第3条 調査会は、第1条の目的を達成するため次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 遺跡の発掘調査
- (2) 遺跡の記録の作成
- (3) その他目的達成に必要な事業

第4条 調査会の事務所は、大宮町教育委員会社会教育課内におく。

## 第 2 章 組 織

### (役 員)

第 5 条 調査会に次の役員をおく。

- (1) 会 長 1 名
- (2) 副 会 長 1 名
- (3) 理 事 若干名
- (4) 監 事 2 名

(会長及び副会長)

第 6 条 会長は、大宮町教育委員会教育長の職にある者、副会長は、大宮町文化財保護審議会会長の職にある者をもって充てる。

2. 会長は、調査会の業務を統轄し、調査会を代表する。
3. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は、会長が欠けたときは、その職務を代行する。

### (理 事)

第 7 条 理事は、次の各号に掲げる職にある者をもって充てる。

- (1) 大宮町総務民生部長
- (2) 大宮町産業建設部長
- (3) 大宮町総務民生部企画課長
- (4) 大宮町教育委員会教育次長
- (5) 大宮町教育委員会社会教育課長
- (6) 水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査正・副団長
- (7) 大宮町文化財保護審議会代表者
- (8) 地区区長
- (9) 地域振興整備公団代表

### (監 事)

第 8 条 監事は、会長が委嘱する。

2. 監事は、この事業の管理及び調査会の経理に関する事務を監査する。

### (顧 問)

第 9 条 この会に顧問を置くことができる。顧問は会長が委嘱する。

### (役員任期)

第 10 条 役員任期は、調査会の解散までとする。ただし、役員に就任した際のその職に異動があったときは、当該職の在職期間とする。

(幹 事)

第11条 調査会に幹事をおく。

2. 幹事は、会長が委嘱する。
3. 幹事は、会長の命を受けこの会の事務を処理する。

(調 査 団)

第12条 調査会に調査団をおく。

2. 調査団に団長及び調査員をおく。
3. 調査団長及び調査員は、会長が委嘱する。
4. 調査団は、発掘調査等の専門的事務を行う。

### 第 3 章 役 員 会

(構成及び職務)

第13条 役員会は、正副会長、理事及び監事をもって構成し、次の事項を決定する。

- (1) 事業計画の決定及び事業報告の確認
- (2) 予算の決定及び決算の承認
- (3) 規約の制定改廃
- (4) 解 散
- (5) その他調査会の運営に関する重要な事項

(招 集)

第14条 役員会は、会長が招集する。

(会議の運営)

第15条 役員会の議長は、会長をもって充てる。

2. 役員会の議事は、出席者の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(書面決議)

第16条 会長は、役員会を招集するいとまがないときは、書面をもって副会長及び理事の意見を聞き会議に代えることができる。

### 第 4 章 事務の管理・執行及び財務

(経 費)

第17条 調査会の事業に関する経費は、地域振興整備公団からの委託金をもって充てる。

(出納及び現金の保管)

第18条 調査会の予算は会長が経理する。

2. 調査会に属する資金は、会長が定める銀行、その他の金融機関にこれを預け入れなければならない。

(出納員)

第19条 会長は、幹事のうちから出納員を命じなければならない。

2. 出納員は、会長の命を受けて現金の出納保管その他の会計事務を行う。

(決算)

第20条 会長は、収支決算書を作成し、監事の監査を経て、役員会の承認を受けなければならない。

(その他財務に関する事項)

第21条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務処理に関する必要な規定については、役員会に諮り会長が定める。

## 第5章 委 任

(委任)

第22条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は会長が別に定める。

付 則

この規約は、昭和58年8月25日から実施する。

# 第 1 章

## 調 査 の 経 過

### 第 1 節 水戸北部中核工業団地の概要

#### I 名 称

水戸北部中核工業団地開発整備事業

#### II 開発事業の目的

茨城県は、首都圏の北東端に位置しており、日立市を中心とした従来からの工業集積のほか、昭和40年代には鹿島地区の大規模開発が行われたため、臨海部における工業集積も高くなってきている。

また、首都圏の住宅需要を充足するため、県南部地域では宅地開発が盛んに行なわれているなど、県全体としては様々な開発が行なわれ、人口の増加も著しいものがある。

一方、大宮町、大子町を中心とする大宮地域（県北山間地域）は水戸・日立都市圏の北西後背部に位置して豊かな自然環境にめぐまれているが、山間部という地形条件や交通条件等の制約のため、県内他地域と比較して経済的、社会的な立ち遅れが目立ち、産業活動の停滞、若年層の流出等の過疎化にまつわる問題をかかえている。

このような背景のもとに、茨城県は大宮地域において地域交通体系の整備や地場資源を活用した農林業の振興施策を展開してきたが、さらに、当地域に開発の拠点となる工業団地を建設して域内における安定した就業の場を創出し、就業構造の改善・所得の向上等を図ることを計画している。

この計画実現の手段として、常磐自動車道の那珂1、Cに近く有利な立地条件を具備している大宮町に中核工業団地を建設し、その波及効果により大宮地域全体の経済・社会的基盤の整備振興を推進しようとするものである。

#### III 地域振興整備との関連

##### (1) 大宮地域及び大宮町の現況と問題点

1) 茨城県北端に位置する大宮地域は大宮町、大子町、山方町、美和村、緒川村及び金砂郷村の6町村から成り、東京から140～170km圏に含まれている。水戸北部中核工業団地の建設が計画されている大宮町は、水戸市、日立市のどちらからも約20kmに位置しており交通条件に恵まれ、大宮地域の拠点都市となっている。

2) 大宮地域の人口は昭和30年には約11.6万人であったが、昭和55年には約85千人と25年間に31千人(約27%)の減少をみている。

人口構成は、20才代、30才代が少なく40才以上が多いなどの老化化傾向にある。また、就業構造では、第一次産業43%、第二次産業26%、第三次産業31%となっており、県全体(23%、33%、44%)と比較して第一次産業のウエイトが高くなっている。

このような大宮地域の中で大宮町は、昭和45年以降、人口が増加傾向に転じ、若年層の流出も減少し、第三次産業の比率が域内の他の町村と比較し高いなどの特色がある。

3) 大宮地域の産業は、第一次産業の中でも農業に特化しているが、土地利用に見る地域の約7割が森林で農地が約2割であるため、経営耕地面積が小さくまた生産性も低くなっており、兼業化を余儀なくされている。また、域内では就業の場が不足しているため、若年層を中心とする人口の流出が続いている。域内には、既存工業が多少あるが、規模、生産性は低水準にあり、女子労働依存型の業種比率が高い。

このような大宮地域の中で大宮町は、大宮台地と呼ばれる開発のしやすい地形条件を有していること、地域からの交通の結節点になっていること、水戸市のサブ商圏を形成していることなどから、地域産業の中心地的役割を果たしている。

## (2) 大宮地域の将来構想

以上のような現況を踏まえ、当地域では新しい就労の場としての産業拠点の整備とともに、住宅地整備、教育、文化、医療施設等の整備、レクリエーション環境の整備等が求められている。これらの整備については、長期的視点のもとに、段階的な整備を進めることとし、具体的には、大宮町における産業拠点整備を「ひきがね」にそのインパクトが一定の熱度達した段階で、周辺整備、各種補完的プロジェクトを実施していくことが望まれる。

このような構想の中で、中核工業団地の建設は、大宮地域全体の振興整備を図るに当たって中心的役割を果たす必要不可欠なプロジェクトとして位置付けられるものである。

### 大宮地域の計画フレーム

	昭和50年	昭和65年	うち中核工業団地
人口(人)	87,455	97,400	-
就業人口(人)	46,115	52,600	6,000
第一次産業(人)	19,955	11,200	-
第二次産業(人)	11,800	18,200	6,000
第三次産業(人)	14,360	23,200	-
工業出荷額(億円)	281	2,400	1,000

#### Ⅳ 中核工業団地の事業予定区域及び概算面積

##### (1) 事業予定区域

茨城県那珂郡大宮町小野地区及び若林地区

##### (2) 概算面積

165.5 ha (公簿面積163.7 ha)

##### 地目別公簿面積

地 目	田	畑	山 林	原 野	そ の 他
面 積 (ha)	11.9	14.2	128.9	2.4	6.3
構 成 比 (%)	7.3	8.7	78.7	1.5	3.8

##### (3) 事業予定区域の現況

1) 計画地区は、大宮町の中心市街地の西約3kmの地点に位置し、主要地方道〔大宮―御前山線〕と県道〔長沢―水戸線〕にはさまれた丘陵地である。

計画地区の南東約1.5km付近に、現在建設中の常磐自動車道・那珂I.C.が計画されており、昭和59年度に供用開始の予定である。

また、国道118号バイパスへは約2.5kmで連絡され、水戸市まで約20kmの距離にある。

鉄道については、計画地区の東約3kmに国鉄水郡線常陸大宮駅があり、水戸市、郡山市へと連絡している。

2) 計画地区は、標高25m～110mの全体的に南傾斜の地形であり、南から地区中央に深く入り込んだ沢を中心に北東側は急峻な地形で標高差も大きい。南西側は台地状になっており、標高は沢部の水田地帯を除いて50～60m程度である。

3) 計画地区の地質は、新第二紀層の泥岩が基盤を成し、その上側に第四紀成田層群の砂礫層、シルト混りの粘土層が分布しており、また地表面付近には薄くローム質土が分布している。

4) 計画地区の土地利用をみると、北半分の比較的急峻な区域は山林が殆んどであるが、南半分の台地は農地主体の土地利用となっている。特に南の那珂川側から入り込んだ沢部は水田として利用されている。

5) 計画地区における植生を大別すると、アカマツ林、スギ林、雑木林、その他(畑地、水田)であり、この中には地区中央部の尾根筋に、樹種、植生密度、樹高ともに優れ、景観的価値の高いアカマツ林が一部ある。

又、量こそ少ないが、スギの樹林が沢筋に分布しておりモミの木やカシ等の独立木も確認されている。

6) 計画地区の大部分が那珂川流域となっているが、地区北東部、主要地方道(大宮・御前山線)沿いの一部が北側を流れる玉川の流域となっている。那珂川流域に属する地区内沢部の水田には、溜池等の水利施設はなく、しほり水によって営田されている。また、当地区と那珂川との間には、上流約3kmに頭首をもつ水路(小場江堰用水路)が設けられており、下流農地への用水供給が行われている。

7) 計画地区の気候は、年平均気温12℃内外、年降雨量1,200～1,300mmと比較的少なく、他に降雪、強風などの災害の要因も少ない、温暖な気候であるといえる。

#### (4) 土地利用規制等

##### 1) 都市計画法関係

昭和56年3月に都市計画区域に編入、昭和56年12月に工業専用地域として用途地域に指定され、さらに、昭和57年3月に道路、公園、都市下水路の計画決定がされている。

##### 2) 農工法関係

昭和49年3月に計画区域の一部(約20.4ha)について農工実施計画が策定され、さらに、昭和57年3月に農工計画区域が団地計画地全域に拡大された。

##### 3) 工場適地

昭和50年3月に計画区域の一部(約22.0ha)が、工場適地に指定され、さらに、昭和56年3月に団地計画地全域に拡大された。

##### 4) 農振法関係

昭和56年3月に農用地区域の指定解除(約2.9ha)がなされ、さらに、昭和56年12月に都市計画法に基づく用途地域の指定に伴ない、農振地域から除外された。

##### 5) 農地法関係

農地15.9haについて

農地法第5条第1項の規定に基づく許可を昭和58年9月16日付をもって農林水産大臣より受けている。

##### 6) 環境基準

排水先の那珂川の水質汚濁に係る水域類型の指定はA類型である。

## V 導入業種

広域からの要請として北関東に高次の電気、機械及び金属加工型工業集積地帯を形成して行く

べきであること、また域内からの要請としては、地域に若年層を定着させ地域産業の振興を図ること、等の2つの大きな要請に応えるために核企業として、

- ① 鬼怒川左岸に展開することが想定される自動車関連企業
- ② 日立・勝田地区からの飛び出し企業及び日立技術集積への接近企業
- ③ 農林業振興に結びつく地場資源依存型企業

の3つの企業導入を考え、更に京浜地区からの労働力依存型新設・移転企業の導入、関西地区からの市場開拓型企業の導入、あるいは水戸・日立都市集積拡大に伴う地域需要依存型企業の導入等も含め、当地区に導入すべき業種を下記のとおり想定した。

- ・自動車関連組立機器（自動車車体、自動車部品）
- ・同上関連（鋼材加工、工業用ゴム、金属打抜、ボルト・ナット）
- ・生コン・コンクリート製品等（生コン・コンクリート製品、砕石、異形鉄筋）
- ・地場資源加工製品等（野菜罐詰、紙製容器）
- ・電子応用及び重電（電子計算機、重電）
- ・同上関連（その他金属、その他機械、電線加工、非鉄合金）
- ・建設・建築関連（鉄骨・鉄塔、サッシドア）

## VI 土地利用の基本方針

- (1) 計画地区周辺地域との調和、特に地域住民との融和を図るとともに、地域住民の生活水準の向上に資する土地利用計画を策定する。
- (2) 計画地区内の自然条件、特に地形、地質及び植生を考慮しつつ現況緑地系の確保に努め、景観的にも質的にも整備されたインダストリアル・パークを志向するものとする。
- (3) 工場用地は、導入業種及びその規模等の多様性に広く対応できるようにし、かつ現況地形特性を十分生かした土地利用計画とする。
- (4) 造成計画については、周辺の既設工業団地及び周辺地価を勘案して、コスト・ミニマムな計画とするとともに、造成中、造成後の防災対策について十分留意した計画とする。
- (5) 計画地区周辺農地に対する影響を配慮し、極力現況流域を維持するものとし、農業用水の確保について、利水の現況を十分に把握し、適切なる対策を立てるものとする。

## VII 工場用地等の整備の基本方針並びに、土地利用区分、造成工期及び事業費概算額

### (1) 工場用地等の整備の基本方針

- 1) 工場用地は、従来の企業誘致に自由度をもたせる計画となるように、1ロット当り2～5haを標準とし、工場用地への進入は原則として準幹線道路からとする。

なお、現況の緩斜面で立地企業が容易に活用でき得ると判断されるものは、部分的に工場用地に取り込み、工場緑化の一部となるように計画する。

- 2) 幹線道路は、計画地区北側に接する市用地方道〔大宮―御前山線〕と南側を走る県道〔長沢―水戸線〕を南北で接続し、道路沿いに幅広い公共緑地を確保し、かつ工場用地よりも低いところを通るパーク・ウェイ的性格を有するものとする。

準幹線道路は、各工場用地へのアプローチ道路とし、また地区内排水路を考慮するとともに、工場用地の分割、統合への対応ができ、かつ立地企業の生産活動が効果的に行なえる道路配置とする。

- 3) 計画地区中央部南寄りの幹線道路沿いに、工業団地従業員及び地域住民の共通の利便に供する団地センターを配置する。
- 4) 地区中央部に公園を配置し、施設機能を集約することによって、団地関係者だけでなく地域住民の積極的な利用が図れるようにする。

また、周辺環境との調和及び自然環境の保全のため、団地周辺部に緑地を配置する。

なお、公園緑地の面積に関しては、工場立地法等の緑地の量に関する制約を十分満足できるように配慮する。

- 5) 計画地区に近接して南側には、大きな流通能力を有する一級河川那珂川が存する。この地理的条件と雨水のすみやかな排除という防災上の見地から、計画地区内の雨水是那珂川へ直接放流することとする。
- 6) 生活污水及び工場廃水は、各立地企業により茨城県公害防止条例に定められた基準にまで個別に処理された後に都市下水路に放流するものとする。



第1図 那珂郡大宮町の位置 (○印のところ)

(2) 土地利用区分と面積

土地利用区分と面積は次のとおりである。

	名 称	面 積 (ha)	構 成 比 (%)	備 考
可 処 分 地	工 場 用 地	104.5	63.1	
	うち 敷地内緑地	14.0	8.5	
	センター用地	1.5	0.9	
	配水池用地	0.5	0.3	
	小 計	106.5	64.3	
緑 地 系	公 園	17.2	10.4	
	緩衝緑地	32.7	19.8	池 0.6 (ha)
	小 計	49.9	30.2	溜池 1.0 (ha)
他	道 路	9.1	5.5	
	合 計	165.5	100.0	

(3) 造成工期

概ね昭和58年度から昭和63年度までとする。

(4) 事業費概算額

事業費の概算額は、直接建設費で約78億円である（昭和55年度単価）。

（関連公共公益施設整備（約38億円）に係る（約16億円）を含む）

## Ⅷ 関連公共公益施設の整備の基本方針

- (1) 団地北側アクセス道路となる主要地方道〔大宮―御前山線〕は、団地内幹線道路との接続ができるよう局部改良を図る。
- (2) 団地幹線道路は、主要地方道〔大宮―御前山線〕と県道〔長沢―水戸線〕を結び団地を縦貫するルートとし、都市計画道路として整備する。
- (3) 雨水排水は、都市下水路として整備する。
- (4) 公園・緑地は、都市公園として整備する。
- (5) 上水は、町営上水道事業により供給する。
- (6) 工水は、工業用水道事業により供給する。
- (7) 生活污水及び工場廃水は、個別処理後共同排水管により都市下水路に放流する。

## 建設スケジュール

年 度		57	58	59	60	61	62	63	64	65
調 査 ・ 設 計		←								
第1期	造 成		←	→						
	分 譲				←	→				
	操 業						←	→		
第2期	造 成				←	→				
	分 譲							←	→	
	操 業								←	→

(地域振興整備公団の資料による)

### 第2節 発掘調査に至る経過

那珂郡大宮町の水戸北部中核工業団地内にある源氏平遺跡について茨城県教育委員会より、那珂郡大宮町教育委員会の調査依頼についての話を耳にしたのは、1983年8月10日頃の夏の暑さがきびしい日であった。その日は、1982年(昭和57年度)に調査した国道50号水戸バイパスの発掘調査資料や、茨城県水戸市元石川町所在の雁住沢遺跡の発掘調査資料の整理作業などを行っていた日でもあった。1983年(昭和58年度)は、機会があり茨城県教育委員会の委嘱をうけて、県南地区の理蔵文化財指導員という役職についていた。しかし担当地区は、県南地区であったので、その辺の地区の相違はどう対処したらいいのかと、教育委員会に打診したところ、「現段階に於て、県南地区に早急に調査対象となる遺跡は見当らない、また、水戸地区内の遺跡についての調査も支障はない」との返事があった。そういえば、以前に、同じ、大宮町鷹巣地区にあった、日立那珂精工の工場建設予定地内の鷹巣遺跡の調査について、わずかながら、タッチしたことが思い出された。それは、この当時(昭和56年度10月頃)、木葉下窯跡の見学後に知見し得た遺跡で、住居跡、掘立柱建造物・土坑等が検出され、多くの墨書土器とともに、その集落のあり方が気になっていた奈良・平安時代を中心とする遺跡であった。その後、報告書の作成を大宮町教育委員会より依頼された。資料が不備等報告書の作成については、不本意ながら、僅かの間に作成せざるを得ない事情を察していたので、全面協力しつつその解決を計った遺跡でもあった。さて、このような以前の事情が思い越され、何かと、深い関係にあった土地柄であったので、今回調査対象になっている遺跡の概況等を聞いてみることにした。

8月の中旬頃、茨城県教育委員会内において、大宮町教育委員会と外山とで、三者会談を行った。



源氏平遺跡の位置  
(×印)

その中で、県教育委員会より、以前(昨年度11月頃)に、当工業団地内の遺跡の有無についての確認調査を行っており、対象となる遺跡については、地番を含めて現地での範囲等を確認している、との話が出された。また大宮町教育委員会では、調査を行う際には、昭和56年度に遺跡の発見届が出された、源氏平遺跡を中心として、その調査範囲を限定して調査を行って欲しい旨の意見が出された。しかし、行政調査の難しさを肌身で感じており、私は、態度を保留した。

しかしその後、大宮町教育委員会の方々の熱意により、現地の状況を見ることとした。布目瓦、土師器が僅かに発見されており、奈良・平安時代の遺跡としての可能性が高いというところに興味を感じたからであった。この1週間後、現地に於て遺跡の状況を視察し、その対象地域が開地を中心とする地域であることを確認した。それは、舌状台地上のほぼ先端に位置しており、遺物等の散布もまばらな、山奥で、回りに人気の少ない、鳥獣保護地域内にある静寂な遺跡という印象であった。

1983年8月25日、地域整備振興会の方々を含めた水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会は、最終的に外山の返事をまわって、担当者として、了承し、ここに結成された。

埋蔵文化財発掘届(大教委発393号)は、文化財保護法第98条の2第1項の規定により、大宮町教育委員会(教育長 大越四郎)名で、関係書類を添えて昭和58年8月22日付で提出された。

### 第3節 調査日誌

8月29日(月)〔晴〕 源氏平遺跡の調査区域の除草作業。基準グイの設定。それらと併行してテントの設営を行う。今日は、非常に暑さで、照りつける太陽と、野焼きの災とで、作業にあたった我々は、その猛烈な熱風の洗礼をうける。遺跡の現状写真の撮影を行う。

8月30日(火)〔晴〕 昨日設定した基準グイを中心に調査区域に最も適合するグリッドの設定を行う。NIグリッド及び、D12グリッドを始めとして掘り始める。なお、グリッドの名称は、南東方向へのものは、北から順番に1～20グリッドとし、北東方向のものを南西よりA～Pグリッドとする。

8月31日(水)〔晴〕 昨日に引き続きN4グリッドとK13グリッドの掘り込みを続ける。KBグリッドより、土師器の小片が出土する。

9月1日(休)〔曇〕 K 12グリッドを掘り下げても遺構は確認されない。また、西側の林中(E, Fの15, 16グリッド)の古墳状の盛り上がりの部分(古墳として登録される)に東西及び南北にトレンチを設定する。東西トレンチより掘り始める。4～5人で掘り進めるが、土中には木の根がはびこっており、しかも、蚊やあぶなど悩まされる。このトレンチの先端に落ち込みが確認され、土器片等も出土すること等から住居址と考え、これを第1号住居址とする。

9月2日(金)〔晴〕 K 11グリッドの掘り込み。前日に引き続き今日は、山林中の南北トレンチの掘り込みを始める。僅かに土師器片が出土する。

9月3日(土)〔曇〕 1号住居址のプラン確認。トレンチの部分は、住居址の南側のコーナーであることをつきとめる。しかし、古墳状のマウンドは、土層の状態を考えれば、やはり、後世のものである事が明らかとなる。トレンチのセクション図をとる。この中に、1部に柱穴らしい落ち込みを確認する。

9月4日(日)〔晴〕 今回の調査は、当初より緊急を要する調査であるので、調査期間中は、日曜日も調査を行い、できるだけ、調査を入念に行なうことを申し合わせる。K 9グリッドを調査、当初より、木調査区域の北方よりの部分には遺構はおろか、土器片等も検出されない。昨日に引き続き1号住居址のプランは東西トレンチを拡張して確認しつつある。この際、1部土器片が多量に確認され、焼土も存在することからカマドではないかと思われる。

9月5日(月)〔晴〕 K, L, M列のグリッドを掘り始める。表土がやや厚く、覆乱もみられたので、一部、バックホーンを使用し、調査を進める。また、山林中の調査も、人力では、非常に困難な状態にあったので、木の根等は、この重機により除去する。南北トレンチを西方に拡張する。そこで、住居址のプランの一部を確認する。第2号住居址とする。

9月6日(火)〔晴〕 L・K列のグリッドを掘り進める。併行して、第1号住居址の掘り込みを開始する。住居址内に東西・南北の2本のセクションベルトを残しておく。

9月7日(水)〔曇〕 第1号住居址の掘り込み。カマド前付近より、須恵器の大型の高台付杯の破片や甕形土器片等がかなり砕けた状態で出土する。また、破片の1部が磨滅していることなどから、投棄された土器類であるものと思われる。主要な遺物はレベルを確認しつつ調査を進めるが、第1層と第2層のものが多く、床面直上のはほとんどない。

9月8日(木〔雨〕) 雨天の為に現場での作業は行えず、仮設のテント内で、昨日迄に発見された土器片の洗浄を行う。現場では、水が得られないので、台地下にある家の「井戸水」をもらいうけポリエチレンの給油用の箱に5～6杯分汲んできて使用する。また、テントの屋根の一部にたまった水や雨だれも同時に利用している。洗浄していくと、K12グリッドより出土した土器片の中に、弥生式土器が混入しており、中期頃のものではないかと思われる。付近に、再葬墓として著名な小野天神前遺跡があり、その時期の遺構が存在する可能性もあるのではないかという希望を抱かせる。

9月9日(金〔晴〕) 第1号住居地の床面の検出。東壁の1部に張り出しがみられ、ここが、ローム土により補強されている。南壁付近に須恵器の環形土器が確認される。レベルをとる。カマドの煙道部に甕形土器が使用されていることも明らかとなる。

9月10日(土〔曇〕) 昨日に引き続いて、第1号住居地の床面の検出を行う。床面は、ほぼ平坦で比較的よく締まっている。柱穴のプランも確認する。住居地の周囲も約3～4メートル程拡張している。そこに、柱穴を確認する。これらの1部は、既に東西トレンチで確認されている。J列とI列とは、山林と畑地の境界であるが、約40メートルのトレンチを設け掘り進める。

9月11日(日〔晴〕) 第1号住居地の北側の部分に、住居地の1部が確認され、第4号住居地と名付ける。また、J列トレンチを掘り進める。併行して、本日より、日曜日及び雨天の日を中心に土器の洗浄を行うことにする。

9月12日(月〔曇〕) 第2号住居地の掘り込みを開始する。東西のセクションベルト付近に、内照の環形土器片が底部を上にして発見される。この土器には、「山井」の墨書があり、作業員らも物珍しらしく、「山井」の意味するところをしきりに話しあっている。南西より鉄片が出土する。

9月13日(火〔曇りのち晴〕) 第2号住居地の周囲を拡張する。北側に接してある第3号住居地のプランがより明確になる。第1号住居地は柱穴の掘り込みを行い、セクション図作成のための削り出しを行う。柱穴は、重複しており、この床面下に更にもう1枚の床面があるようである。

9月14日(水〔晴〕) 第1号住居地の平面図の作成。J列の13グリッドより東方に約30メートルのトレンチを設定し掘り込みを行う。遺構はいまのところ発見されていない。

9月15日(木〔曇〕) 昨日のトレンチの東寄りのところで(M・Nの13グリッド)、住居地が

確認される。(最初5号住居址としたが、後に調査の都合上第7・第8住居址と変更する)土器片もたまってきたので、洗浄と注記を行った。

9月16日(金)(雨) 雨夫により発掘調査作業は中止する。昨日より行っている土器片の洗浄・図面の整理等を行う。テントには、調査開始当初の暑さと比べ、いくらか涼しくなっている。少しづつ秋の気配が忍びよってきた感じである。茨城県教育委員会の先生方の遺跡を訪れる日程が20日であることを確認する。

9月17日(土)(晴) 大宮町にある地域整備振興公団の出張所へ航空写真や計画図を取りにゆく。第3号住居址・第4号住居址のプランの確認。第3号住居址の外側(東壁と西壁)には、柱穴がそれぞれ2本づつあることが判明する。現在までに確認された住居址の中では、第1号住居址とともに2例目である。

9月18日(日)(晴) 第3号住居址・第4号住居址の掘り込みを開始する。第3号住居址の北東方Aグリッドより掘り進めることとする。第4号住居址の西側の部分が一部はり出しており、この部分を確認するためにローム面を掘り込んだ。ふく土には、20から30センチメートルのロームブロックが見られる。これは住居址の壁面を補強するために、ロームブロックを入れたものようである。

9月19日(月)(雲) 第4号住居址の掘り込みを行う。カマド全面の部分より破片となった土器類が数個確と共に散乱した状態で発見される。また、住居址の南側の部分には白色粘土が50から60センチメートルの範囲で確認される。これは、第1号住居址の東側で見られた入口部に相当する「タタキ」のではないかと推測することができるものかもしれない。

9月20日(火)(晴) 第2号住居址の住穴の掘り込み。北東のピットの底部より須恵部の環形土器の平次品が出土する。また、第3号住居址の北東の床面より鉄片、西側の中ほどより紡錘車出土する。午前中、茨城県教育委員会の新井洋三郎、能島清光、高根信和の先生方が来訪する。これに伴って、居合地区の試験掘所の現地確認をする。

9月21日(水)(晴のち曇) 第2号住居址より第3号住居址に重点を移し調査をすすめる。第3号住居址は、土器片が比較的少なくカマド内に環形土器が赤変して出土する。住居址の南側を中心に鉄製品、土玉などが出土する。本住居址は、形態、出土品から察するに、半住居半工房の性格を持

つものであろうか。

9月22日(土) 午前中は、昨夜降った雨の為に、土器片等の洗浄を行った。また、午後は、9月20日に確認した厩合地区の草刈りを行う。厩合地区は、源氏平遺跡の小支谷をはさんで立地する遺跡である。この場所へ行くには、自動車で行くとかなりの大回りになってしまうので、谷を下って徒歩で現地に向かう。約10分程の道のりである。

9月23日(日) 厩合遺跡のトレンチを設定し掘り始める。出土器片等の出土遺物もほとんどみられない。

9月24日(月) 小雨模様であるが調査を行うことにする。厩合遺跡のトレンチを2本掘るが、遺構は発見できない。地籍図により、対象地域が限られていた為に調査は極めて限定される。他の地点で採集された土師器片や須恵器片を手掛りに遺構の存在も予想されるが残念ながら確認することができなかった。

9月25日(火) 昨日で厩合地区の調査を終了する。発掘調査用具類を自動車等で引きあげてくる。厩合地区の調査は、1部、バックホーンで表土をはいたが、厩合地区へのバックホーンの輸送は、困難を極めた。源氏平遺跡にあったバックホーンは、コンクリート舗装されている曲りくねった下り坂を下った。台地の裾を走る農道を通ったところまでは順調であった。対岸の台地の裾へ到達するには水田の中を走る約3メートル程の農道を通らなければならない。しかも、その途中には、小さな幅約1メートルの小川が流れていた。ここで、バックホーンは、そのぬかるみの中に「ブンノマッテ」しまった。キャタピラの部分を掘りおこし、その下に付近にあった木の枝をかませて、何度か前後に動かして脱出した。やはや、大掛りな作業を行うしかないと思ったがホッと安心した。対岸の台地の裾へ到着すると、今度は、巾約2メートルの小道を上った。この道は地面に露出している小石の為に小砂利が敷き詰められた様な状態になっていた。途中で急カーブがあった。バックホーンは、片側のキャタピラの3分の2程が曲り切れずに宙に浮いた。もはや、絶対絶命で落ちると思った。脳裏に新聞記事になる様子が浮かんだ。しかし、全く幸運と言っていい程運は味方をしてくれた。運転手の苦痛を察するにはあまりにも現実的であった。下見の甘さによるものとして今後大いに反省しなければならなかった。

源氏平遺跡第4号住居址の掘り込み。第3号住居址のカマド断面図作成。第4号住居址では、床面が非常に緊く締っており、土壌と重複する部分は、特に念入りに強く踏み締められている。柱穴は確認できない。

9月26日(月)(曇) 第4号住居址の掘り込みを引き続き行った。カマド前面の土器片は、北側から投げ棄てられた様な状態で出土している。こぶし人のやや扁平な礫がみられる。

9月27日(火)(曇のち雨) 先日、床面を検出し終った第1号住居址について、掘り方の確認の為の床面をはずす作業を行う。この結果、床面の下にもう1枚の床面がある事が新たに確認される。2枚目の床面は、北側より甕形土器片が発見され、須恵器環形土器もみられる。また、南壁付近より石錘が出土する。床面は、粘性が強く、かなりベトベトした様な状態である。側溝は確認できない。

9月28日(水)(雨) 雨の為、発掘作業は中止する。今後の調査の進め方についてミーティングを行う。

9月29日(木)(曇時々晴) 2枚目の床面が検出された第1号住居址の掘り方の検出作業を行う。掘り方は、かなり凹凸が激しく、掘り方は、北側へ向って深く、カマド前面のあたりが最も深くなっている。第1号住居址のカマドの立ち割りをを行う。カマドの煙道の部分には、真新しい土器を2個体分、ややらずすようにして逆位に使用している。上位の1個は、先日の住居址の確認の段階で幾分破損した様であるが、大方には影響がない。下位のもは、垂直的に理め込まれている。この様なものは、以前に調査に関係した事のある鷹巣遺跡第6号住居址と同様ではなかったかと記憶している。第2号、第3号住居址の床面の調査、第5号、第6号住居址の掘り込み。

9月30日(金)(晴) 前日に引き続き第1号住居址のカマドの調査(土層断面の実測・土層説明など)。第2号住居址のカマドの立ち割り。第5号、第6号住居址の掘り込み。午後、地域整備振興会の大宮出張所内にて今後の調査の進め方について話し合いを行う。

10月1日(土)(晴) 第2号、第3号住居址の床面の調査。第3号住居址のカマドの立ち割り。第3号住居址のカマド内部には、赤変した甕形土器が破片で出土する。平面図の作成。平面図にしてみると、この住居址が、ねじれた様に曲っており、外側に柱穴を伴う点が判明する。第1号住居址の写真撮影を行う。また、教育委員会内で、調査の経過の報告を目的とする調査会の会議を10月8日に開くことが正式に決定する。教育委員会の中で行われた話し合いで、地域整備振興会の大宮出張所の調査に対する基本的姿勢がより明らかとなる。つまり、「公団では、開発よりも文化財調査が最優先する。」という点である。

10月2日(日)(晴時々曇) 第1号住居址の全測図の作成。また、今日は、大宮中学校のかわいらしい女生徒が2人見学にやってくる。このような山の中まで、さぞかし大変だったろうと思いつつくれぐれも気をつけて帰るようにと言う。

10月3日(月)(晴) 第2号住居址の貼り床を取り去ってその掘り方を検出する。また、カマドのセクション図の作成。第3号住居址のセクションベルトを取り去るが、南壁より、土鍾が出土する。(レベル=53.944メートル) 第4号住居址の遺物上げと出土状態の写真撮影を行う。

10月4日(火)(晴) 第3号住居址の床面の調査。この床面の中央付近には、浅いピットが確認されるが、後に修復したらしく、覆土の一部は強く踏み固められている。午前中に、調査会の打ち合わせがあり、茨城県教育委員会より、「源氏平遺跡の調査は、調査対象地区の遺構の個所を調査し、その結果を調査会の席上で協議するように。」との主旨の連絡がある。

10月5日(水)(曇時々晴) 第3号住居址の床面の調査。床面は、非常に固く締っており、しかもほとんど平坦であり、貼り床ではない住居址である。

10月6日(木)(曇時々晴) 第4号住居址の床面の調査。第4号住居址のカマドは、第5号住居址南壁上に構築されており、第5号住居址が完全に埋まってから第4号住居址がつくられた様である事が明らかになる。第2号、第3号住居址の平面図を作成する。

10月7日(金)(快晴) 第4号住居址は、先日確認されたカマド前面の土器片を除去し、カマドの調査を行うが、投げ棄てられていた様な土器片は、全て甕形土器であり、全く他の器種を含んでいない。また、本遺跡で特徴的な現象である「土器の甕形土器の底部がほとんど出土しない」という点を改めて確認する。何か他の目的に再使用している点も充分考えられる。カマドには、泥岩質の比較的柔らかい切石を両袖に使用しており、カマドの内面にあたる部分には、黒いススが付着しており、生々しい。

10月8日(土)(雨時々曇) 大宮町福祉センター内で役員会が行われる。その席上、公団側より、昭和59年1月より工事を着工したい。また、遺跡は、緑地化して残す方向では設計変更を余儀なくされるので、あくまで記録保存を計ってゆきたい主旨の考えが明らかにされる。また、残土の処置、樹木の伐採についても討議される。住居址出土遺物の内訳等を含めた調査の内容を書面をもって報告する。その後、遺跡では、既に調査してある住居址の平面図を作成する。第4号住居址の上

層断面の実測を行う。この地が那珂郡阿波郷丈部里として認められるとの見解を再度述べる。

10月9日(雨) 雨により、テント内において、土器の洗浄・注記を行う。墨書土器片が確認される。須恵器の大型の甕形土器片に擦痕・キズがみられ台に利用されたかとも思える。

10月10日(月)(快晴) 畑地内で確認されている第1号、第8号住居址の掘り込みを行う。壁面は比較的浅いようである。その南側の住居址が重複している住居址のプラン確認の作業を行う。この作業中に、攪乱された土の中より1片の瓦片を発見する。瓦片は、以前に表採されたり、第1号住居址付近で僅かにみられており、注意していた。早速洗浄したところ、それは、全く思いもかけぬ文字瓦である。ふと「日本の粘土<sup>スレック</sup>板」なのだと思った。ぬけるような青空の下で感無量である。

10月11日(火)(雨時々晴) 7・8号住居址を中心に作業を行う。この部分は、畑地だったので堆積土も比較的柔らかである。しかし、攪乱も著しい。拡張区の樹木の伐採。

10月12日(水)(晴) 山林中のF～J列のグリッドについて、重機による表土剥ぎを行う。これは、先に、K列で発見した弥生中期頃の破片と思える土器片に伴う遺構の発見を目的とするものである。しかし、土器片すら出土しない。

10月13日(木)(曇時々雨) 第7号住居址の床面の検出とカマドの立ち割り。第7号住居址では、住居址の両側に柱穴がみられる。カマドからは、構築の際に使用された、円柱状の石が2個出土する。第9号・第10号住居址の掘り込みを行う。

10月14日(金)(曇時々晴のち雨) 第7号住居址のカマドの土層の実測。第8号住居址は、トレンチャーによりかなりの攪乱をうけている。午前中には、茨城県歴史館の阿久津久・瓦吹堅研究員の両名が見学を訪れる。阿久津氏は、「小野天神前遺跡より、文字瓦が出土しており、「丈部里人」の文字がヘラ書きされている。また、「丈部」の銅印も発見されている。」との話題が出される。瓦吹氏は、「J度、この遺跡の向い側にあたる台地上の那珂川べりの地点に於て、以前に遺跡の調査の際、たまたま小用で側道に入ったところ、長方形の基壇状のものが、ゴボウ畑の中にあった。」との話をされる。これらの新しい知見は、本遺跡を考える上で、極めて重要なものであると認識する。御教示いただいた先生方に感謝する。また、この付近一帯には、「何かある」と思えてならない。銅印は「丈部私印」と判読しているが如何であろうか。

10月15日(土) 第9号・第10号住居址のエレベーション図作成。第10号住居址のほぼ中心部は、耕作等により、かなりの攪乱を受けている。いも穴、トレンチャー等の「傷」が生々しい。新旧関係は、9→10号住居址の順である。第8号住居址のカマドの土層断面の実測図作成。土器片が少量出土する。第10号住居址の東側には、もう1軒の住居址が確認されるが、トレンチャーが、十文字に住居址を通っている。壁面の立ち上がりもはっきりしない。

10月16日(雨) 雨により発掘調査は行えない。仮設テント内で、出土品の整理と土器類の洗浄、注記を行う。手伝いに来ていた高校の生徒が、源氏平遺跡の雨上がりですべりやすかった下り坂でころんで、手のひらをすりむいてしまう。早急救急箱より薬品を出して手当てをする。馬頭観世音がたくさんあるところの曲り角は、コンクリートの簡易舗装になってはいるが、これがかえって災いしたらしい。自転車をサニー1200GLのトランクに乗せて大宮町の自宅まで送り届ける。調査には、往々にして危険が伴う、充分注意していても、不可抗力の事故もありうる。そういったものに対しても、日頃よりその対応に心がけるようにすることも調査者の責務の一つであることを痛感する。

10月17日(晴) 第7号住居址のセクションベルトをはずす。第8号住居址の床面の状態を調査する。第9号～第11号住居址は、切り合いをより明らかにする為に床面・壁面の状態を慎重に調査する。

10月18日(曇) 山林内の樹木の除去。地膨水状になっている地点の調査、出土遺物なし。最近のものである点を確認する。一部変形していたが、削平された様になっている部分は、畑地であったようである。これは、地籍図でも確認され、その地点が、境界であることがわかる。午後、大宮町文化財審議会(会長藤田稔)の先生方が来跡される。藤田先生は、大宮町鷹巣の出身で民俗学・考古学に見識をもっておられる先生である。藤田先生からは、地膨水状になっているところは、後世のもので、台地の裾近くにある。馬頭観世音等の石塔と何らかの関連があるのではないかと話される。昭和59年度には、大賀小学校の新校舎建設に伴い、先土器時代などの遺跡として知られている堀巾遺跡の調査が行われる予定があるとの話題を耳にする。今日は、調査を手伝っていただいている作業員の皆さんに昼食をごちそうになる。メニューは、新米のきのこ飯、わかめのみそ汁すじょう油、ゆでたまご、きゅうり、はくさいのつけ物、りんご等の豪華なものである。食欲の秋という事も手伝って最高のものである。十二分に満足し、この味を忘れずに、今後の調査のかたとしてゆきたい。

10月19日(水)(曇のち雨) 午前中に、地域整備振興公団の豊田課長が訪れる。最も調査に理解を示しており、調査・遺跡の説明に熱心に耳を傾けられる。昼頃、雨が強く降ってきたので作業は、午前中で中止する。

10月20日(木)(曇時々晴) 第4号・第5号・第6号住居址の調査を行う。

10月21日(金)(雨時々曇) 第5号・第6号住居址の第2層の掘り込み。床面を一部確認するが遺物の出土は比較的少ない。土器の洗浄を行う。

10月22日(土)(晴) 第5号住居址の2層の掘り込み。本住居址は、壁面が高く、カマドの煙道の部分も丸く確認できる。カマドは、焚口がやや西側へ曲っている。右袖上に、長胴甕の破片が発見される。内面には、ややススが付着している。

10月23日(日)(晴時々曇) 第5号住居址のセクション図の作成と、セクションベルトはずしを行う。第6号住居址の床面の調査。

10月24日(月)(晴時々曇) 第5号住居址の東西ベルトの一部には、ビットが確認され、その底部には、粘土がみられ、丁度住居址の床面上に敷いた様になっている。第5号住居址東側の山林内の拡張(写真撮影用)

10月25日(火)(晴) 第5号住居址のセクションベルトをはずす。柱穴の位置を確認する。それに併行し、第11号住居址の掘り込み。第10号住居址との壁面の高さは確認できる部分では、第11号住居址の方が低い。須恵器の蓋形土器片が出土する。これは、トレンチャーにより破壊されている。

10月26日(水)(晴時々曇) 第5号住居址の柱穴の掘り込み。第11号住居址の床面の確認と柱穴の掘り込み。南西の柱穴は、一部第10号住居址の床面を掘り抜いており、第10号住居址の柱穴も発見される。

10月27日(木)(雨のち晴) 第11号住居址の床面の確認と壁面の掘り込み。J-K列の4~13グリッドの土層断面図作成。このトレンチは、山林と畑地の境界だった為か、いも穴が連続してみられ、第8号住居址、第11号住居址付近の畑地の境界の様子と非常によく似ている。第12号住居址の掘り込み。

10月28日(金)(晴) 第12号住居址の掘り込みと土層断面図の作成。第11号住居址は、比較的小型の住居址である。細かな土器片が出土しており、南東のBグリッドより、灰細陶器が発見される。本遺跡で唯一のものである。また、西北のコーナー付近にはピットか2つある。

10月29日(土)(晴) 地膨水状になっている地点の掘り込み。1部に焼け石と近世のかわらけが出土する。土層は黒色土で明瞭に分層ができない。第12号住居址の床面の検出と柱穴の確認を行う。柱穴は確認できない。本遺跡の住居址の形態は、比較的安定しているが、柱穴のあり方には、バラエティーがあるようである。(加藤雅美氏が来跡)

10月30日(日)(晴時々曇) 第11号住居址と第10号住居址の切り合いの再確認を行う。第7号住居址～第11号住居址の写真撮影、第11号住居址のカマドの土層断面図の作成。このカマドは、比較的小さなもので、土師器の細片が僅かに出土する。

10月31日(月)(晴) 第5号住居址のカマドの立ち割り。第12号住居址のカマドの立ち割り。第5号住居址に使用された粘土は、その粘性が強く中々移積ゴテで掘り進めない。一方、第12号住居址には、切石が使用されており、土師器の埴形土器が出土する。J-K列の3グリッドで住居址が確認される。

11月1日(火)(快晴) 第12号住居址のカマドの断面図及び平面図の作成。第5号住居址のカマドの土層断面図の作成。第5号住居址のカマドは、煙道の部分が非常によく残っており、煙道が赤変している様子や、ススの状態などがわかる。昨日発見された住居址を第14号住居址と名付けることにする。第14号住居址は、南側より掘り込みを始めるが、実に思いもかけないものが出土する。第14号住居址は、その北側がすぐに山林になっており、畑地のいわば片隅の角にある。壁面の立ち上がりは低い。東西と南北のベルトを設定する。その東西ベルトの西側のところより何と「文字瓦」が出土したことである。文字瓦は、先に出土しているが、木例で2例目である。最初、内面を下方にしていたので、外面にある糸切り等より瓦類の中でも比較的時代が下るものであると思われる。しかし、文字があるとは考えもしなかった。文字は、「鳥取文〇」とあり、最後の「文字」がよくわからない。赤く色が変化しており、二次的に火を被ったものと観察される。

住居址の東北側はもう1軒の住居址があり、住居址(B)と名付けることにする。したがって、文字瓦出土の住居址は(A)とすることになる。第14号住居址(A)のカマドは、第14号住居址(B)により破壊されている。あるいは、その瓦の出土状態から、(A)のカマドに使用されていたものではないかと考えられるものである。その他、この瓦が使用された寺院・駅などの存在が大きくクロ

ーズアップされてくる。付近には、やはり何かあるにちがいないと考える。文字瓦を発見した喜びに足どりは軽やかに帰宅する。

11月2日(水)晴 第14号住居地の床面の確認。床面は、よく締っており、柱穴はないようである。(B)には、住居地が縮小された痕跡があり、カマドには、甕形土器が使用されていることが判明する。また、細かな瓦片が出土し、他の住居地とは、その出土遺物がかなり違っていることが明らかである。第14号住居地は、その位置、出土遺物などから、他の住居地とは差異があることが何を意味しているか、今後の検討にゆだねることとする。

11月3日(木)晴時々曇 第11号住居地の平面図の作成。地影水状になっている地点に入れたトレンチに住居地が確認されたので、調査を行いたく、町教育委員会に打診する。トレンチの拡張。そのプランの確認。

11月4日(金)晴 昨日確認された住居地を第15号住居地とする。第15号住居地のプランの確認作業を行う。やや南北に長い住居地である。外側には、柱穴は確認されない。第11号住居地のレベル計測をする。掘立柱建物地の平面図の作成とレベル計測を行う。第15号住居地の西側には、もう2軒の住居地が確認され、第16号住居地、第17号住居地と名付ける。この2軒は重複している。第15号住居地の掘り込み。

11月5日(土)雨 雨のために、久しぶりに土器の注記を行う。だいぶ土器片もたまってきており、ホッとす。体を休めるのによい雨である。

11月7日(日)雨のち曇時々晴 思いもかけないものが出土したようである。第15号住居地は一日より掘り込みを始めているが、カマドの右袖上には、土師器の環形土器の出土する。最初に出土した環形土器の底部は、糸切り痕が残っており、かなり腐滅している。次に、やや下方より同じ様な形の環形土器が出土する。内面の土を払おうとすると、その内面に一部茶色の何か「センイ」状のものがあるのがわかったので、丁寧に土を払うと、内面一帯に、この薄い「センイ」状のものがこびりついた様な状態であることがわかる。次の瞬間、以前に多賀城跡で見たことのある漆紙ではないだろうか考える。更に、2年程前には、石岡市の鹿の子遺跡より大量の漆紙文書が出土して大きな話題をまいたことが思い出される。しかし、このような山の中に、しかも、住居地よりの出土である。しかし、漆紙であると思われてならない。環形土器の底部には、墨書があることがわかる。文字ははっきりしない。第15号住居地は、舌状台地の最も先端部に位置している。第16号

住居址、第17号住居址の掘り込み。

11月8日(晴) 興奮がさめきらない。第15号住居址の床面と壁面の調査。カマドは、第5号住居址と同じ方向に焚口がある。第16号・第17号住居址の掘り込み。第17号→第16号住居址の順になっている事が明らかとなる。

11月9日(水) (晴のち曇時々雨) 第15号住居址の柱穴には、切石がみられ、柱を支えていた石ではないかと思われる。第15号～第17号住居址のカマドの調査。第15号住居址は、粘土が分厚くしかれており、強固なつくりのものであることがわかる。第16号住居址のカマドの内部には、小型の甕形土器か火をうけて、ひずんで、いわば横倒しになった様な状態で出土する。カマドには、切石が倒れた恰好で出土し、炭化材も出土している。また、煙道には、須恵器を模倣したと思われる甕形土器が使用されている。カマドの前面より甕形土器が伏せた状態で出土する。

11月10日(木) (雨時々曇) 雨により、図面の整理と遺物の整理をプレハブ内にて行う。

11月11日(金) (雨) 雨により、調査内容の確認と図面の整理。漆紙状遺物の保管について検討する。

11月12日(土) (曇時々雨) 第15号・第16号住居址のカマドの主断断面図の作成を行う。第17号住居址では、須恵器坏形土器が出土する。

11月13日(日) (晴のち雨) 第15号住居址のカマドの調査。粘土は、白っぽいものが使われている。エレベーション図の作成。

11月14日(月) 遺跡の遠景写真を撮影する。第15号～第17号住居址の平面図の作成。レベル計測を行う。

11月15日(火) 最終日である。第15号～第17号住居址のレベル計測を行う。第3号住居外側の柱穴のレベル計測。秋の夕陽が那珂川対岸の山あい沈みゆく時、多くの出来事が胸に去来し感無量である。この調査が残っていた多くの出来事を後の世まで残してゆきたい。調査は、その調査者の人間性により左右される。また、本調査をとりまく多くの人々が、この調査をそれぞれのようないでみていったのであろうか。

#### 第4節 発掘調査終了までの事務的経過

昭和56年12月9日

水戸北部中核工業団地造成に伴う現地調査を実施

茨城県教育委員会 水戸教育事務所社会教育主事 大塚義雄  
茨城県教育委員会 水戸教育事務所理蔵文化財指導員 伊藤重敏  
大宮町教育委員会 社会教育課課長補佐 中村淳公  
大宮町工業団地推進室長 浅川克己

昭和56年12月24日（大教委発第651号）

現地調査の結果、遺跡が発見されたので文化庁長官宛発見届を出す。（文化財保護法第57条の5項の規定）

昭和57年3月15日

発見届の結果文化庁次長より、県教育長宛に遺跡の発見についての通知がある。

（内容）遺跡の現状保存について、遺漏ないよう御措置ください。

昭和57年3月15日

発見の結果、文化庁次長より町教育長宛に遺跡の発見についての通知がある。

（内容）文化財保存法の趣旨を尊重され、茨城県教育委員会と協議の上遺跡を保存できるよう十分御配慮ください。

昭和57年11月30日～12月3日

県文化課で理蔵文化財分布調査を実施（表面観察、試掘）

調査員 茨城県文化財保護主事 高根 信和  
荒堀 彰夫

昭和57年11月30日

町の調査協力依頼 調査地区の設定

昭和57年12月1日

A地区の試掘（作業員雇用）

昭和57年12月2日

B地区の試掘（作業員雇用）

昭和57年12月3日

C地区の試掘 終了

昭和58年2月12日（文第82号）

調査の結果について、県教育庁文化課長より地域整備第一課長宛に水戸北部中核工業団地内理蔵

文化財の取扱について（依頼）報告がある。

- （内容）
1. A、B地区については、台地先端部に遺跡が保存されている可能性があるため、緑地等開発計画の段階で保存等を考慮されたいこと。
  2. C地区については、工事施行に際し当課と連絡をとる等必要な配慮をされたいこと。
  3. 遺跡発見届が提出された地点については、周知の遺跡であるので工事着工前に発掘調査が必要であること。

昭和58年8月4日（58地公水開第221号）

埋蔵文化財発掘（土木工学等）通知書を文化庁長官宛に通知する。

（文化財保護法第57条の3第1項の規定）

昭和58年8月22日（大教委発第393号）

埋蔵文化財発掘届 文化庁長官宛に届出（担当者 外山 泰久）（茨城県埋蔵文化財指導員）

（文化財保護法第98条の2第1項の規定）

昭和58年8月22日

水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会開催 福祉センター

調査会委員の委嘱

- 会議 (1) 経過説明  
(2) 調査会規約（案）の審議  
(3) 調査会予算（案）の審議  
(4) 発掘調査概況説明

昭和58年8月26日

調査業務に係る契約

- 甲 地域振興整備公団 総裁 吉國 一郎  
水戸北部開発所長 芳賀 毅
- 乙 水戸北部中核工業団地内  
遺跡発掘調査会長 大越 四郎

昭和58年10月8日

調査会開催 福祉センター

- 会議 (1) 区域の拡張及び期間の延長について  
(2) 調査体制について 予算、作業員  
(3) 機材の管理について プレハブの作業場及び簡易トイレの設置

昭和58年10月11日（調査会長 開発所長宛）

文化財発掘調査区域の拡張にかかる協議について

- (1) 発掘調査(拡張)予定地の所在及び地番  
大宮町大字小野字源氏平 1.711, 1.712, 1.713, 1.715, 1.717番
- (2) 発掘調査(拡張)予定地の面積概算  
1.444.0 m<sup>2</sup>(上記5筆計)

昭和58年10月14日(開発所長 調査会長)

文化財発掘調査区域の拡張の同意について

- (1) 発掘調査(拡張)予定地の所在及び地番  
1.711, 1.712, 1.713, 1.715, 1.717番
- (2) 発掘調査(拡張)地の面積概算  
1.444.0 m<sup>2</sup>

昭和58年11月17日

調査会開催 福祉センター

- 会議 (1) 発掘調査経過について(作業の経過, 予算執行状況)  
(2) 今後の作業日程について(出土品の整理, 報告書の作成)

昭和58年11月21日(調査会長 開発所長宛)

発掘調査期間及び予算についての協議

昭和58年11月24日(開発所長 調査会長宛)

文化財発掘調査期間の延長及び予算の増額の同意について

昭和58年11月25日(調査団長より 調査会長宛)

発掘調査終了届(大越四郎調査会長 調査団長より)

昭和58年12月5日(大教委発569号)(調査会長 県教育庁文化課長宛)

発掘調査終了の確認について(依頼)

発掘調査終了届添付

昭和58年12月5日(大教委発570号)(調査会長 開発所長)

発掘調査終了届の送付

発掘調査終了の確認について(依頼) } 写添付  
発掘調査終了届

昭和58年12月7日(大教委発第577号)

遺物発見届 所管警察署長宛

(遺失物法第1条)

昭和58年12月7日(大教委発第578号)

埋蔵文化財保管証の提出について 茨城県教育長宛

(文法委第71号)

昭和58年12月22日(58地公水開第379号) 開発所長 調査会長宛埋蔵文化財発掘調査区域

に係る造成工事着手についての協議

(工事着手について同意得たく協議)

昭和58年12月23日 調査会長 開発所長宛

埋蔵文化財発掘調査区域に係る造成工事着手の同意について

(造成工事に着手しても差支えない)

昭和59年1月9日(文第14号) 茨城県教育長 大宮町教育長宛

発掘調査終了の確認について(通知)

(現地調査の結果、報告のとおり発掘調査の終了したことを認めます。)

#### 記

- (1) 遺物発見届(遺失物法第1条)  
所管警察署長宛に提出
- (2) 埋蔵文化財保管証(文法委第71号)  
県教育委員会教育長宛に提出
- (3) 調査報告書(文保委第71号)  
文化庁長官宛に県教育委員会を経由して提出

(以上、原文は水戸北部中核工業団地内遺跡発掘調査会会議資料による)

## 第 2 章

### 遺 跡 と 周 辺 の 環 境

#### 第 1 節 人文地理的・自然的環境

源氏平遺跡は、昭和56年度に遺跡台帳に新たに登録された遺跡であり、茨城県那珂郡大宮町大字小野小字源氏平に位置している。

大宮町は、水戸市の北西部約2.4kmに位置し、昭和30年の町村合併促進法により、旧大宮町、静村の一部、大場村などが合併して現在の大宮町になった。町役場は、茨城県那珂郡大宮町大宮338-2番地東経140度24分32秒、北緯36度32分58秒に所在している。

町の面積は82.73km<sup>2</sup>(昭和58年度)、人口は24,612人(昭和58年度)である。また、農家数2,978軒(昭和56年度)、工業に関する事業所数114カ所(昭和56年度)、商店数551軒である。このように同町では、農家数が圧倒的に多いことから、農業を基盤とする地域経済が行なわれていることが察せられる。特に、大宮町付近は、きゅうり、たばこなどの産地として全国的に名高い。勿論、水戸北部中核工業団地が完成し、工場が誘致されれば、変化がもたらされることは容易に想像できよう。

大宮町の中心部には、茨城県水戸市と福島県郡山市とを結んでいる水郡線(単線)が、南北に走っている。水戸を出発して、常陸青柳、南酒出(水郡線の常陸太田線)、瓜連、静、常陸大宮、中舟生、磐城石井、磐城棚倉、泉郷郡山などの駅がある。水戸-郡山間の所要時間は、約4時間30分程であるこの線も、最近の相近く国鉄の合理化の波にさらされており、多くの駅が無人駅となり、廃止路線の対象ともなっている。しかし、依然として国道118号線とともに、大宮町の交通手段の中での役割は決して軽くはみられない。この国道は、大宮町の中心街で、日立市より栃木県に至る国道293号線と直交している。

地質・地理的な環境は、南西方面に鶏足山(標高431m)、北西方面に尺丈山(標高512m)、北方の山方町方面に男体山(標高654m)、北東方面の日立市に高鈴山(標高624m)があり、大宮町はこれらの山々の麓に抱かれるような位置にある。源氏平遺跡は、6区分された段丘面の中段段丘の第三段段丘上の上のっている。大宮付近の地質的な基盤層は、鷺子鶏足占期層から成り立つ第三期層であり、この上には、保内層(B.F)→国長層(K.F)→小貝野層(O.F)→桜木層(S.F)→下川層(T.F)→坂地層(S.F)→荒屋層(A.F)→瓜連層(U.F)などの第三期層が堆積しており、さらに、第四期層である段丘堆積物層をへて関東ローム層、表土層につながる。段丘堆積物層は、砂礫泥層または段丘礫層と呼ばれ、南関東における下末古ロームと対比される。この段丘礫層の上には、ローム層が堆積しているが、一般に直上のものは、宝木ロームに対比されている。宝木ロームは、鹿

沿軽石層下面を境として2つに区分されている。すなわち宝木ローム層(A<sub>2</sub>)は、下方のものを(A<sub>2-2</sub>)とし、上方のものを(A<sub>2-1</sub>)としている。さらに、田原ロームに対比されるローム層(A<sub>1-2</sub>, A<sub>1-1</sub>)が堆積しており、この層中には、男体山より填出した火山灰層である今市軽石層(IS)と、その上部に堆積している七本桜軽石層(SP)を経て、表土層を形成している黒色土層が堆積している。

気温は、年平均13~14度位であり、氷点下になることは比較的少ないようである。また、年間平均降水量は、121ミリ、梅雨期では、14.5mm前後、台風期では、169ミリ、2月頃の乾燥期では、48ミリ程度であり、高温多湿の傾向を示している。風向は、冬の時期には、北北西の季節風が多く、久慈川沿岸では八溝おろしの北風。那珂川沿岸、つまり源氏平遺跡の所在する小野部落、三美部落付近では、河岸段丘が発達しており、これらが形成している谷の影響などで、西の風向をもつ「からっ風」が強く吹くようである。これは、遺跡の調査が終りに近づいた11月の半ば頃に強く感じられた。反対に夏は、東寄りの風が多いが、久慈川沿いでは南風の吹く場合が多い。これらの風向は、大宮町の地形に左右されている。

動植物については、大宮町の豊かな、そして、起伏に富んだ地形に伴い、多くの動植物がみられる。植物には、スギ、ブナ、クリ、マツ、ウルシ、ヒキヨモギ、コムオガマ、ヤマトリカブト、カタクリ、サギソウなどのほか、久慈川、那珂川べりの低地には、キショウブ、アヤメ、イヌガラシのほか、ヒシ、サンショウモ、ウキクサ、タヌキモなどが、川原などでは、アミシドロ、キクモ、クロモなどがみられる。その他、キノコ類として、シメジ、ハツタケ、ナベタケ、シシタケ、ホウキタケなどが主にみられ、稀に、マツタケもみられるという。動物は、イノシシ、イタチ、タヌキ、リス、ムササビなどが棲息している。しかし、何ととっても豊富なのは鳥類であろう。隣の瓜連町にある古徳沼は、ハクチョウの飛来によって著名で毎年ニュースになり、多くの観光客が訪れている。源氏平遺跡周辺も以前は、鳥獣保護区ではなかったようで、毎年、多くの狩人がこの地を訪れて、狩をしていたようである。また、付近から手伝いに来ていた作業員の中に、狩猟を趣味にしている人がいて、キジの鳴き声を模したら、遠く向い側の台地よりオスのキジが一目散になって飛んできたなどという話を目を輝かせてきかせてくれた。鳥類は、多くてきりがないので、かいつまんで主なものをあげてみると、キジバト、フクロウ、サギ、キツツキ、ウグイス、ウズラ、ムクドリ、ツバメ、ホトトギス、キセキレイ、マガモ、スズメ、オシドリなどである。遺跡周辺の低地などには、マムシ、トカゲ、カナヘビ、イモリ、カエル、トウキョウサンショウなどが棲息している。魚類は、那珂川、久慈川、玉川という三つの主要な河川が流れており、コイ、フナ、ウグイ、サケ、マス、ウナギ、カジカ、ハゼ、アユ、ドジョウと食用になる豊富な魚類が数多くいる。特に、久慈川のアユは有名であり、それが取れる季節になると、遠く東京方面よりも、大公望が大挙しておしよせ、その釣り上げた魚に舌鼓みをうつ光景が河原のあちらこちらでみられる。那珂川のサケは、特

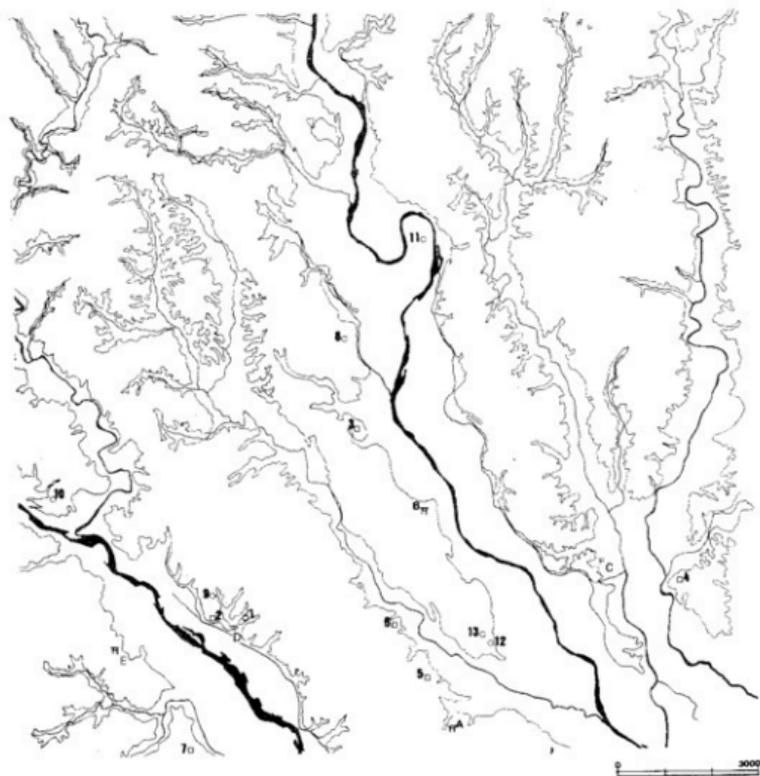
産品であり、江戸時代には、下流の水戸藩が皇室用の献上品としていた事でその名を知られている。

付近には、〔県道長沢水戸線〕が南北に走っており、それに平行するように、小場江環用水路が流れている。北方には、先述した主要地方道である日立・御前山道が東西に走り、大宮小野郵便局、大場小学校付近で交差する。

註(1) 茨城県統計協会の調査資料による。

註(2) 農林省放射線育種場(A field)は、昭和37年4月に大宮町上村田字長田地内に竣工した。A fieldは、すでにアメリカのブルックヘブン国立原子力研究所に世界最初に設けられ、日本では、静岡県三島市の国立遺伝学研究所に最初の施設が完成している。用地面積は放射線障害防止の関係より、約70haとしており、照射圃場は半径100メートルの円形をなしている。ここでは、交配による品種改良によらず、放射線の照射による突然変異のあり方を研究して新品種や品種改良を行なおうとするものであった。建設当初より、国立遺伝学研究所とともに、数少ない重要な施設として、日本農業の革命的発展に貢献するものとして各方面より熱いまなざしが注がれた。



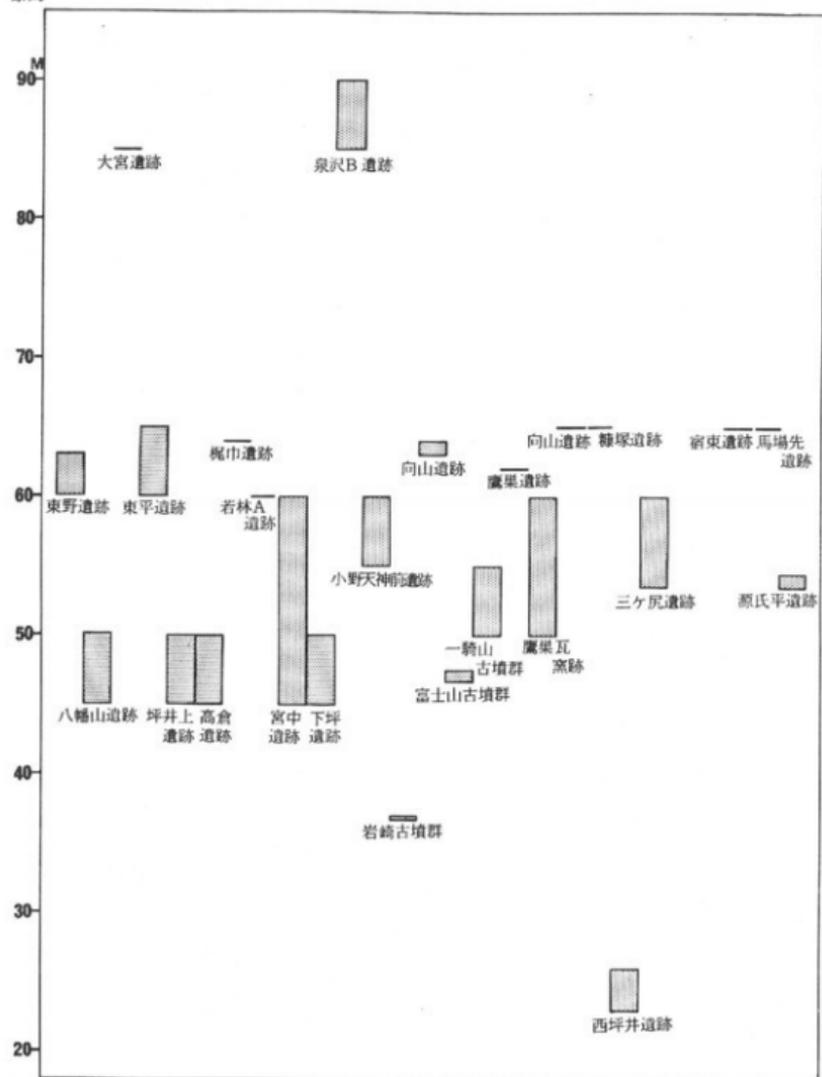


第2図 茨城県北西部に於ける主要遺跡

(□は奈良～平安時代, ○はその他の時期中心)

- |                       |           |              |
|-----------------------|-----------|--------------|
| 1. 源氏平遺跡              | 10. 野口平遺跡 | ( " ~縄文時代)   |
| 2. 中道遺跡 (推定廃寺跡)       | 11. 岩崎古墳群 |              |
| 3. 鷹巣遺跡               | 12. 五所皇古墳 |              |
| 4. 大里地区遺跡群 (推定久慈郡衙跡)  | 13. 高十山遺跡 | (弥生時代)       |
| 5. 一騎山遺跡              | 14. 高野倉遺跡 | (先土器時代～縄文時代) |
| 6. 小仲遺跡               | A 静神社     |              |
| 7. 北方遺跡               | B 甲神社     |              |
| 8. 梶巾遺跡 (先土器時代～古墳時代)  | C 伊勢神社    |              |
| 9. 小野天神前遺跡 ( " ~歴史時代) | D 鹿島高房神社  |              |
|                       | E 阿波山上神社  |              |

標高



第3図 大宮町内の主要遺跡の立地

## 第2節 大宮町の主要遺跡の立地について（第3図）

大宮町の遺跡は、そのほとんどが標高約45メートルより標高約70メートルの間に立地していることがわかる。これは、当地方が山あいから平野にゆるゆるな丁度その変換点に位置していることを示している。また、標高が示す数値の大部分は、中位段丘上に遺跡が集中していることを示すものである。これは、遺跡が示す時期、つまり、先土器時代より歴史時代にかけて、そのほとんど全時代を通じてこの中位段丘が生活の中心地として活用されていることを示し、台地縁辺部、谷津村近に占居することは、当時の水事情を考える上で恰好の資料となることであろう。

大宮町付近の地理的地質的な環境は、鷹巣遺跡の報文を次に掲げる。「大宮町付近では、那珂川、久慈川、玉川、緒川流域の沖積低地と、久慈山地、鷺子山塊へ続く山地から形成されている。また、大宮町付近は、那珂川、久慈川、玉川、緒川などが作りあげた段丘構造を示しており、それらは、上位段丘、中位段丘、下位段丘に区分されている。上位段丘は、緒川、那珂川東岸を結ぶ中位段丘より北方にあり、標高約70メートルから漸次高くなっている。北部では山が川端までせまっておき、緒川村、美和村の境界付近では標高120メートル程である。中位段丘は、久慈川西岸、那珂川東岸に発達している標高30～35メートル程の台地縁辺部付近と大宮町の中心地より北方にかけての標高約35～75メートルの台地に分けられ、これらの上面は、関東ローム層に覆われている。下位段丘は、那珂川、久慈川、下川、緒川流域に分布している沖積低地である。とりわけ、那珂川、久慈川流域の沖積低地は、御前山村、山方町境界付近で標高約30メートル、那珂町、瓜連町付近で標高約15メートルと標高差が約15メートルのなだらかな傾斜を示している。これらの沖積低地は、主に砂礫層より成り立ち、そのほとんどは水田として利用されている。高度は、全体的にみると那珂川、久慈川を両端にして台地中央へ、南東部から北西部へ漸次高さを増している。地質は、大宮町付近の基底層の大部分は第三紀層であるが、緒川村や美和村と境を接する付近には、鷺子、埴足古期岩層（Torinoko Toriashi older Rocks）と呼ばれる古期岩層が発生している。岩質は凝灰岩、砂岩、泥岩などで構成されている。表層は、沖積低地（下位段丘堆積物（Terrace Deposits））以外の大部分が関東ローム層で覆われている。地形の侵蝕度は、高さが増すにつれ、高くなっており、北西部の山あいでは深い谷を形成している。逆に高さを減じていく程侵蝕度は低く、大宮台地付近から平坦な地形をみせている。」としている。

### 参考文献

- 1) 阿久津純「茨城県常陸大宮付近の地形地質」（宇都宮大学学芸学部研究論文集第2号）1953
- 2) 高根信和編「常陸一騎山」1974
- 3) 阿久津久・鴨志田鶴吉『自然環境』「大宮町史」大宮町史編纂委員会 1977
- 4) 外山編「常陸鷹巣遺跡」 1983

### 第3節 遺跡周辺の地名（参考資料）

源氏平遺跡のある小野地区には次のような小字名が知られている。

高ノ倉、南高ノ倉、東高ノ倉、後高ノ倉、岩倉、天神前、門戸山、中道、重郎坂、宮内、一丁畑、  
盛入、馬坂、元地内、清水、境塚、後沢、高山下、狸久保、黒石、宇通畑、深作、遠陸神、源氏平、  
鹿島平、上切通、大林、山田、大作、成井、下河原、菊又、下切通、反町、日渡、天神小屋、宮下、  
滝ノ上、門戸山、塩、中河原、上河原、西タリ、作内、穡下、袋下、呂合、田端、合之田、後谷津、  
根柄、向河原、遠屋敷下、堂庵

また、付近の小字名の中で、大ざっぱに分類を試みてみる。

#### (1) 建物に関するもの

註(1)

①倉……高ノ倉、南高ノ倉、東高ノ倉、後高ノ倉、岩倉（小野）

他の地区……塩倉、沼倉（東野）、津倉田（八田）、藤倉（岩崎）、蔵下（辰ノ口）、  
小倉山（小倉）、石倉（塩原）、石蔵（下岩瀬）、福蔵（上岩瀬）、三蔵  
（泉）、三蔵（宇留野）、石倉、地藏、藏廟（石沢）、地藏下、蔵ノ沢  
（小場）、田倉（三美）、石倉（北塩子）、大倉、長倉（御前山村）、沼  
倉（金砂郷村）、元倉、梅ノ木倉（山方町）

②神社、その他……堂庵、宮内、鹿島平（小野）、大宮、宮下、古城、根占屋、寺町、新  
古屋（大宮）、常竜寺、天神、西新谷寺内、宮下（東野）、宮前、御陣屋  
跡、天神森、天神下、屋敷前、常廟前（八田）、宮下（若林）、不動下、  
屋敷下、釈迦堂、宮原後、宮下、掌山、下ノ宮（上大賀）、宿、宮後、宮  
前、宿南、寺下、宿西、宿東、中屋敷、宿後（岩崎）、宮下（蘆葉）、天  
神向、宿東、宿、宮西、宮山、宮後、宿北、宿西（小祝）、宮ノ前、宮東、  
新家（前）、宮後、堂下、宮下（辰ノ口）、宮ノ前、天神山、天神沢、天  
神下、新家、堂常（小倉）、新家、新家下、宮前（塩原）、堂下、不動下  
（南）、不動山、盤城地、天神下（富岡）、中屋敷、地藏堂、地藏免、宮  
後（下岩瀬）、赤城前、宮前、御城、上宿、下宿、中宿（上岩瀬）金堂、  
八幡下、堂ノ妻、楽師前（根本）、殿田、寺前、下ノ寺、宮ノ脇、宮前、  
宮南、宮久保、宮西、権現、下堂、上堂（泉）、寺小屋、中城、御城、外  
城、宮中、不動下、荒屋前（宇留野）、五林堂、寺下、寺跡、宮下、堂山、  
新家（下村田）、屋敷山、若宮山、宮下、寺下（上村田）、（上）、殿田、  
宮脇、殿内、小屋場（谷津）、権現平（石沢）、仲戸、宮前、宮下、遠屋  
敷下、寺前、堂屋敷下、一心院、下宿、中宿、北古屋、根小屋、城内、中  
城、堀ノ内、御城、本城、西城、稲荷森、観音山向、小屋場向、城下、古

宿、天神前、権現前、宿、荒神前、遠屋敷、鎮守官林（小場）、前安戸、八幡（下）、八幡河原、不動河原（三美）、堂ノ前、宮田、宿内、大宮宮前、堂口（北塩子）

(2)道（交通路）に関するもの

道陸神、上切通、下切通、日渡、重郎坂、馬坂（小野）、塙坂（石沢）、古渡、船渡、坂地下、下宮道東、上富道東、地地向、船渡前、下河原橋向、中道向、中道、上富道上、下富道（小場）、中道（三美）道添（上村田）、見渡、高渡（大宮）、日渡（東野）、馬頃橋（八田）、馬坂、赤坂、切通（若林）、中道、日渡（上大賀）、釜額道上、中道、辰ノ口道上（岩崎）大道端、中道、小坂、新道（辰ノ口）、日渡、原中道、原道東、西道西、原中道西、原道東、中道（小祝）、道合（塩原）、なし（富岡）、田通、中道、出山、（下岩瀬）、道見淵、歩台、川岸揚、道林前（上岩瀬）、往還東、往還西（泉）、道正内（宇留野）

(3)水に関するもの

清水、滝ノ上、成井（小野）、足川、清水、滝ノ上、沼ノ上、沢尻（三美）、清水谷津、清水向、滝沢（小堀）、池之入、冷水場（西塩子）、小沼川、大沼川、滑川（北塩子）、大井戸、宇留井沢（石沢）、川合、清水谷、清水久保（上村田）、橋川、江添（下村田）、江添、古川（下岩瀬）、岩井戸、岩井岡、江向、入江、下沼田、江中子、玉川、岩井久保（上岩瀬）赤沼、井ノ尻（根本）、江ノ上（泉）、川端、滝久保、北滝久保、南滝久保、水門前、水門下、反川、中江、中江崎、江底（宇留野）、川目、川端、上川目（富岡）、川目、川原前、上川原、中川原、下川原（塩原）、下川原、南川子石、水吸東、水吸板上、水吸板下、北水吸、水吸、南水吸、川子石、中川原、上川原（小倉）、岩崎、堰口、磯部河原、上河原、中河原川原前、出川原、水吐下、下河原、入江向、水門、堰場、水門前（辰ノ口）、下河川、新下河原、鍋井戸、上河原、大江岸、大江ノ上、中江原、江橋、滑沢（大宮）、沖、河原田、池ノ内、水引（東野）、堰ノ上、古川、堰田（八田）、清水、玉川、池下（若林）、金洗（上大賀）、河井台（鷹巣）、川端（小祝）、江の下（照田）

(4)草木に関するもの

柘原、木落、梅田、桜田、柏木、小林（東野）、桑原、栗下、・黄谷（八田）、岩花（岩崎）、弁慶松、森前（小祝）、柳山（辰ノ口）、福荷森、

堂山、森ノ木、梅坪、榎本（小倉）、菅諸沢（高岡）、桑木合、枇杷河原  
 柳町（下岩瀬）、芦原、柳町、榎田、蓮町、赤芦（上岩瀬）榎町（泉）、  
 柳山（宇留野）、榎戸（河原）、並木、榎木（下）、留草、漆山（宇留野）  
 入梅田、杉本、榎戸、一本松、柳町、漆椿、登峯、桜久保（下村田）、椿  
 下（石沢）、梅ヶ谷津、笹谷津、・峯、梅沢（尻）、稲荷森、梨の木（上）、  
 高森、柳山（小場）、大林（小野）、伏木田、梨木沢、藤谷津、榎下（三  
 美）、塩ノ草、柿木田、栗並、木ノ下、森前（西塩子）、梅田、柳ノ草、榎  
 榎田、松葉田（北塩子）、松の木田（照田）

(5) 織に関するもの他

註<sup>2)</sup>  
 織石下、織石上（西塩子）、中江橋、江橋（大宮）、袖振免（八田）

(6) 農耕（出畑）に関するもの

宇通畑、山田、菊又、一丁畑、作内、田端、合之田（小野）、籠田、田  
 倉、伏木田、山ノ田、六月田（三美）、田代、塚田、三角田、鶴巻田、沼  
 田、岡辺畑、柿木田、吉田、河原田、ミソウ作（西塩子）、猿田、深田、  
 定田、梅田、二反田、火打田、宮田、松葉田、西田（北塩子）、永田、初  
 田、松の木田、下田（照田）、深田入、表田、三田作、新田後、新田山、  
 豆田入、豆田谷津、江戸田（小場）、扇田、畑片、合ノ田、兼田、遠泉田、  
 餅田、上殿田、殿田、津具羅田、引田前、引田谷津（石沢）、北村田、引  
 田、長田、海老田、前田、仲・田（上村田）、入梅田、久保田、相田、一  
 丁田、高田、五反田、籠田（下村田）、芳田、五反田、八反田（宇留野）、  
 中村田、一町田、八反田（泉）、鎌田後（根本）、釜田、東田向、西田向、  
 田通、味相作、池田、蓬田、久保田、河原田、八反田（下岩瀬）、上塚田、  
 沼田、角田、宮田、下塚田、下沼田、洗田、榎田、金田、四反田（上岩瀬）、  
 間ノ田、田子内、砂田、高田（大宮）、原田、月見田、河原田、大ノ田、  
 大作、柳作、辻ヶ作、逢田、町田向田、小敷田、塩田、六十田、石郡田、  
 梅田、桜田、東田（東野）、西田、菅田、後塩田、表塩田、穴田、神明田、  
 塚田、中唐木田、長田、唐木田、津倉田（八田）、姥田、引田（若林）、  
 町田、砂田、深田、老町田、舟生田（上大賀）、なし（岩崎）、田中（鷹  
 巣）、馬草田、洗田、後田、藪田、深田、逆田、増田、長田、下田、下田  
 向（小祝）、合の田（辰ノ口）、町田、五反田、作田、猿田、南五反田、  
 北五反田（小倉）、大沼田、高田（塩原）、七反畑、反田、車田（富岡）

註2) 倉に関しては、鹿島神社（常北町大字増井字豊栗松 1,087）には、常陸国七井

の「増井」がある。この神社の村内御神倉（おみくら）坪には、古来鹿島神社の神倉があり、文治二年（1186）に「源頼朝神祇料切、那珂西寸九石四斗」〔陳鑑〕とある。鹿島御神倉明神を祀る。この神倉出納役袴塚家を「御神倉」とよんでいる。神社は、天長元年（824）年二月十五日に鹿島大神の御分霊を鎮祭して、はじめで当村の鎮守とした。

註(2) 地名にまつわる伝説がある。

「ある家に1人娘がおり、笑うとえくぼのできる村でも評判の娘であった。村の若者たちは、あぜ道を歩く時、のら仕事をしている時、いつも娘に近寄って来た。たまりかねた母親は、娘を若者たちから遠ざけようと家の中に閉じ込め、機織りをさせた。しかし、その音にも誘われるように若者が集まってきた。母親のいうとおりに声をかけられても聞えないふりをしていたが、あるとき心がつい恐れ糸を切ってしまった。母親は若者たちを大声で追い払った。しかし、母親がのらへ出かけてしまうとまたすぐ娘のところへ集まってきた。困ってしまった母親は、父親に相談した。「石倉」の中で機織りをさせるしかない。と考えた。しかし、石倉はなかった。そこで、村の鎮守様にお祈りをした。ある日、急に黒雲がわき起りあたりが暗くなったかと思うと、もの凄い稲妻とともに大雷鳴が娘の家の方でとどいた。のらで働いていた母親があわてて帰ると家は跡かたもなく、そこには大きな石が残っていた。石の中からは、機音が聞こえてくるのみだった。」というものである。

## 第 3 章

### 調 査 報 告

#### 第 1 節 グリッドの設定

源氏平遺跡の現状は、宇留野武志氏旧所有の1735番地は畑地であり、1713番地及び1714番地は果樹(栗の木)と針葉樹(松の木、杉の木)などであった。また桑畑が台地の北方へ向ってかなりみられたのが印象的であった。調査地は、東側の1731番地、1737番地の「ゴボウ」が栽培されている畑地に隣接していた。(第4図2)グリッドを設定するにあたっては、樹木を避けて調査の進行上、都合のよい、どこからもわかり易い場所に設定することにした。台地の南方側にそって走る、幅2~4メートルの道路は、今回の発掘調査に於いて重要な意味をもっている。それは、この道路が旧道であることは勿論調査の行き帰りの通用路であるからであった。この道路は、自動車で、上ってくるのが可能であった。コンクリートで台地上りぎわまで舗装されており、この道路がこのように整備されていなかったら、調査の物質・人手の通用に大きな障害になったことは想像に難くなかった。台地上り際まで、舗装されていなかったら、雨等の際には、自動車などでこの急な坂道を登りきれないに違いなかった。この道は、若林地区の字引田方面へ向っているが、この台地と山が接する付近では、かなりの凹凸がみられ、両側の草木の繁茂がはげしく自動車の通行は不可能である。やっとのことで、バイク、自転車が速度を低く抑えて通ることのできる程の道であった。

グリッド設定は、地籍上の構図と現状を観察して1731番地、1737番地と1735番地との境界がほぼ一直線になり、縦の基準線を決めた。(第4図2)(N-Oのライン。第5図参照)台地の南側は、いくらか傾斜を示しており、傾斜がみられはじめるところ(16-17ライン第5図参照)を横の基準線とした。各グリッドの最終的な名称は、第5図に示すとおりである。このグリッドの名称は、当初予定されていた調査面積が大幅な拡張になった為に、それに準じて決定したものである。

出土した遺物の注記は、N-4グリッドのものが、A-1グリッドとして行なったが、その後の整理に関しても、本報告書に掲載する場合にも、最終的なグリッドの名称を使用している点は、考慮していただきたい。

N-4~16←A-1~13	} 1735番地
M-4~16←B-1~13	
L-4~10←C-1~13	
K-4~16←D-1~13	

また、J-Kライン上にあるトレンチと、J 2N-12~13ライン上にあるトレンチについては、J-K-3~13トレンチのものをD列トレンチとして記載し、J-N-12~13ライン上

にあるトレンチをA～D-10トレンチとして注記を行った。

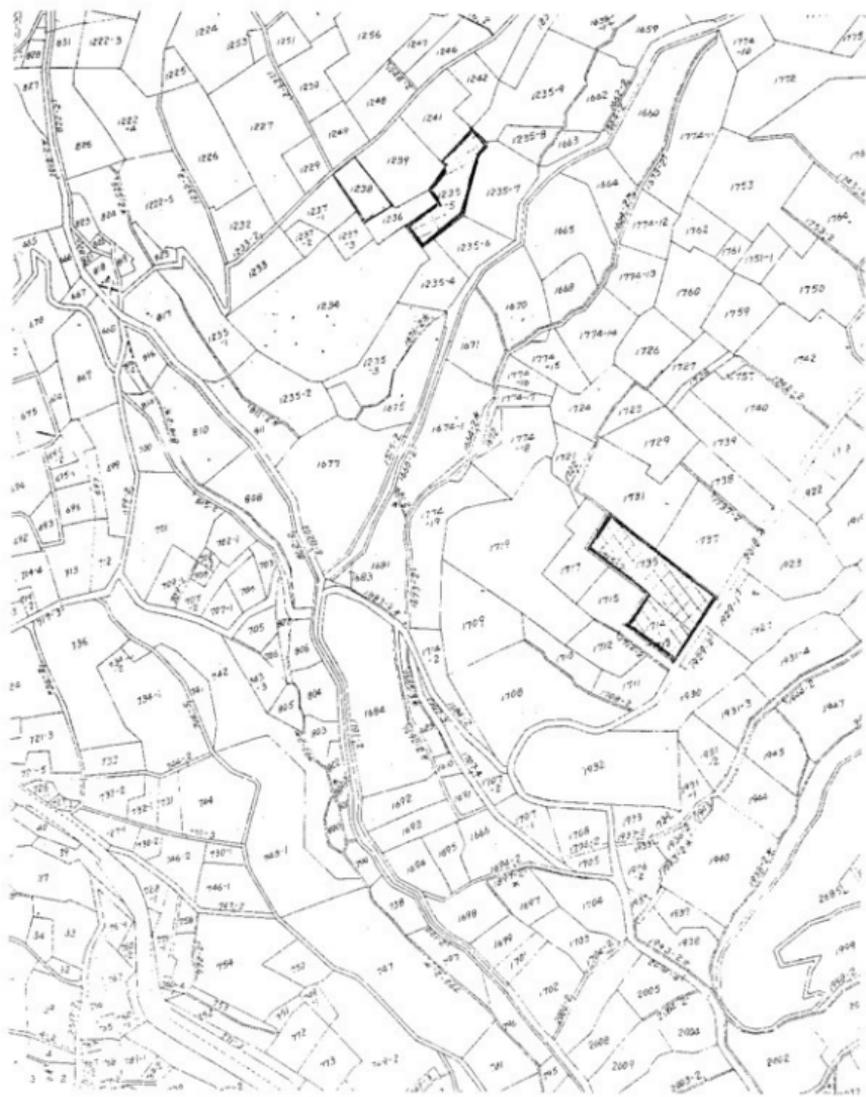
最終的には、第4図のグリッド設定図になっている。しかし、東南方の道路の上り坂付近では、急崖で杭を打てずいたので、この部分（A-1-19～20）は、実際には、グリッドを設定できなかった。

また、拡張になった地番（1715、1717、1719、1712）についても、異常な程に草木が繁茂し、松の木も「松喰い虫」により枯れていたので、（A～E-5、第5図参照）実際には、グリッドを設定せずにいた。また、山林の部分は、古墳のマウンドらしきものの確認を行うことを目的としていたが、それにともなって住居址が発見された事が影響し、各グリッドの名称を変更せざるを得なかった。

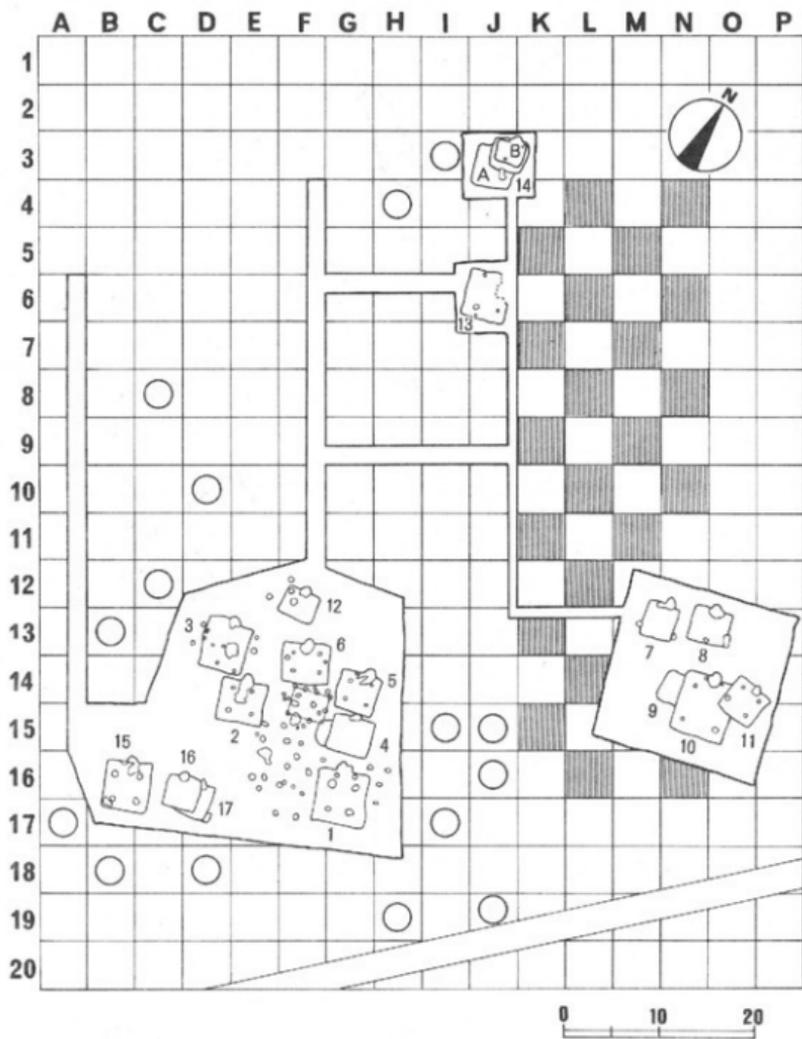
しかし、調査の全期間をとおして、N-Fグリッドの東南コーナーを基準点としてこれは全く変更していない。



第4図 (1) グリッド設定の状況



第4図(2) 源氏平遺跡付近の地籍図



第5図 グリッドの名称と遺構の分布

(発掘調査区については、○は1部確認、スクリーントーンは全掘区を示している。)

## 第2節 遺構の分布（第5図）

発掘調査に於いて確認された住居址は、19軒（住居址縮少等を含む）、掘立柱建物址1棟土壌などであった。1735番地内に9軒、1714番地、1715番地内に10軒ほかが発見された。住居址の番号は、発見された順番に番号を付した。

1号住居址は、マウンド状の古墳らしきものの確認調査の際に、トレンチに於いてその一部が確認された。この住居址がきっかけで、山林内の住居址が調査された記念すべき住居址であった。本住居址は、最も「旧道」に近い位置にあり、方角的には、最も南側にある15号住居址、16、17号住居址よりも北側ではあるが、占地は最も先端付近にあり、その規模も木遺跡の中で最大クラスのものであり、周囲には柱穴が確認できた。最も南方にあるのが、漆紙文書が発見された15号住居址であった。この住居址は、1号住居址、10号住居址、3号住居址などととも長方形の大形の部類に属するものであった。16号住居址と17号住居址は、重複しており17号住居址が古く、16号住居址の方が新しかった。また、1号住居址と17号住居址の間には、かなりのピットが検出されたが、掘立柱建物址の存在を復原するには至らなかった。2号住居址と16号住居址の間は6メートルあるが、この部分には、遺構はなかった。また、掘立柱建物址を囲むようにして、4号住居址、5号住居址、6号住居址、3号住居址、2号住居址が存在した。そのやや西北方に3号住居址、12号住居址が存在した。1号住居址とその北側にあった4号住居址については、1号住居址のカマドの先端部と4号住居址の壁面の距離が、約1メートルであった。また、4号住居址と5号住居址の間は、約40センチメートルであり、5号住居址の壁面の一部に4号住居址のカマドの先端部が重複していた。これは、5号住居址が黒色土中でほとんど完全に埋没した後に4号住居址が構築されたことを示すものとの見方ができる。また、4号住居址の西壁の一部には、大形のピット（土壌）がみられたが、出土遺物が全くなく時期は不明であった。しかし、4号住居址を構築する際に、壁面にローム上を入れて補強している様子が見られたので、この段落では、このピットは埋没してはいなかったものと判断できた。5号住居址にも、小ピットの重複が観察できたが、これも、掘立柱建物址を復原するまでに至らなかった。5号住居址の西側には、約70センチメートルの距離を於いて6号住居址が存在した。柱穴は6本であった。この6号住居址の西側約3、5メートルのところには、3号住居址があった。この住居址の両側には、それぞれ2本の柱穴がみられ、1号住居址の柱穴とともにその存在は注意された。3号住居址のすぐ南側に接して（約30センチメートル）2号住居址が確認された。

7号住居址、8号住居址、9～11住居址は、1735番地の畑地に於いて確認された。それは、M～P列の12～16グリッド内に存在した。ここは、台地の先端部より、やや奥になっている感じがするが、常北町、柱村方面がやや広く見える場所であり、前方にある林がなければすばらしい景色が展開したに違いなかった。7号住居址と5号住居址は壁側が約2メートルの距離をおいてほぼ

平行してつくられていた。7号住居址の東壁と西壁には、それぞれ1つずつピットがあった。住居址内に柱穴らしきものは確認できなかった。8号住居址には、南壁にピットが1つ確認できた。また、この住居址はゴボウの耕作により、住居址はかなりの攪乱を受けていた。この8号住居址の南側へ約4メートル離れたところに、9～11号住居址が重複した形で存在した。重複の様子は、古いものから順に9号住居址、10号住居址、11号住居址の順になっていた。それぞれの住居址は、かなりの攪乱を受けており、その状態からなかなか旧態を復原するのに苦労したところであった。特に11号住居址は、当初予定されていた1735番地より1737番地に広がっていたので、この地番のトレンチャーの跡と直交している部分があったため、ズタズタの状態であった。これらの9～11号住居址のあった付近は、旧道に向ってゆるやかな傾斜が始まる地点でもあった。

13号住居址、14号住居址は、舌状台地の先端部付近の巾約160メートルのほぼ中央に位置していた。それは、また、舌状台地の最先端部より約80メートル程中に入り込んだ地点であった。この部分は、先に述べた2地点と違って住居址が集中している様子はなかった。13号住居址は、12号住居址の北方約34メートルのところで確認された。これは、J-K列トレンチにおいてその1部が確認されたものであるが、このトレンチのところは、以前より山林と畑地の境界付近であつたらしく、ほぼ1列に俗にいう「いも穴」が並んでみつかっており、その中のいくつかには、いもの一部もわずかに残っていた。13号住居址のカマド付近は、これらにより、すでに攪乱されていた。他の部分は、山林内で黒色土が厚かったせいか比較的良好に残っていた。柱穴は3本程確認された。14号住居址(整理の都合上A、B)としたが、正確には、3軒程存在した。とらえ方としては、古い方から順にA→Bとなり、Bは、住居址の縮少と考えられる重複が認められる)は、13号住居址の北西方約9メートルのところに存在した。14号住居址Aと14号住居址Bの重複する部分には、やはり、「いも穴」状の攪乱が認められた。14号住居址Aに於いては、壁高が低く、13号住居址とともに、この付近の黒色土層の堆積が厚かった為に住居址の床面がローム層を20センチメートル程掘り込んだ程度にとどまっていた。14号住居址A自体は、ローム層をどれだけ掘り込むかということを少なくとも目的にしたものではないと感じられた。この住居址からは、文字瓦が出土しているが、他の遺物は、ほとんどといっていい程出土しなかった。また、14号住居址Bは、瓦片が本遺跡最も多く認められたが、いずれも、小片であった。また、約100メートル程南側にある12号住居址、約140メートル程南側にある16号住居址と並んで比較的小型の部類に属している。

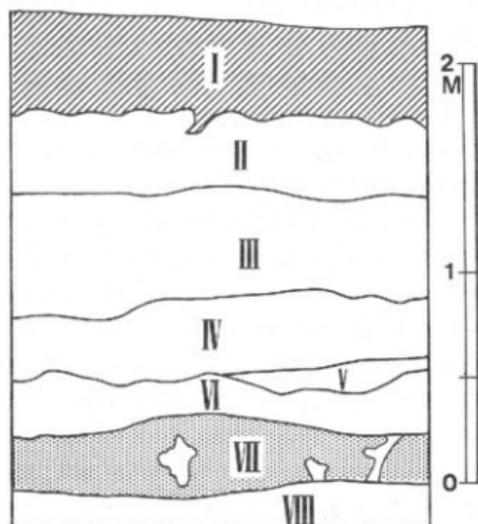
全体的に住居址は、大まかにみると舌状台地の先端部のしかも、南東部に集中していた。この場所は、南東方より入ってくる「田子沢」と呼ばれる谷津の谷口付近にあたる。ここは、源氏平遺跡の東方と南方にある細長く比高差の大きな台地に、いわば挟まれた最も幅の広い、水田面との比高が小さく平坦な原通しのきく台地上の好位置に占地していたことを示すものであろう。

### 第3節 遺跡の層序

M-15グリッド付近に於いて、本遺跡の基本層序の確認を行った。この地点に於いては、耕作等によつての攪乱は、かろうじて免がれていた。土層は、比較的安定した状態で確認されたと判断した。しかし、「旧道」の方向にややへこんでおり、このために東側へ向つてやや傾斜を示していた。

土層は、Ⅷ層まで確認した。Ⅰ層とⅡ層の境界は、かなりの起伏が観察できた。また、Ⅱ層の最上部には、橙色粒子の混入がみられた。図示しなかったが、この成分が、土層の横位にまんべんなくみられるというのではなく、ところどころに観察できる程度のものであった。これが、今市スコリア(IS)、あるいは、七木桜スコリアであるかどうかは判断できなかった。Ⅱ層、Ⅲ層は土の締まりが比較的弱い、いわゆる「ソフトローム」の部分と対比されるものと思われた。これに対して、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層は、土の締りの強い、カチン、カチンの固い「ハードローム」とされる土層であると思われた。本遺跡の住居址は、Ⅱ層中までで、その「掘り方」も終わっており、「ハードローム」まで掘り込んで住居址の床面を構築しているものは見当らなかった。さて、このⅣ層及びⅥ層の間にあったⅤ層であるが、この層は「黒色帯」として把握することができるものと観察された。Ⅵ層とⅦ層の境界付近も、Ⅰ層とⅡ層でみられと時の状態と同じように、かなりの起伏が観察された。これは、Ⅷ層にあたる鹿沼軽石層の上方にかなりの侵食作用をうけていたことを示すものとして観察した。また、Ⅶ層は、ブロック状になっている部分があった。Ⅷ層とⅧ層の境界は、安定していて、ほとんど起伏は観察できなかった。

以上のように、土層の観察を行つてきたわけであるが、注意したい点がある。それは、Ⅱ～Ⅲ層の土層の観察中に炭化粒子がみられたということである。これは、土層にまんべんなく観察できたというのではなくて、ところどころに、わずか数ミリメートル程の小さな粒子があったという事実であった。Ⅳ層、Ⅴ層に於ては、炭化粒子は確認できなかったけれども、Ⅵ層に於ては、1～2センチメートルの炭化物が、スコップで断面を削り取っている際に突然にみつかった。この層は、山方遺跡でみつまっている石核石器と出土層位が同様なので注意した。このため、付近に先土器時代の遺跡があるものと予想し、何か所か「テストピット」を掘つてみたが発見できなかった。



第6図 遺跡の基本層序 (M-15グリッド)

- I 黒色土層 白色粒子、橙色粒子などを含み、粘性、土の締りはあまりない。  
(約45cm)
- II 茶褐色土層 白色粒子、黒色粒子、黄色粒子を含み、上部には特に橙色粒子の流入が著しい。  
(約40cm)
- III 暗褐色土層 軟質のローム。上部はかなりの起伏がみられる。本層の一部に炭化粒子が含まれ、土の締りはあまりなく、粘性がややある。  
(約50cm)
- IV 明褐色土層 硬質のローム。粘性が強く、土の締りはかなりある。  
(約30cm)
- V 暗褐色土層 IV層よりも黒ずみ、白色粒子が混入。  
(約10cm)
- VI 明褐色土層 1cmの炭化粒子が本層最下位に含まれる。粘性が強く、土は強く締っている。手植で力を入れなければ、なかなか削れなかった。  
(約20cm)
- VII 黄褐色土層 比較的土の締りはよく、さらさらしている。本層の上部には起伏がかなりあるが、最下部には、ほとんど起伏はみられない。  
(約25cm)
- VIII 明褐色土層 土の締りは強く、かなりの粘性がある。一部に炭化粒子を含んでいた。



第7図 FG 16, 17グリッド内の土層堆積状態

- 1 表土層(約20~40cm) 黒色土で粘性はない。細かな白色粒子が入っていた。
- 1 黒色土層(約20cm) 粘性はあまりなく、土の締まりはあまりなかった。
- 1 黒色土層(約15cm) 粘性がややあり、白色、橙色粒子がみられ土の締まりもややあった。
- 1 黒色土層(約30cm) 1層に似た層で1層に比べやや粘性があった。
- 2 黒色土層(約30cm) 旧表土で粘性はあまりなく、やや大き目の白色粒子がみられ土の締りがややあった。比較的硬い土層であった。
- 2 暗褐色土層(約20cm) 粒子の荒い赤色粒子を含んでいた。やや粘性があった。
- 3 黒色土層柱穴の覆土 土の締まりはあまりなかった。
- 4 黒色土層柱穴の覆土 土の締まりはあまりなかった。
- 5 黒色土層柱穴の覆土 土の締まりはあまりなかった。白色粒子がみられた。
- 6 黒色土層柱穴の覆土 土の締まりはあまりなかった。白色赤色粒子がみられた。
- 7 赤褐色土層ローム上で赤色のスコリアがみられ粘性はあまりなかった。
- 8 暗褐色土層ローム粒子まじりの土層で粘性がややあり、土の締まりもややあった。
- 9 暗褐色土層ローム粒子まじりの土層で粘性がややあり、土の締まりもややあった。  
また、赤色粒子がみられた。

その他、1号住居跡内の覆土については、住居跡を参照されたい。

#### 第4節 遺構の調査

源氏平遺跡で発見された遺構について、順次説明を加えていきたい。

##### (1) 1号住居址(第8図)

本住居址は、前節のセクションに於いて確認されたものであった。位置は、旧道に最も近く、大きくみれば、谷口部に最も近い部分であった。山林になっていたせいも、保存は比較的良い状態であった。カマドの部分は、トレンチ拡張の段階で煙道に甕形土器が使われていることが確認されていたので、ローム層の上層までは掘り下げたことは、カマドを壊してしまうので、この部分を残しつつ、最後に調査を行った。ローム層の上層からは、約30センチメートル程の高さがあった。

住居址の床面は2層(上層、下層)に分かれておいた。また、住居址の周囲にも、住居址にともなうと判断されるピットが数か所確認された。

遺物の出土状況は、カマドの前面に、かなり砕けた状態で環形土器、甕形土器等の破片が発見さ

れた。また、南壁より12メートル程のところにセクションベルトに引っかけて墨書土器が出土した。

下層の床面は、かなりの粘性があった。柱穴は、上層の調査中にすでに重複が確認されていた。カマド付近は、北壁のカマドの東側では白色粘土が厚くみられた。下層ではカマドの両袖にピットが2個確認された。この付近には、甕形土器の破片があった。また、上層では、東壁の壁面がほぼ一直線であった。しかし、ローム上により、南側の部分が補強されていた。この部分のローム上（ブロック状のもの）をはずすと、東側へやや張り出しており、ピットが確認された→（第9図）。その他、下層の南壁の一部には、「作り出し」状になっている不整形の段が認められた。この南壁中央よりやや入ったところで石錐が破片となって出土した。床面より、掘り方に至るまでの土層中に出土遺物は発見されなかった。

形状………方形であった。下層では、東壁の一部が張り出していた。

規模………5.60（南北）メートル×5.10（東西）メートル

主軸方向…N-25°-W

カマド………幅（壁面付近）約1.77メートル 長さ 約2.2メートル

柱穴（cm）P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> P<sub>4</sub>（第8図）

長径 42 55 42 70

短径 40 46 40 52

深さ 56 52 54 56

（下層）P1 P2 P3 P4 P5 P6 P7（第9図）

長径 42 50 35 48 48 52 38

短径 41 48 32 47 46 47 31

深さ 81 71 78 62 56 48 28

下層住居址外側ピット P5 P6 P7 P8 P9 P10 P11

長径 52 52 56 54 50 74 42

短径 49 45 55 47 48 46 40

長さ 28 10 29 28 23 25 17

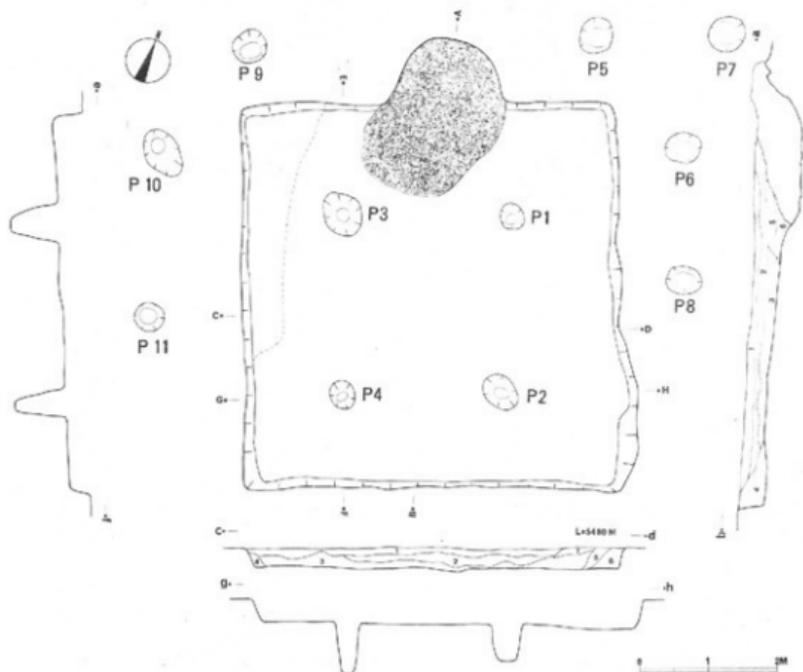
床面………上層の床面は、ほぼ平坦で、強く踏み固められていた。北西コーナーの一部には、貼り床はみられなかった。カマドの前面に於いては、わずかな凹凸が観察できた。下層は、非常に粘性があり、上面の貼り床との間に造物がはさまった様な状態であった。また、掘り方は、凹凸が非常に顕著にみられた。

壁………ほぼ垂直に立ち上がっていた。また、全体に保存は最も良好であった。

張り出し部………出入口部と思われるが、下層の床面までに達する間に、テラス状の張り出しがあり、

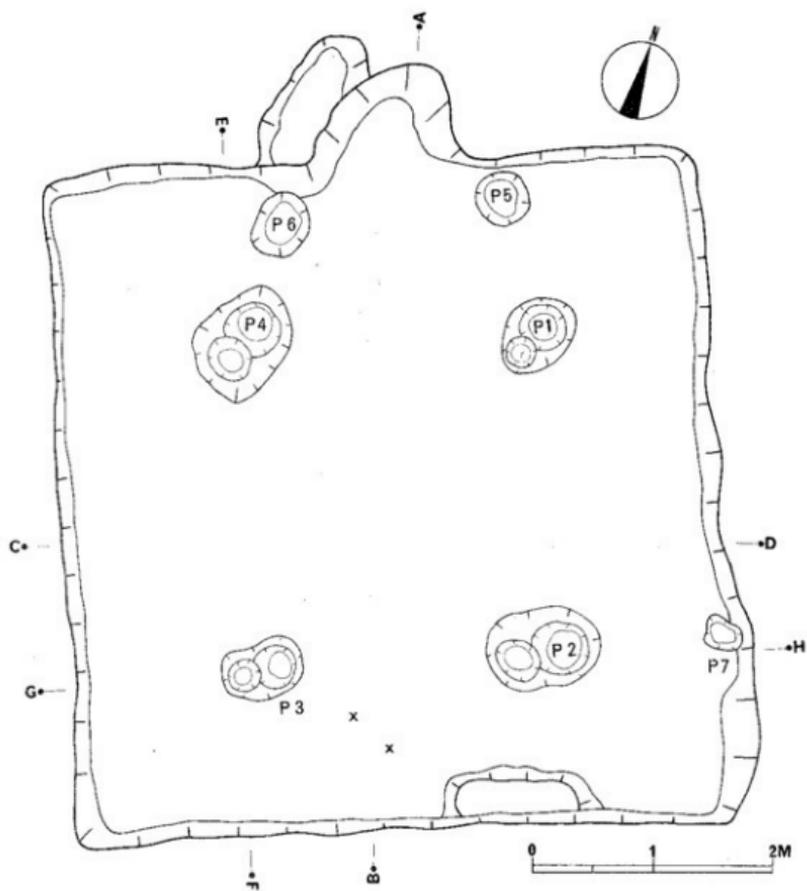
住居址へ下る「タタキ」のようにも受け取れた。周溝はなかった。

遺物……上層では、カマドの前面にいわば、廃棄された様な状態で土器片がにまかく碎けて出土した。南壁付近より、環形土器（須恵器）が出土した。下層では、壺形土器の破片が比較的多かった。また、南壁の「作り出し」状の部分付近で石錘が出土した。

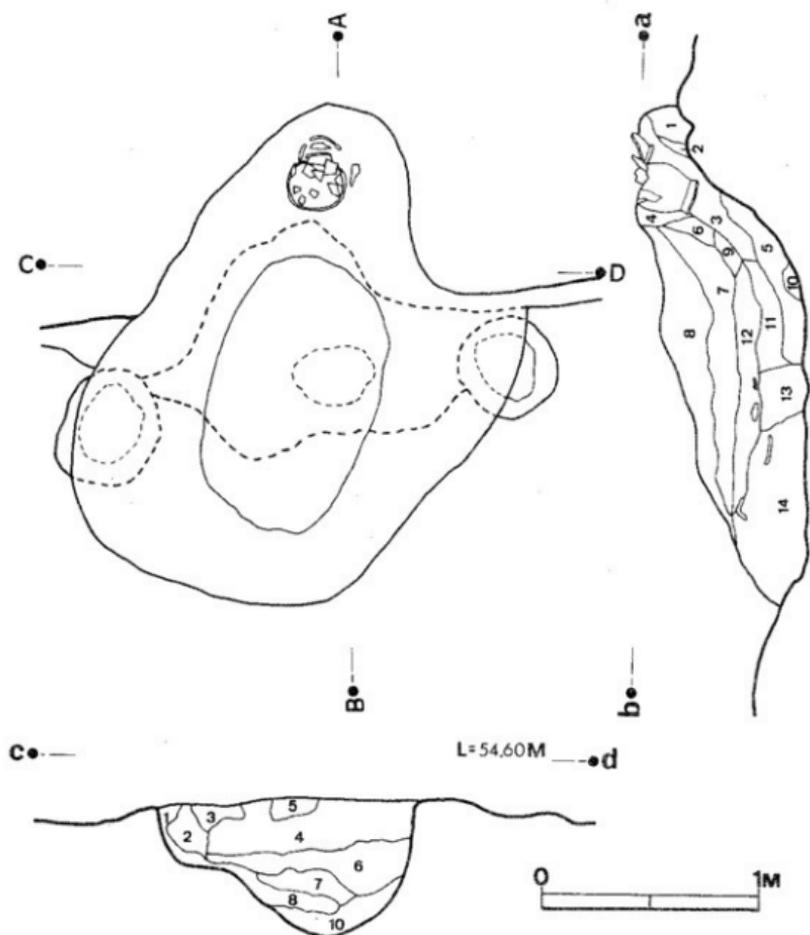


第8図 第1号住居址（上層）実測図

- |   |       |                                      |
|---|-------|--------------------------------------|
| 1 | 暗褐色土層 | 黄色粒子，ローム小ブロックを含み，土の締りはあまりなく，粘性はややある。 |
| 2 | 明褐色土層 | 赤色粒子，黄色粒子を含み，粘性はややある。                |
| 3 | 明褐色土層 | 赤色粒子，黄色粒子，炭化物を含み，粘性は強い。              |
| 4 | 明褐色土層 | ローム粒子，黄色粒子を含み，粘性はややある。               |
| 5 | 暗褐色土層 | 1～2cmの粘土，炭化物，赤色粒子を含み，粘性は強い。          |
| 6 | 暗褐色土層 | 4～5cmの粘土塊，炭化粒子，赤色粒子を含み，粘性は強い。        |



第9图 1号住居址(下層)实测图



第10図 第1号住居址のカマドの実測図

- |     |       |      |       |
|-----|-------|------|-------|
| 1 層 | 明褐色土層 | 8 層  | 粘土層土層 |
| 2 層 | 明褐色土層 | 9 層  | 明褐色土層 |
| 3 層 | 暗褐色土層 | 10 層 | 明褐色土層 |
| 4 層 | 明褐色土層 | 11 層 | 暗褐色土層 |
| 5 層 | 明褐色土層 | 12 層 | 明褐色土層 |
| 6 層 | 明褐色土層 | 13 層 | 暗褐色土層 |
| 7 層 | 明褐色土層 | 14 層 | 灰褐色土層 |

## (2) 2号住居址

本住居址は、1号住居址の北西方向約14メートルのところにつくられたものである。グリッドで見れば、D・Eの14・15グリッドに存在した。発見された当初は、1号住居址と似たような印象を受けていた。しかし、調査を行ってみると、その様子が大分違っていることが判明した。その一つは、カマドが、いわば、平らにならされたようになっていたことであった。

カマドに使われた粘土が、何らかの工具により、除々にならしていった様子がカマドを構築していた粘土の広がり、その上に残された波状の痕跡によって明らかになった。肩溝も、東壁より南壁を経て西壁に至る住居址の南側の約半分にめぐっていた。

遺物は、中央よりやや南東よりで墨書土器が出土した。住居址の東側のところより多くのものが出土した。このカマドの「つぶした」様な状態に呼応するかのように、土師器・須恵器が破片となった形でこの部分より出土した。また、もう一点あげておかなければならないのは、P1の柱穴の底面より出土した須恵器環形土器片のことである。普通に考えるならば、土器が出土するはずのない部分であった。ここより出土したというのはどういうことであろうか。この状態を推定するその一つの手掛りとなるのは、先に述べたカマドの「平らにならした」様な状態であった。この他、土器に完形品が全く見当たらないこと。そして、土層の問題であった。土層は、他の住居址に比べ土の成分そのものは大差がなかったが、きわめて細く分層できた。この土層は、確認できた土厚が僅か20センチメートルであつたにもかかわらず、11層確認された。自然堆積と考えるには、あまりにも不自然であった。だとすると、それ以外の点が考えられた。それは、いうまでもなく、意図的に人為的に埋められた状態ということであった。

P1でその底面より発見された須恵器環形土器は一体どの様に考えたらよいのであろうか。カマドの北東コーナーの一部には、壊れた土器片が散乱していた。これは、明らかに捨てられた状態として判断しても差し支えないものと考えられた。だとすると、その際にP1に落ち込んだと考えられるのではないだろうか。しかし、そこに木柱があったならば、このピットの底部に入ろうはずがない。P1の柱穴の調査中に、土層がいくつか分層できた事を考えあわせると、そこに柱穴が引き抜かれた段階以後で土器片が廃棄されたと考えられた。

このように、この住居址は、カマドの構築中あるいは、完成直後壊れられ、柱穴が引き抜かれた。その後、土器が廃棄され埋られ、住居址としての機能が中断された様子のある程度把握できた遺構であった。生活必需品は持ち去り、それとともに、そこで引き抜かれた木柱も住居址の柱として使用されたと考えるのは勿論のこと、他の何らかの目的で使用された事も容易に推測できた。

形状……………方形、東壁南側にやや強い膨らみがみられた。

規模……………4.85（東西）×4.70（南北）メートルであった。

主軸方向…N—20°—W

カマド（ならされた状態）

長さ 3.35メートル

幅 1.35メートル

粘土上に波状の凹凸があり、須恵器高台付坏形土器の破片が直上より出土した。

柱穴 P1 P2 P3 P4

長径 50 46 63 50

短径 30 41 45 44

深さ 76 76 65 66

P1より須恵器坏形土器片が出土した。

壁面 ……やや外向して立ち上っていた

壁高

東壁 14センチメートル 南壁 22センチメートル

西壁 13センチメートル 北壁 12センチメートル

周溝

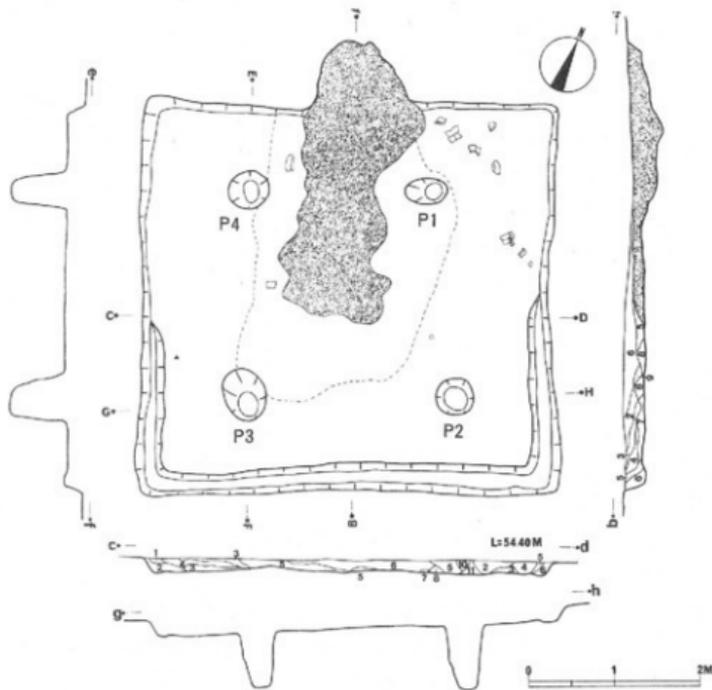
東壁の南側半分と南壁全体と西壁の南側半分に存在した。

遺物の出土状態

遺物は、北東コーナー付近に埴形土器などが出土した。そのほとんどは、床面直上として扱えてもいのものであった。また、P1の底面より須恵器坏形土器の（半分残存）破片が出土した。カマドの西側の近接している部分では、甕形土器片、また、それより南方へ寄ったところで、須恵器蓋形土器片が出土した。つまりは、欠損していた。

鉄製品片は、西壁のほぼ中程の、丁度周溝が始まるあたりの、床面上で出土した。

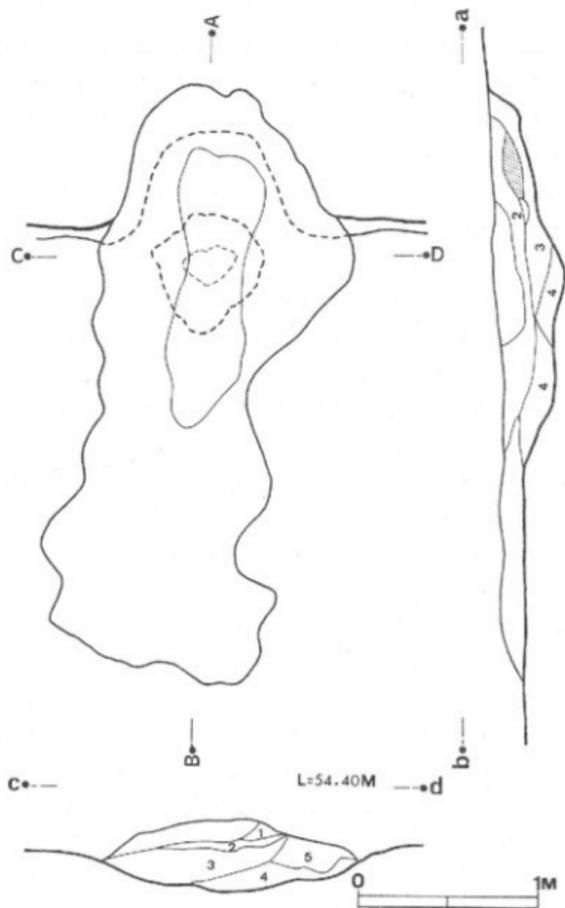
その他、墨書土器が出土した。これは高台付坏形土器（内黒土器）であった。床面より、やや浮いた形で内面を上方へ向けた恰好で出土し、裏返しにして底部に墨書があることが確認されたものであった。墨書は、「山井」と記されていた。



第11図 第2号住居址実測図

2号住居址土層説明

- |      |       |   |
|------|-------|---|
| I    | 暗褐色土層 | 1~2cmのローム粒子、赤色粒子を含み、土の締りは弱く、炭化物をわずかに含む。 |
| II   | 暗褐色土層 | ローム粒子、赤色粒子を含み、上部はやや土の色が明るい。             |
| III  | 暗褐色土層 | 1~2cmの粘土(褐色)を多く含み、粘性はややあり、土の締りは比較的弱い。   |
| IV   | 暗褐色土層 | 炭化物、褐色粒子を含み、粘性はない。                      |
| V    | 暗褐色土層 | 赤色粒子、白色粒子を含み、土の締りはあまり良くない。              |
| VI   | 暗褐色土層 | ローム粒子を比較的多く含む。土の締りはあまり良くない。             |
| VII  | 暗褐色土層 | 赤色粒子、1~2cmの粘土をわずかに含む。土の締りは強く、粘性はやや強い。   |
| VIII | 暗褐色土層 | 多くの粘土粒子を含み、粘性が強く、土も比較的ひきしまっている。         |
| IX   | 暗褐色土層 | ローム粒子、赤色粒子、白色粒子を含み、土の締りは強く、粘性もある。       |
| X    | 暗褐色土層 | 粘土塊を多く含み、粘性が強く、一部非常に強く締っているところがある。      |
| XI   | 暗褐色土層 | 粘土粒子を多く含み、粘性が強く、土は良く締っている               |



第12図 第2号住居址カマド実測図

2号住居址カマド土層説明

1. 褐色土層 粘土ブロックを含む。
2. 明褐色土層 ローム粒子, 焼土ブロック, 炭化物を含む。
3. 暗褐色土層 ローム粒子, 焼土粒子, 粘土ブロック及び焼土ブロックを含む。
4. 黄褐色土層 粘土ブロック, ロームブロックを多く含む。
5. 黄褐色土層 ローム土層。

### (3) 3号住居址

本住居址は、2号住居址の北西方に接してつくられていた。その距離は、約30センチメートルで、その住居址と接する付近は、あぜのようにも見えた。本住居址の東壁と西壁の外側には、それぞれ2個づつのピットがあった。形は方形の形状を呈していたが、北壁と南壁の長さよりも、東壁と西壁の長さが長い長方形状ともいべきものであった。北壁には、比較的小さなカマドが構築されていた。カマド内部より、赤変した、環形土器片や甕形土器片が発見された。北壁の西側半分は、やや膨らんだ状態を示しており、この部分より、西壁全体にかけてみてもやや膨らんだ様に湾曲していた。南壁は、ほぼ一直線であった。北壁の東側半分の部分と東壁全体にかけては、住居址の西側半分と対応するかのようになり、逆に、内側へ反った様な状態を示していた。

住居址の内部には、計九個のピットが確認された。その最大のものは、長径1.6メートル、短径1.2メートル、深さ20センチメートル程の不整形のピットであった。このピットを含めて、住居址の南側のもの、南側に位置するピット群を東西に結べば、それは、一直線になり、この特徴的な住居址を考える上で見逃してはならない要素となった。

西壁のほぼ中央には、ピットが3カ所みられたが、これらについては、その位置関係を考え合わせると、「出入口」に相当する部分にあたるのではないかと推測された。

遺物の出土状態では、きわだったあり方と特徴的な遺物が出土した。まず、出土位置は、住居址の北側半分よりは、ほとんど甕形土器片などの小片のみしか出土しなかった。また、それに対して、南半分より豊富な遺物が出土した。

鉄製品片は、東壁の中程のやや中央に寄ったところと東南コーナー付近より出土した。床面直上よりの出土であった。

紡錘車は、西壁の「出入口」と考えられる南側付近と東南コーナー付近よりそれぞれ出土した。西壁付近のものは、床面より、約10センチメートル程浮いた状態であった。

土鍾(甞状)は、南側全体に散乱して出土したが、大形のピットより、4個程出土したことは注意された。その他、凹石が南側でやや離れて1個体分出土した。ほか、石製の「ナイフ」状の石器も出土した。

このように、3号住居址は、特徴的要素を多く備えた住居址であった。他の住居址と考え合わせるならば、1号住居址、17号住居址と比べられるように判断された。17号住居址は、「出入口」と考えられる部分が南壁ではなく、東側につくられており(5号住居址でも東壁につくられていたようであったが、掘り込みが浅かったために、ルーム上面に至るまでに確認できなくなった)、1号住居址も東壁につくられており、他の住居址が粘土を南壁下にはってつくった「出入口」と思われる遺構ときわだったあり方を示していた。

1号住居址(下層)は、東壁の外側にピットをもち、石鍾も発見されていることなどから、性格

的には、この1号住居址下層のものと近似しているのではないかと考えられた。

結論的にいえば、「工房址」ではないかと判断するに至った。一般住居址としては、あまりにも、不自然な出土状態、出土遺物であった。

形状……やや屈曲した長方形

主軸方向…N-24°-W

カマド……南北軸部 約1.4センチメートル 天井部1部残存していた。

東西軸部 約1.3センチメートル

規模……5.14（南北）×4.52（東西）メートルであった。

柱穴 (cm)	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
長径	50	66	50	50	166	21	30	21	31	32	30	20	24
短径	44	59	45	46	122	19	27	20	30	31	20	18	23
深さ	36	30	90	42	20	18	19	16	34	20	26	24	21

壁……東壁の立ち上がりは、比較的弱い、西壁の両側では、強い立ち上りを示していた。

壁高……東壁約22センチメートル

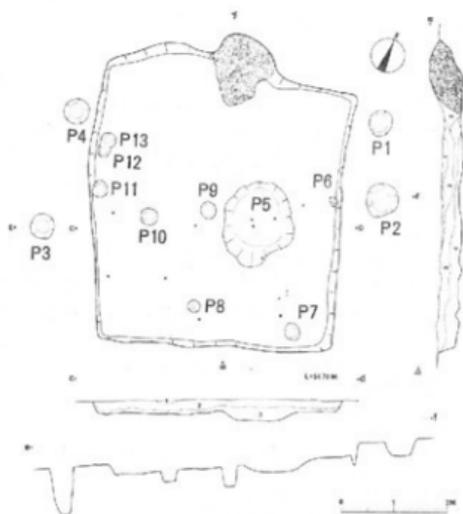
西壁約24センチメートル

北壁約30センチメートル

南壁約35センチメートル

遺物の出土状態

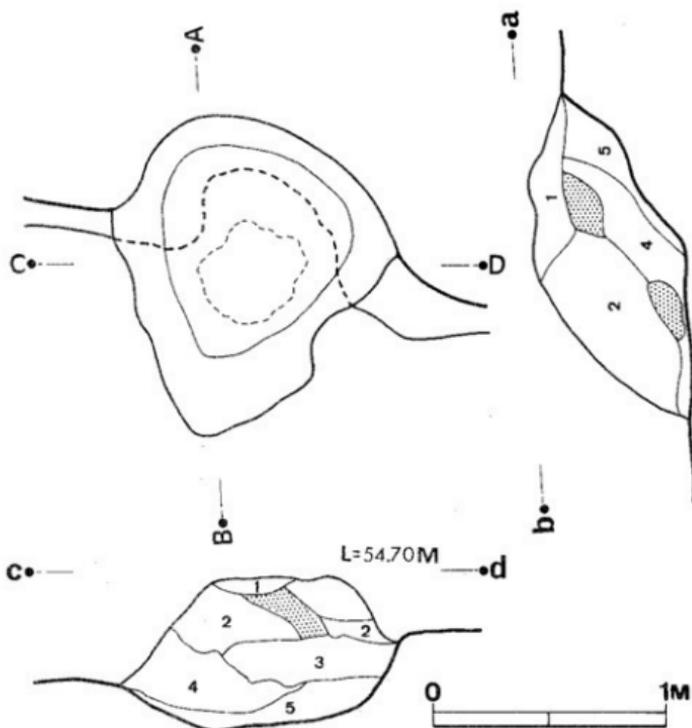
住居址の南側中心に各種の土製品、石製品、鉄製品が床面上より出土した。復原できうる土器片は少なかった。カマド内より出土した土器の中に土師境形土器片などがあつた。



第13図 第3号住居址実測図

### 3号住居址土層説明

- |           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| I 黒色土層    | 炭化物, ローム粒子を少量含む。粘性はない。           |
| II 褐色土層   | 1~2cmの粘土及び粘土粒子を多く含む。粘性はややある。     |
| III 暗褐色土層 | ローム粒子, 粘土粒子, 焼土ブロックを含む。粘性はあまりない。 |
| IV 暗褐色土層  | 粘土粒子, 焼土ブロックを含む。                 |



第14図 第3号住居址カマド実測図

### 3号住居址カマド土層説明

- |          |                     |
|----------|---------------------|
| 1. 黒色土層  | 表土                  |
| 2. 暗褐色土層 | 焼土ブロック, 粘土小ブロックを含む。 |
| 3. 明褐色土層 | 黒色粒子, ローム粒子を含む。     |
| 4. 赤褐色土層 | ローム粒子を含む。           |
| 5. 黄褐色土層 | 粘土ブロックを含む。          |

#### 14) 第4号住居址

この住居址もまた、問題を多く含んでいた遺構であった。1号住居址の北側の約1.2メートル程のところにつくられた。北側にある5号住居址とカマドの部分が重複していた。したがって、新旧関係は明らかで、本住居址の方が新たにつくられた。5号住居址は、本遺跡中最も古い住居址であった。本住居址、下の西南方に重複して、大形の土壌が発見されたが、出土遺物は、皆無であり、その性格、時期は、明確になしえなかった。

土壌 東西幅 2.71メートル

南北幅 3.01メートル

深さ 0.89メートル

この土壌には、西壁を構築する際に、ローム土を入れ、壁を補強していた様子が観察された。

カマドには、切石が使用されていた。カマドの調査前の、住居址確認の段階に於て、切石の一部が、覆土中より発見されていた。カマドには、両袖に切石がみとめられ、その基部付近のみが、残存していた。また、この内側は、スズで真黒になっており、使用当時の姿を思いうかべながら調査を行った。

柱穴は、確認されなかったが、上層の断面を調査中（第15図参照）に小さなピットが観察された。

床面は、ほとんど平坦であった。

形状………方形

規模………4.35（東西）メートル×3.80（南北）メートルであった。

主軸方向 N-31°-W

カマド……東西幅 1.03メートル

南北長さ0.85メートル

本住居址同様にカマドに切石を使用していた住居址は、16号住居址、12号住居址であった。

明確な柱穴は確認されなかったが、ピットが一部に確認されており、このピットの性格について検討した明らかにできなかった。

遺物の出土状態

本住居址の確認の際に、確認面より切石と若干の土器片が出土した。住居址を掘り込んでゆくと、その北側半分に、土器片がおびただしく出土した。その土器片のほとんどは、甕形土器のものであった。土層の状態などを考え合わせると、この部分（北側の2～4層）は、最初に埋まった様子が観察できた。土器片は北側より南側へ流れ込んでいる様子が把握できた。

これらの土器は、投げ捨てられた様であった。この中には、土器の底部が、全くふくまれていなかった。これは、注意すべき現象であるように思われた。これらの土器の底部をなくすことによ

て他の何らかの用途に応じて使用された可能性を残すものであった。

復原した土器類は、比較的大形の甕形土器4～5個体分であった。

南北のセクシベルトに埋まって小型の甕形土器が出土した。出土層位は、第2層であった。

紡錘車が覆土中1層より出土した。

南壁の一部には、白色粘土が楕円状に貼り付けられていた。その他、表面が平滑で平たい楕円形の鎌が2～3個土器片とともに出土した。

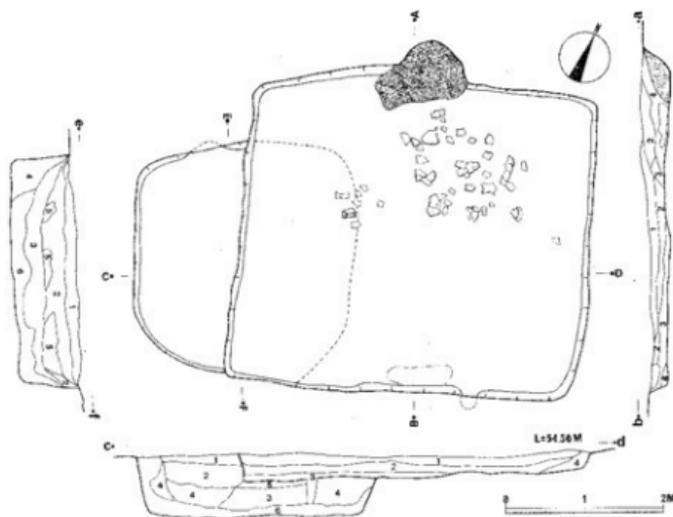
壁……東壁……22センチメートル

西〃……34〃

南〃……20〃

北〃……35〃

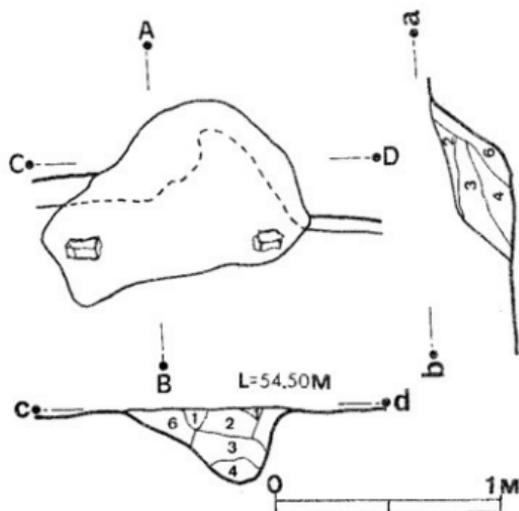
西壁の立ち上がりが急であった。



第15図 第4号住居址実測図

#### 4号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 粘土粒子、ローム粒子、赤色スコリアを含む。
2. 暗褐色土層 ロームブロック、粘土小ブロックを含む。
3. 暗褐色土層 ロームブロック、粘土小ブロック、赤色スコリアを含む。
4. 暗褐色土層 ロームブロック、赤色スコリアを多く含む。
5. 茶褐色土層 粘土ブロック、焼土粒を含む。
6. 暗褐色土層



第16図 第4号住居址カマド実測図

4号住居址土層説明

- |          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| 1. 黒色土層  | 表土。赤色スコリア、粘土粒子を含む。               |
| 2. 暗褐色土層 | 粘土ブロック、赤色スコリアを含む。                |
| 3. 赤褐色土層 | 焼土ブロックを含む。                       |
| 4. 赤褐色土層 | 粘土粒子、ローム粒子を含む。                   |
| 5. 赤褐色土層 | 粘土粒子及び1~2cmの焼土ブロックを含み、粘性がややある。   |
| 6. 赤褐色土層 | 5層より黒色粒子が多く見られ、ローム粒子なども、所々に見られる。 |

(5) 第5号住居址

本住居址は、4号住居址の北側に接してつくられた。6号住居址の東側約1メートルのところであった。住居址の中では、出土遺物が比較的少なかった。遺跡中の住居址の中では最も古い段階と判断された住居址であった。

形状……ほぼ正方形に近い。形としては、一般的であったが、西壁がやや湾曲しており、東壁は逆に内側へ反っている様子が観察された。これは、住居址の中では、3号住居址の様子とよく似ているものであった。土層は、自然堆積を示していた。土層の一部にピットが認められた。(土層14)

規模……4.3(東西)メートル×4.1(南北)メートルであった。

壁……それぞれの壁は、急な立ち上がりを見せていた。そして、壁高も、他の住居址に比べて非

常に高いものであった。

東壁……48センチメートル

西“……45 “

南“……46 “

北“……48 “

主軸方向 N—11°—Wであり、真北に対して住居址中最も近い主軸方向を示していた。

床面……カマド周辺より中央にかけて貼り床がみられた。

柱穴……東側のものが西側のものに比べて小さかった。

P 1 P 2 P 3 P 4

長径 26 21 37 37

短径 24 20 33 36

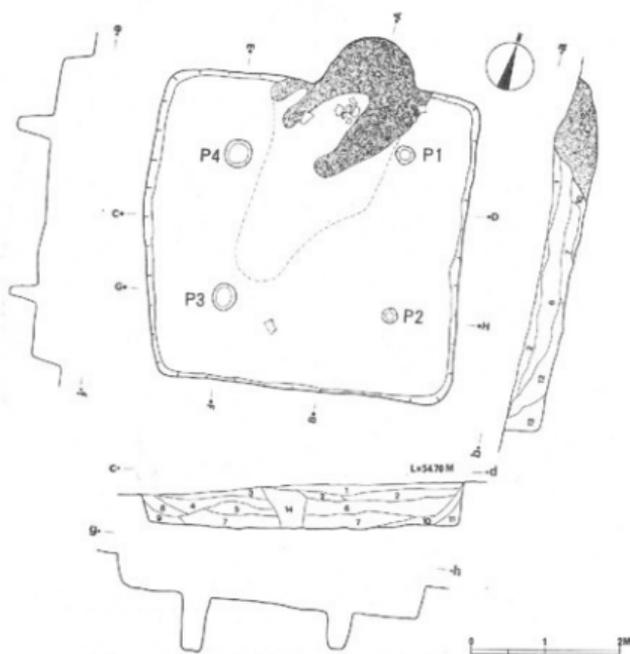
深さ 41 52 35 47

カマド……本住居址を特徴づけているものであった。カマドの主軸方向は真北に対して西方へかなりずれていた。保存状態は良好であった。焚口部は、西南方に位置しており、東袖はかなり厚く構築されており、重厚なつくりを示していた。西袖は二又に分かれており、東袖に比べてやや力強さを欠いたつくりになっていた。火床面も、床面より高くつくられており、底部は焼けて赤色を呈していた。煙道もよく残っており、その部分には、丸く褐色土が混入していた。

#### 遺物出土状態

遺物は、比較的少なく、主なものは、カマド内より出土した。カマドの東袖部より出土したのは、長胴甕であった。半分程しか残存していなかったが、単唇口縁部をもつ、たでのへら削り痕が明瞭に残っているものであった。カマドの内部より、土師器環形土器が出土した。この土器は、火床部上に他の変形土器片とその底部とともに、ほとんど攪乱を受けずに出土した。この土器は、底部がやや丸味を帯びており、体部へは、ほぼ直線的に立ち上っていた。

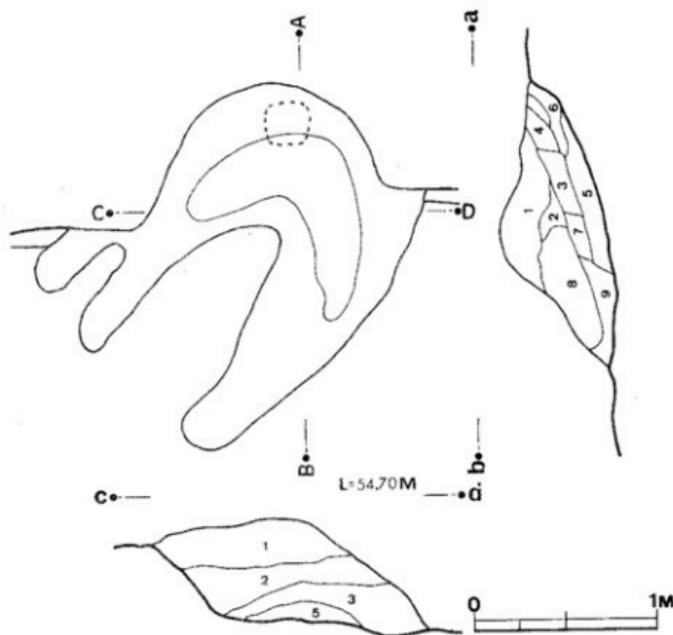
その他、土製品、石製品は出土しなかった。



第 17 図 第 5 号住居址実測図

#### 5号住居址土層説明

1. 黒色土層 炭化物，ローム粒子を含み，粘性，土の締りはあまりない。
2. 暗褐色土層 粘土，赤色粒子，炭化物を含み，粘性はややある。
3. 暗褐色土層 ローム粒子，3～4cmのロームブロックを含み，粘性はあまりない。
4. 暗褐色土層 3層とほぼ同じ成分であるが，ロームブロックの含入が軽く黒色土が比較的多く含まれる。
5. 暗褐色土層 土の締りが強く，粘性は比較ある。
6. 暗褐色土層 炭化物，1～2cmのロームブロックが見られ，粘性はややある。
7. 暗褐色土層 黒色土，赤色粒子，ローム粒子，炭化物などがあり，土の締りは良く，粘性もある。
8. 黄褐色土層 ローム粒子が多く含まれ，土の締りはあまりない。
9. 黄褐色土層 ローム土の含入が多く，粘性があり，土の締りも比較ある。
10. 暗褐色土層 3～4cmのロームブロック，黒色土がみられ，住居址の壁の上部より斜めに堆積している土層である。これは，自然堆積の状態であろう。
11. 黄褐色土層 ローム粒子が多く含まれ，土の締りは良くなく，粘性もあまりない。
12. 暗褐色土層 3～4cmのロームブロック，赤色粒子を含み，土の締りも粘性もあまりない。
13. 暗褐色土層 12層と成分はほぼ同じであるが，土の締りはやや強い。
14. 暗褐色土層 黄褐色粒子，赤色粒子，炭化物を含み，土の締りは強く，粘性はあまりない。



第18図 第5号住居址カマド実測図

5号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 (粘土層) 1~2cmの焼土及び炭化粒子を含む。粘性が強く、土も非常に良く締っている。
2. 暗褐色土層 所々に粘土塊が見られ、粘性、上の締りとも少ない。
3. 暗褐色土層 1~2cmの赤色粒子、黒色土、炭化物が見られる。本層は、カマド煙道部に当たっており、1層下部がはがれ、それが4層に向って流れたような状況が観察される。
4. 黒色土層 赤色粒子、白色粒子が見られ、土の締りはあまりなく、バサバサしている。
5. 暗褐色土層 赤色粒子、黒色土が見られるが、3層に比べ、その混入は少ない。粘性は良くなく、土の締りも良くない。
6. 暗褐色土層 赤色粒子、ローム粒子、1~2cmの粘土ブロックが見られ、粘性はあまりなく、土の締りはややある。
7. 暗褐色土層 白色粒子、黄色粒子、炭化物を含み、本層の最下部は火焼部になっており、真赤に焼けている。土の締りはあまりない。
8. 暗褐色土層 1層と比べ粘性がやや少なく、最も異なる点は、多くの黒色土を粘土の中に混入していることである。
9. 暗褐色土層 赤色粒子、黒色土が見られる。粘性は良くなく、土の締りも良くない。

(6) 第6号住居址

本住居址は、遺跡内に於て発見された住居址の中のほぼ真中に存在した。東側約1.2メートルのところ、5号住居址、西側約4メートルのところ、3号住居址、北側には、約2メートル離れて2号住居址が存在した。本住居址の南壁に一部重複するように、掘立柱建物址が発見された。この掘立柱建物址は、後述するが、1～6号住居址が「コ」の字形に取り囲むような形になっていた。

形状

方形であるが、北壁の東側と西壁の北側の部分にやや膨らみがみられた。

規模

4.9（東西）メートル×4.20（南北）メートルであった。

主軸方向

N-17°-W

柱穴 P1 P2 P3 P4 P5 P6

長径 43 43 44 38 36 49

短径 40 31 36 35 35 41

深さ 41 64 77 64 64 62

柱穴は6本であった。P5、P6のピットは、最初確認できなかったが、床面精査の際に発見された。本遺跡中唯一のものであった。他に6本の柱穴をもつ住居址は確認されなかった。

床面

床面は、北壁にあったカマドを取り囲むように貼り床になっており、この面は、ほぼ平坦で、強くしまっており、粘性もあった。掘り方を露呈させるのに苦労した程であった。

周溝……周溝は存在しなかった。

壁……壁面は比較的ゆるやかな立ち上がりを示していた。南壁と北壁がやや高かった。

壁高 東壁……28センチメートル

西〃……30 〃

南〃……41 〃

北〃……40 〃

カマド……北壁のほぼ中央に構築されていた。

東西……約1.25メートル

南北……約1.75メートル

東側がほとんど壊れていた。西側の部分は比較的よく残存していた。また、このカマドの上部より、紡錘車が出土した点は注意された。

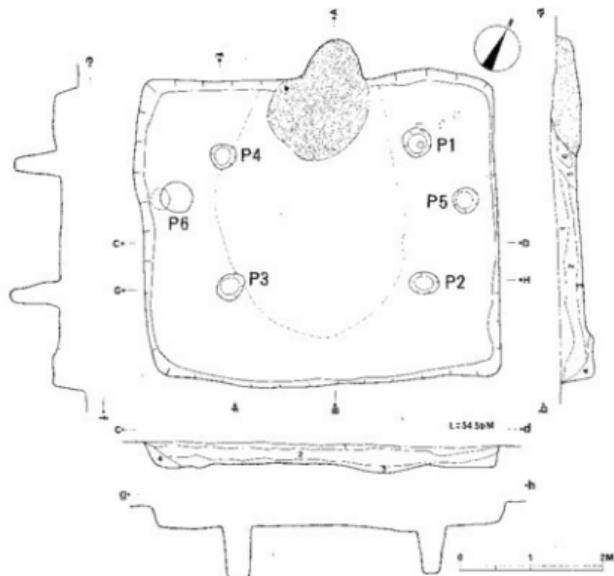
遺物の出土状態

遺物は、北東のコーナー付近にややまとまりをみせて出土した。小形の須点器・环形土器は底部を上面にして出土した。付近には甕形土器片もみられたが、それらは復原できないものであった。

また、先述したように、カマドの上部より紡錘車が発見された。これは、北壁に、なかば接するようになり、やや斜めになった状態で出土した。他の土製品、石製品は、本住居址よりの出土はなかった。

#### 七層

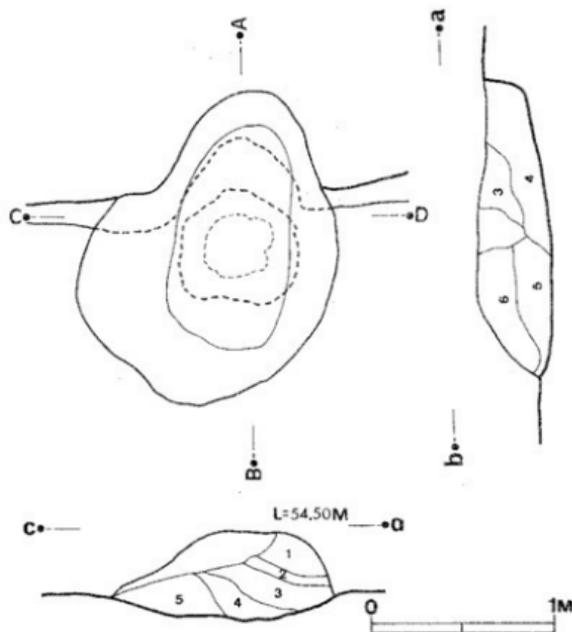
七層は、東西においては、ほぼ自然堆積の状態を示していた。しかし、南北のものは、やや様子が違っていた。それは、カマドの前面にある5層と6層であった。これは、4号住居址にみられた様な状態を示すものであった。4号住居址のように、土器片などは、ほとんど発見されなかったが、何らかの有機物がここに投棄された可能性も考えられた。北東コーナーにあったほぼ床面上の土器類にしても、それらが投げ棄てられた可能性も残されていると推測するに至った。



第19図 第6号住居址実測図

#### 6号住居址土層説明

1. 黒色土層 赤色ローム粒子を含み、上の締りはあまり良くない。
2. 暗褐色土層 赤色粒子、スコリア、ローム粒子、白色粒子を含み、粘性はややある。
3. 暗褐色土層 ローム粒子を含み、粘性はある。



第20図 第6号住居址カマド実測図

6号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 粘土粒子、焼土粒子、炭化粒子を含み、粘性はなく、土の締りは良い。
2. 赤褐色土層 焼土ブロック、粘土ブロック、白色粘土を含み、粘性はある。
3. 明褐色土層 白色粘土の混入があり、粘土ブロックが全体に見られる。
4. 明褐色土層 ロームブロック、黑色スコリアを含む。
5. 黄褐色土層 ローム土層、粘性があり、土の締りも良い。
6. 黄褐色土層 本層には粘土ブロックの混入がはなはだしく、焼土ブロック、炭化物が見られ、粘性が強い。

(7) 第7号住居址

本住居址は、1715番地内(畑地)に於いて発見された。住居址は、5号住居址の東北方28メートル、10号住居址の北西方約4メートル程の場所に位置していた。この付近に位置した住居址はK-NのJ3グリッドに設定したトレンチより確認されたものであった。

形状……南北がやや長い方形に近いものであったが、コーナー付近は、隅丸形の感があった。

規模……3.42(東西)メートル×3.65(南北)メートルであった。

主軸方向……N-21°-W

壁……壁面の状態は、悪かったが、それでもその規模等の確認については、何ら支障がある程ものではなかった。壁高は、南側へ向う程低くなっていた。また、同じように、東側へ向う程低くなっていた。この付近が畑地だった為に、床面上の20~30センチメートルの部分にまで耕作が及んでいたが、それ以下の僅かの間の状態をかるうじて確認し調査することができた。東南コーナーの状態はあまりよくなく、逆に北西コーナーの状態は最も良好であった。

壁高……東壁……8センチメートル

西……10 "

南……9 "

北……25 "

柱穴……住居址内に於いては、柱穴は確認されなかったが、東壁と西壁のやや南側に接して外側にそれぞれ1個づつピットが確認された。

P1 P2

長径 75 64

短径 27 52

深さ 16 20

東壁外側のものは、住居址の長軸に対してその長軸がほぼ平行になっていた。西壁のものは、ピットは、やや不整形形になっており、壁の一部と重複していた。

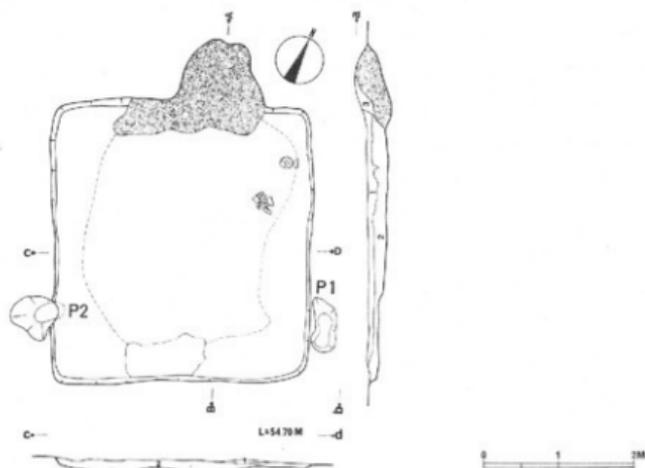
カマド

カマドは、北壁の中央よりやや東側寄りに構築されていた。カマドは、南北1.25メートル、北壁付近で約1.2メートルを計る。特徴的なものは、カマドの焚口部付近は、構築の際使用した粘土が西方へ長く延びていたことであった。この粘土をはずすと、長楕円形の砂岩製の石が横たわっていた。それは南北にほぼ平行していた。縦が約40センチメートル、横は約18センチメートル程のものであった。赤変はしていなかった。

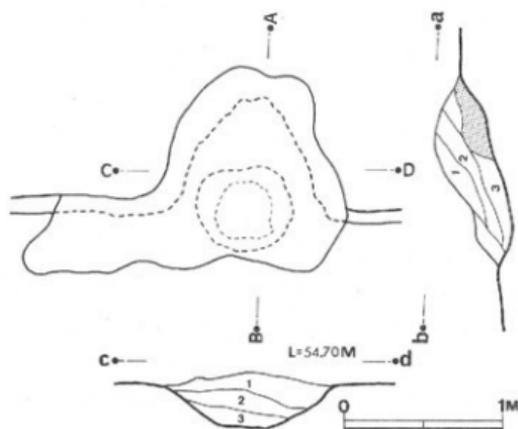
遺物の出土状態

遺物は、全体的に散乱しており、畑作等で残存状態はあまりよくなかった。明らかに床面直上で

出土したものは、東北コーナー付近より出土した甕形土器（底部付近のみ残存）であった。



第 2 1 図 第 7 号住居址実測図



第 2 2 図 第 7 号住居址カマド実測図

7号住居址カマド土層説明

1. 黒色土層 表土
2. 明褐色土層 粘土小ブロック、焼土粒を含む。
3. 明褐色土層 粘土小ブロック、焼土ブロックを多く含む。

(8) 第8号住居址

本住居址は、発掘された住居址の中で最も攪乱を受けていた住居址の一つであった。付近の11号、10号住居址についても同様であった。7号住居址の東側1.2メートル、10号住居址の北側約3.5メートル程のところに位置していた。北東コーナーと南東コーナー付近には、J列トレンチで顕著にみられた「いも穴」があり、既に攪乱されていた。確認面が、ほとんど床面上近くであったので、上層を確認する迄に至らなかった。また、出土遺物もこのためか非常に少なかった。ピットは南壁ぎわで発見された1個のみであった。

形状……ほぼ方形であったが、北壁は、カマドを中心としてややずれが観察できた。

規模……3.99（東西）メートル×3.89（南北）メートルであった。

南西コーナーがやや出張の様子がみられた。

主軸方向……N-28°-W

柱穴 P1

長径 48

短径 38

深さ 26

南壁の壁際に1個のみ確認された。本遺跡中このようなあり方は本住居址のみであった。壁……壁高は、前述のようにほとんど残存していなかったために明確にできなかったが、それについて記してみると、

東壁……5センチメートル

西〃……8 〃

南〃……4 〃

北〃……20 〃

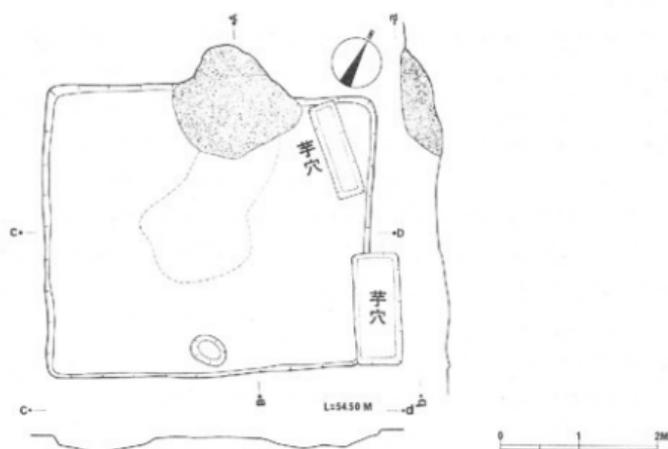
床……床面は、カマドよりの部分ほぼ中央にかけて貼り床がみられた。その他の部分については、凹凸がみられ、それは、南西方向によく観察された。

カマド……北壁中央やや東寄りに構築されていた。北壁より約1メートル程のところまでカマドの粘土は広がりをみせていた。本遺跡中でこのような粘土の広がりは、第6号、第11号、第16号住居址などと近似していた。

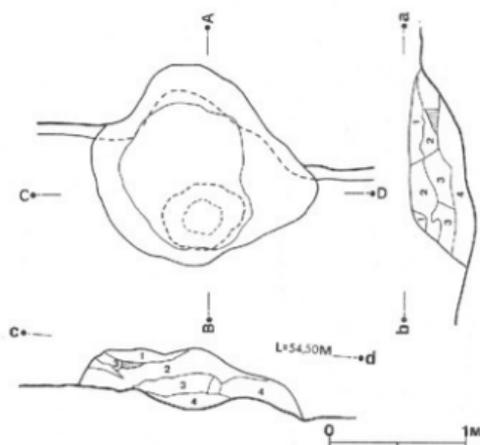
※カマドは、東側の部分は残存状態が比較的良好であったが、東側の部分は、崩れた状態を呈していた。

遺物の出土状態

カマド内より、赤色した壘形土器片が僅かに出土した。先述したように床面上と判断される遺物は、攪乱のせいほとんどなかった。



第 2 3 図 第 8 号住居址実測図



第 2 4 図 第 8 号住居址カマド実測図

8号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 粘土粒子を含み、粘性はなく、土の締りは良い。
2. 暗褐色土層 焼土粒子を含み、粘性がやや見られるが、土の締りはない。
3. 暗褐色土層 粘土層
4. 明褐色土層 炭化物を含み、ロームブロックや黒色土の混入が見られ、粘性がある。

(9) 第9号住居址

本住居址は、第10号住居址の一部であった可能性も確認面で推測された。本地域付近は、視岳により遺構の上面のほとんどを失っており、土層等からは明確にすることはできなかった。しかし、床面の切り合いにより、これが、第10号住居址により切られていることにより、重複関係を把握することができた。しかし、柱穴もなく、粘土は、西壁にみられた唯一のものであったことなどから依然疑問が残された。また、出土遺物は土師器の細片がわずかしのみいだされなかった。

形状……方形とみられるが、東側の部分は10号住居址の構築により失われていた。

規模……2.20+2（東西）メートル×3.35（南北）メートル（+2）は計測値よりも更に復原により大きくなることを示す。

主軸方向……N-25°-W

柱穴 確認されなかった。

カマド……焼土が北壁の第10号住居址と接するあたりに認められた。

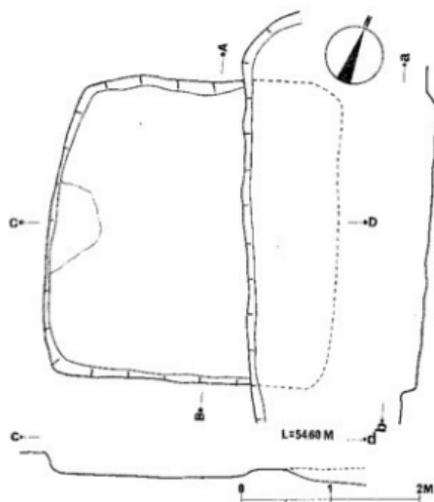
壁高……西壁……22センチメートル

南"……10 "

北"……5 "

出土遺物

北西コーナー付近で、僅かに土師器甕形土器片が出土した。



第25図 第9号住居址実測図

(10) 第10号住居址

住居址確認段階で遺構面が予想外に浅かった為に床面の一部が機械によって破壊されてしまい、担当者としての責任を痛感した住居址であった。

本住居址は、第1号住居址の北東方約33メートルのところに位置していた。西側に、第9号住居址を切り、東側は、第11号住居址により切られていた。遺跡の中の住居址では最大のものであった。攪乱されていた為もあるが、調査中には、さほどその大きさを感じてはなかったが、第1号住居址よりは、1回り大きかった。第1号住居址下層のものと非常に近似しており、時期的なものか、あるいは、その他の理由によるものかどうか考えさせられた住居址であった。

出土遺物は、北壁のカマド付近と、南壁付近より出土した。

形状……方形を示していたが、北東コーナーは、第11号住居址と重複していた。

規模……5.98（東西）メートル×6.51（南北）メートルであり、本遺跡中最大の住居址であった。

主軸方向……N-26°-W

床……カマド周辺が貼り床になっており、非常に堅くしまっていた。（北側2.1メートル程の部分）。その他は、攪乱と重複により、ほとんど明らかにすることはできなかった。

壁高……東壁……8センチメートル

西〃……25 〃

南〃……22 〃

北〃……26 〃

であり、北壁と南壁の保存状態が比較的良好であった。

柱穴……P1 P2 P3 P4 P5 P6

長径 66 71 46 45 24 37

短径 56 52 37 38 16 30

深さ 32 70 71 63 14 23

であり、カマドの両側にあるピットは、小さなものであった。

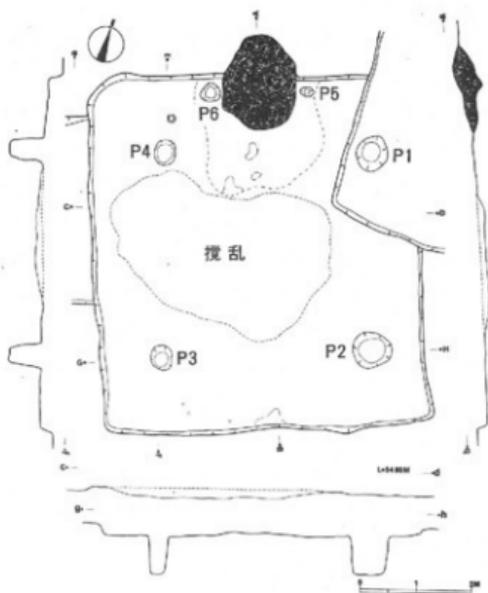
カマド……北壁のほぼ中央に位置していた。奥行き1.74メートル、巾1.34メートルの部分にカマドを構築した粘土が確認された。本遺跡中では、このような形で粘土が残っていたのは、第1号第6号、第8号、第16号住居等であった。

遺物の出土状態

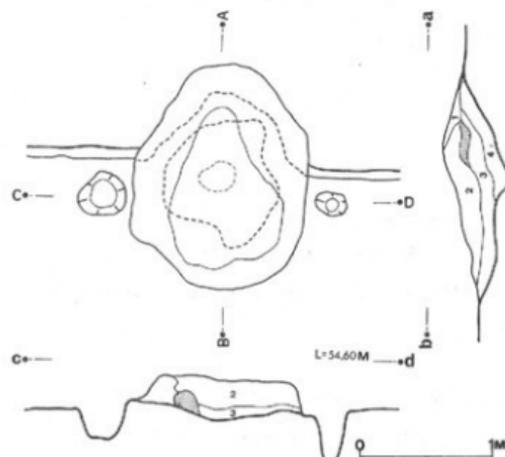
カマドの西側の部分より、須恵器環形土器が底部を下面にして出土した。底部に「大」と読めそうな刻み書きがみられた。カマドの内部よりは、甕形土器片、瓦片が出土し、二次焼成をうけていた。南壁付近より、須恵器の蓋形土器、環形土器が出土した。南壁中央付近には、白色粘土がみられ、そ

のやや西側、床面よりやや浮いた状態で出土したものであった。

以上のように、第10号住居址は、本遺跡中最大のものであり、第1号住居址下層にみられるようなカマドの両側にピットをもつ数少ない住居址であった。第1号住居址下層のように、周辺にピットはみられず、出入口と考えられた、西壁には、膨らみはみられずに南壁に白色粘土がみられた点は注意したい。



第26図 第10号住居址実測図



第27図 第10号住居址カマド実測図

10号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子、粘土粒子を含み、土の締りは良い。
2. 暗褐色土層 粘土ブロック、炭化物、炭化粒子を含み、粘性がある。
3. 赤褐色土層 焼土ブロックを含み、粘性がある。
4. 黄褐色土層 ローム土層、粘性があり、固く締っている。

(11) 第11号住居址

本住居址は、トレンチャーにより、甚しい攪乱をうけていた。図示はしなかったが、カマドもほぼ全壊状態にあった。南西方は、第10号住居址と重複していた。確認された住居址の最も東側に位置していた。

形状……ほぼ正方形であった。

規模……4.13（東西）メートル×4.10（南北）メートルであった。

壁高……北壁のみがかろうじて残っており、約9センチメートル程であった。

主軸方向……N-4°-W

柱穴……西南方の柱穴は、トレンチャーの攪乱により、明らかにすることはできなかった。

P1 P2 P3

長径 33 48 40

短径 30 42 30

深さ 20 35 19

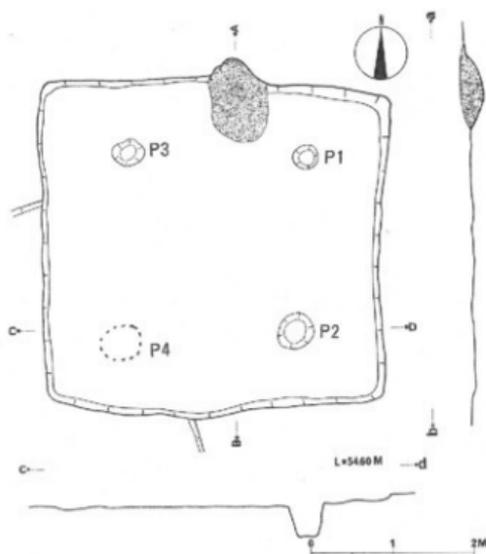
カマド……カマドもトレンチャーにより破壊されていたが、規模はようやく確認できた。

0.75（東西）メートル×1.02メートル（南北）であった。

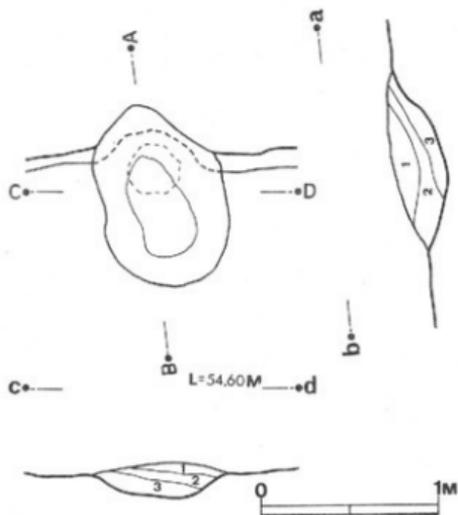
遺物の出土状態

カマドの東南方約30センチメートルのところに須恵器蓋形土器が出土した。これも、トレンチャーに半分破壊されていた。

以上のように、本住居址は、本遺跡中最も保存状態が悪かった。出土遺物も、明確に伴うものは須恵器蓋形土器のみであった。



第 28 図 第 11 号住居址実測図



11号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 粘土粒子, 赤色粒子, 炭化粒子を含み, 粘性はなく, 土の締りは良い。
2. 暗褐色土層 粘土ブロック, 焼土ブロックの混入が見られ, 粘性があり, 土の締りも良い。
3. 暗褐色土層

第 29 図 第 11 号住居址カマド実測図

(12) 第12号住居址

本住居址は、山林内に於て発見された住居址の中で最も北側に位置していた。南東方約2.5メートルのところには第6号住居址、南西方約3メートルには第3号住居址がそれぞれ確認されていた。住居址は、小型のもので、他には第11号、第14号(B)、第16号住居址が比較的似ていた。南北軸は東西軸の長さにとかなり短かった。住居址の西側のところには、ピットが2カ所あったが、明らかな柱穴は、確認できなかった。

出土遺物は、土師器、須恵器などで、土製品、石製品は出土しなかった。

形状……方形であったが、東西軸が南北軸の長さより長かった。

規模……3.85(東西)メートル×3.20(南北)メートルであった。

主軸方向……N-8°-W

壁……壁の保存状態は良好であった。立ち上がりはゆるやかであった。

壁高……東壁……18センチメートル

西〃……11 〃

南〃……15 〃

北〃……3.1 〃

であり、北壁は最も高かった。

床面……貼り床がカマドの周囲より南側へ帯状に連なっていた。その他は、やや凹凸を示すもの安定した状態であった。

柱穴……柱穴は、確認できなかったが、西側のところに大きなピットが2カ所、住居址の外側に2カ所づつ確認された。

P1 P2 P3 P4

長径 91 75 58 56

短径 85 56 52 47

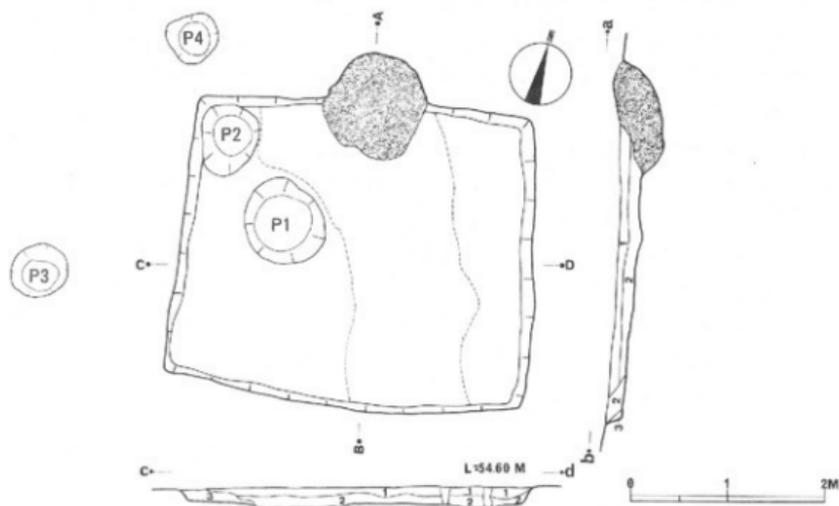
深さ 39 58 66 21

カマド……構築の際に使用された粘土と灰の範囲は、不整形の形で残されていた。保存状態は良かった。東西1.06メートル、南北1.10メートルの大きさであった。カマドを掘り進めると変形土器片と環形土器(底部は丸味をもっている)が、カマドの東側の煙道に近い部分より出土した。また、カマドのすぐ下方には、不整形のピットが確認された。

遺物の出土状態

小片ながら土器片は、多く出土した。中でも、住居址の中央よりやや西側より出土した皿形土器(灰袖)は、本遺跡の中で唯一のものであった。カマド内より出土したロクロ使用の環形土器は、数少ない完形品であった。カマド内にあった土器類は、そのほとんどが二次焼成をうけていた。

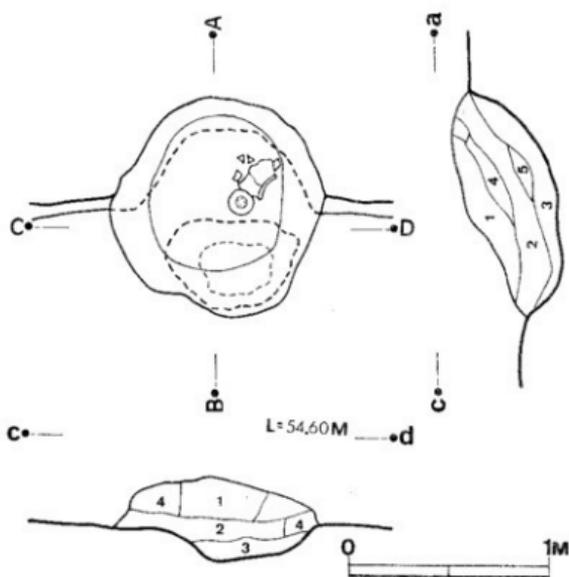
土器類は、本遺跡中、最も新しい段階のものではないだろうかと推定された。



第30図 第12号住居址実測図

12号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 ローム小ブロックが混入されている。
2. 暗褐色土層 ローム粒子、炭化粒子を含み、粘性がなく、土の締りは良い。
3. 暗褐色土層 ロームブロック、赤色スコリアを含み、炭化物の混入が見られる。  
粘性はない。



第31図 第12号住居址カマド実測図

### 12号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子, ローム粒子を含み, 粘性はないが, 土の締りは良い。
2. 暗褐色土層 赤色スコリア, 炭化粒子を含む。煙道に当る部分であり, 粘性はなく, 土の締りもない。
3. 明褐色土層 ローム土, 赤色粒子, 黄色粒子, 褐色粒子を含み, 粘性はなく, 土の締りは良い。
4. 暗褐色土層 粘土層。炭化物の混入が見られる。粘性はないが, 土は固く締っている。
5. 暗褐色土層 赤色粒子, 炭化粒子を含み, 粘性はなく, 土の締りは良い。

### (13) 第13号住居址

本住居址は, J 列トレンチの調査により, その一部が確認されたのを機に調査が行われた。J 形の5, 6グリッドに於て焼土の一部が, いも穴の中に混入しており, それを掘り進めた際に, その範囲を確認したものであった。

北方約8.5メートルのところ, 第14号住居址, 南方約33メートルのところ, 第12号住居址が位置していた。

既に, 北東コーナー付近は, 攪乱により失なわれており, ここより, 焼土, 粘土塊, 土器片等が

出土したが、ここ付近にあったカマドは既に失われていた。カマドは、北壁のやや東寄りに構築されていたようであった。ローム土内への掘り方が浅く、壁面は顕著な立ち上がりが見られない。

不規則な、ピットが3個所程確認された。

形状……方形を示していたが、北東コーナー付近は攪乱されていた。

規模……4.71(東西)メートル×5.24(南北)メートル

主軸方向……N-30°-W

壁高……黒色土の堆積が厚かったために、ローム面からの掘り込み方は、わずかしら確認できなかった。

壁高……東壁…12センチメートル

西…23 "

南…26 "

北…24 "

であり、東壁の部分がローム面の掘り込みが最も浅かった。また、床面は、一部に「引っかけキズ」のようなものがみられた他は、ほぼ平坦であった。

柱穴……不規則なピットであった。  
(cm)  
南壁に接しても1個確認された。

	P1	P2	P3	P4
長径	30	54	38	16
短径	26	50	31	15
深さ	52	88	54	39

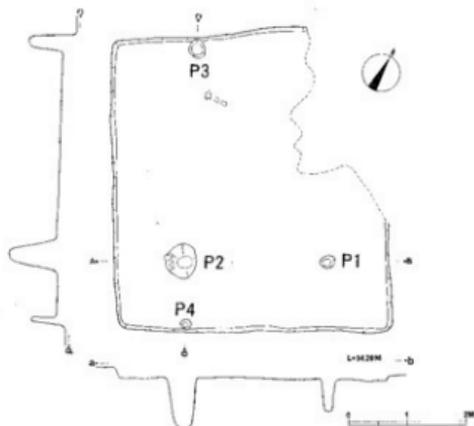
カマド……既に攪乱されており確認できなかったが、北壁の最寄りに存在していた可能性が強かった。

遺物の出土状態

東壁北方の攪乱部に、土器片の出土をみたが、それらは、ほとんどカマドの粘土・灰・焼土がついているものが多く、カマド内にあった可能性が強かった。また、北壁の北西寄りで土器片が発見されたが、中には、内黒土器で底部に墨書の一部がろうじて認められるものもあった。

#### (14) 第14号住居址(A, B)

本住居址は、確認された住居址の中で最も北方に位置していた。住居址の表記は、(A)と(B)にした



第32図 第13号住居址実測図

が、これは調査の都合上の名称であった。勿論、(A)と(B)とは時期の異なった別の住居址であり、(B)もその規模が縮小されているので2軒あるということになる。

第14号住居址(A)は、南方約8.2メートルのところ、第13号住居址、その南方約39メートルのところ、第12号住居址が位置していた。付近は、雑木林であったが、なおも住居址の存在を予想していたが、これは調査されずに終わり、今もって遺憾の念をぬぐい去らずにいる。この住居址は、北東部を(B)により切られており、その他の部分約3分の1程しか残存していなかった。この付近も、台地のほぼ中央にあたり、黒色土が非常に厚く(約90cm)堆積しており、ローム面への掘り込みは浅く、名壁面もわずかな立ち上がりしか確認できなかった。遺物も、ごく少数発見されたにとどまったが、文字瓦が出土した事は重要であった。

形状……ほぼ方形を示していた。

規模……4.31(東西)メートル×4.48(南北)メートルであり、南北軸の長いものであった。

主軸方向……N-30°-W

柱穴……確認できなかった。これは、第12号、第16号住居址と同様であった。

壁……ローム上にわずかしかり掘り込みが確認されなかった。したがって壁の立ち上がりは低かった。

壁高……東壁……8センチメートル

西……19 "

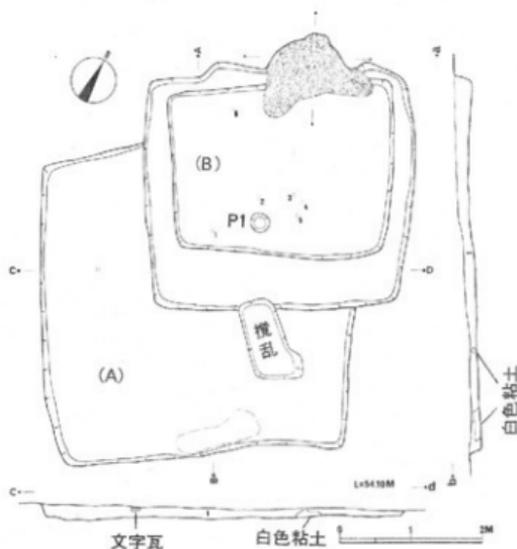
南……20 "

北……16 "

粘土……南壁のほぼ中央に白色粘土が認められた。これは、床面に貼っている状態になっており、上面は平坦であった。大きさは、東西1.13メートル、南北(巾)約26センチメートル程の大きさであった。

遺物の出土状態

土師器片が僅かに、南東コーナー付近で出土した。いずれも、壺形土器片であって、復原できるものはな



第33図 第14号住居址(A)、(B) ○印は瓦片

#### 14号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子、炭化粒子を含み、粘性は弱く、土の締りも良くない。

かった。

文字瓦は、C-Dのセクションベルト中に発見された、外面を上面向けており、発見当初は文字瓦とは思ひもよらなかった。まとめて出土したがいくつかの破片になっており、糸切り痕がある事が確認された。「鳥取文型」とへら書きされた文字瓦は、赤褐色を呈し、二次焼成をうけておりカマドの粘土とも観察できるものが付着していた。

第14号住居址(B)は、外側にある住居址の大きさは、3.52(東西)メートル×3.26(南北)メートルであった。南壁付近に、(A)でみられたような白色粘土塊が存在した。北壁は、北側へ向って更に出張っていた。他に出土遺物は僅かの土器片のみであった。

(B)の内側の住居址は、南北軸より東西軸が長く、第12号住居址と近似していた。外側の住居址との境界はかろうじて判断できる程度のものであった。

形状……西壁より東壁がやや長い、ほぼ方形を示していた。

規模……3.01(東西)メートル×2.54(南北)メートル

主軸方向……N-31°-W

壁高……わずかに、約1~2センチメートル程の立ち上がりがみられた。

柱穴……南壁にピットが1個所確認された

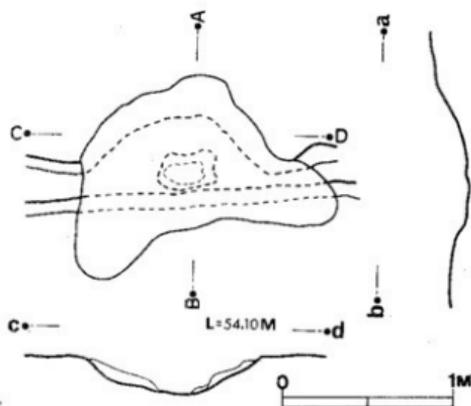
(cm)	長径	P1 28
	短径	26
	深さ	54

これは、8号住居址で認められたものと同様のあり方を示していた。

カマド……雑木林との境界により、根が入り込んでおり、保存状態は良くなかった。カマドの一部には、粘土がかなり焼けた状態が確認された。煙道には、第1号、第16号住居址でみられた様な壺形土器を倒置して使用していた。カマドの粘土の広がり方は、7号住居址に近似していた。土器片は、僅かに出土したのみであった。

瓦片が、南壁にあるピット付近で出土した。

(A)にみられたような二次焼成は受けてはいなかったが、かなり細くくだけた状態であった。床面よりやや浮いた状態であり、捨てられた可能性も考えられた。



第34図 第14号住居址(B)カマド実測図

(15) 第15号住居址

本住居址は、調査期間の終わり頃になって確認された。住居址の存在した、1712番地と1719番地の境界のところには、調査中に地膨れ状の盛り上がりが確認された。これが、遺構であるかどうか確める為の調査を行ったところ発見されたものであった。当初予定されていた調査期間はとくに過ぎており、延長された期間も迫ってきていた。一部に住居址を調査せずに切り上げる話も出ていたが、一つ一つの住居址のもつ重要性を説明し調査は行われた。

地膨れ状のものは、土を寄せただけのものであり、近年のものだと判断された。遺構面に至るまでには、若干の土器片が出土した。遺構面の印象は、本遺跡の住居址の中で比較的大型のものではないかと思われた。掘り込みを始めて土器片等が出土し始めたが、ほとんどが壘形土器のものであり、住居址の北西側の部分に散在していた。須恵器環形土器が出土した。紡錘車(石製)も出土した。これは本住居址土層の第2層と第5層との境あたりより発見され、床面よりやや浮いた状態で発見された。

東壁の北側の部分(P1の東側)には、管状土甕が出土した。南壁のほぼ中程のところには、他(第4号、7号、10号、13号、14号、16号など)にみられたように、白色粘土が不整形ながら、巾約56センチメートル、長さ約1.46メートルにわたってみられた。この部分は、それが強く踏み固められている点などから出入口部にあたっているものと考えられた。

カマドは、特異な形を呈していた。それは東袖の部分が部厚く、特異に発達した形をしていた。東袖は、北壁より、約1.6メートル最大巾約98センチメートル、頑強に構築されていた。この東袖上部より、漆紙文書を入れた土師器環形土器が出土した。また、内部下面も、床面より一段高く作られており、熱をうけ、赤変していた。

柱穴は、4個程確認されたが、P1には、第4号、第16号住居址でみられたカマドに使用された切石を柱穴に使用しており、捕獲の意味をもつものであろうと考えられた。

形状……方形を示すが、東西軸より南北軸の長さが長いものであった。

規模……4.81(東西)メートル×5.24(南北)メートル

主軸方向……N-27°-W

柱穴	P1	P2	P3	P4	P5
(cm)					
長径	72	71	70	74	124
短径	59	58	52	56	91
深さ	63	48	47	72	23

P3は、柱穴の中程のところが段状になっていた。P1、P4は柱穴が深く、逆にP2、P3は浅かった。

壁高……急な立ち上がりをみせていた。

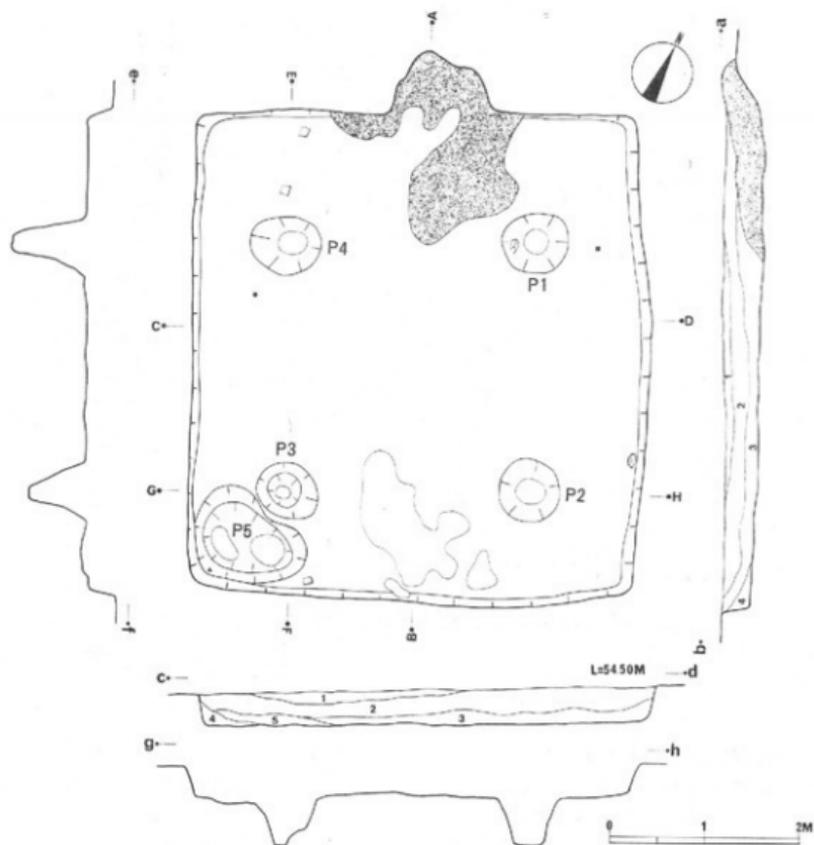
東壁……	34センチメートル
西〃……	28 〃
南〃……	26 〃
北〃……	38 〃

カマド……保存状態が良好であった。東袖が著しく発達した特異な形をしており、煙道もよく残っていた。焚口部の広さは、約43センチメートル程であった。北壁からの奥行きは、約60センチメートルを計った。西袖は、ほとんど張り出しはしなかったが、巾約63センチメートル、長さ約28センチメートルであった。カマドのほぼ中央は凸型になっていた。

#### 遺物出土状態

何といても、本住居址を特徴づけたのは、カマドの東袖上に於て、ややずれ落ちた様な恰好になって発見された。漆紙文書を入れた土師器高台付環形土器であった。発見されたポイントより約20センチメートル程西北によったところでは、やはり、土師器高台付環形土器が発見された。底部には糸切り痕を有するものであった。いずれも、内面は、黒色処理が施されており、光沢をもっている様子が伺えた。

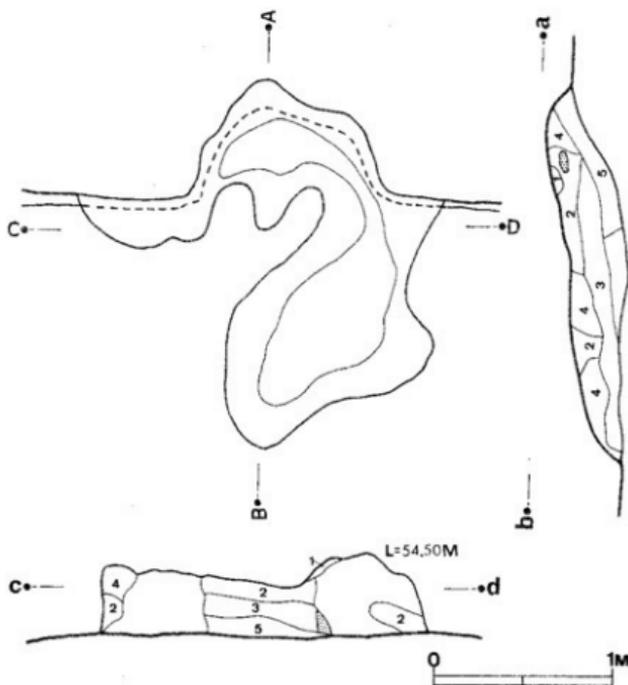
漆紙文書は、環形土器の内部に、貼りついた様な状態になっており、出土した段階で、もしやと思いつつ、慎重に取り上げた。環形土器の底面には、墨書があったが、出土した段階では不明であった。その後、「土垣倉」と墨書されている事が明らかとなった。その他、鉄製品片が、P5の上面より出土した。北壁の北側へ約1.1メートル程のところでは、鉄が出土したが、それが、本住居址とどのようなつながりがあるのかは明らかにはできなかった。



第 35 図 第 15 号住居址実測図

15号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子，ローム粒子，炭化粒子を含み，粘性はややある。
2. 暗褐色土層 赤色粒子，白色粒子，黄色粒子を含み，ローム粒子が見られ，粘性もあり，土は比較的締っている。
3. 暗褐色土層 赤色粒子，ローム粒子が見られ，土の締りは強い。
4. 暗褐色土層 赤色粒子，白色粒子を含み，粘性はあまもなく，土の締りはあまり良くない。
5. 暗褐色土層 赤色粒子，ローム粒子を含み，土の締りがよく粘性もある。



第36図 第15号住居址カマド実測図

15号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子，粘土粒子を含み，粘性はややある。土の締りは，非常に良い。
2. 暗褐色土層 粘土粒子，炭化粒子を含み，粘性はややある。
3. 暗褐色土層 赤色粒子，白色粒子を含み，粘性はあまりない。土の締りも弱い。
4. 暗褐色土層 粘土粒子を多く含み，赤色粒子は少量であるが見られる。粘性はあまりなく，土の締りも良くない。
5. 暗褐色土層 塊土ブロック，炭化材が少量含まれている。本層は，カマド煙道部に当り，粘性はなく土の締りもない。

(16) 第16号住居址

本住居址は，第15号住居址とともに，最も南端に位置していた。第1号住居址の西側約12メートル，第2号住居址の南側約7メートル程のところであった。住居址の東壁は，第17号住居址の床面を切り込んで作られていた。ほぼ方形を示しており，南壁の西側のところに，半月形の張り出しが認められた。北壁は，カマドを中心として，東側の部分と西側の部分とがずれていた。土層は，

3層のカマド付近の状態がやや不自然に厚い堆積を示していたが、それ以外は、自然堆積を示していた。カマドは、切石を使用しており、煙道には、甕形土器が転用されていた。

出土遺物は、比較的多かった。カマドの前面より、土師器甕形土器がふせた状態で出土した。口縁部付近は、ほぼ完全に残っていたが胴部の一部と底部は失なわれていた。砥石も住居址の中央やや南側より出土し、鉄製品（鉄線）も東壁にほぼ接するように出土した。これらの豊富な出土品とともに、炭化材もカマド付近より発見された点は、火災住居址として扱えた方が土層の状態などからも自然ではないかと考えられた。

形状……方形であったが、カマドを中心として北壁の東壁と西壁とでは、ずれた状態が観察された。

規模……3.40（東西）メートル×3.41（南北＝東壁）メートルであり、カマドの西側の北壁は、約20センチメートル程小さかった。

主軸方向……N-17°-W

柱穴……確認されなかった。柱穴が、ローム面に於て検出できなかった住居址は、第4号、第14（A）、第12号住居址などであった。

壁……壁面は、このあたりの黒色土層の堆積が比較的浅かったために、ローム土への掘り込み状態が良好で検出できた。立ち上がりは急なものであった。北壁は、カマドを中心に東側と西側では、ずれており、東側のものが、より大きくつくられていた。南壁と西壁（コーナー付近）では、南方へ向って、半月形の張り出しが検出された。このような張り出しは、第5号、第17号などでみられたものとやや方向や大きさなどに違いがみられた。

床面は、ほぼ平坦であった。

壁高……東壁……	48	センチメートル
西壁……	47	”
南壁……	47	”
北壁……	48	”

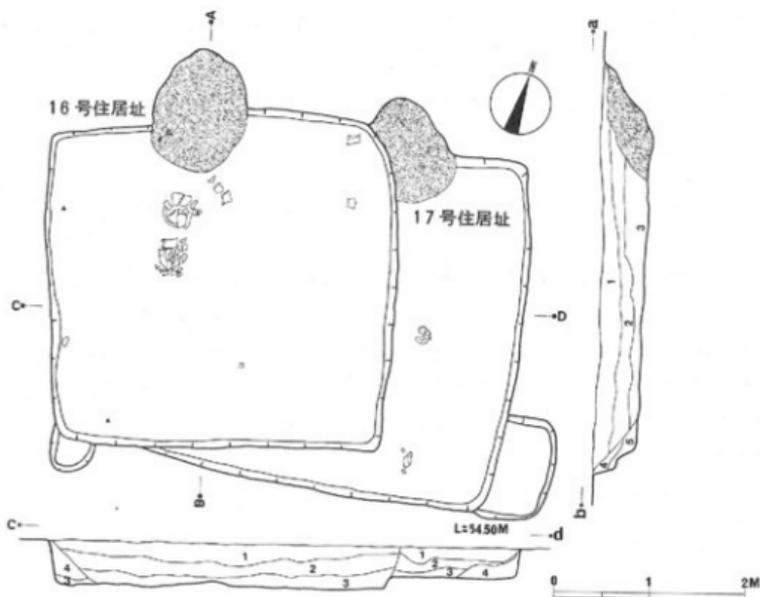
ほぼ同じ位の立ち上がりを示していた。

カマド……保存状態は良好であった。焚口部には切石を使用しており、この2つの切石は発見された時、すでに割れた様な形になっており、さすが黒く付着した内面を上方に向けていた。カマドの内部には、小型の甕形土器が、カマド内での「焼けひずみ」が認められる様な形で横倒しになって出土した。その他、土器片もわずかに出土したが、すべて熱作用によるものとみられる赤変した跡が残っていた。煙道には、甕形土器を倒置して使用していた。本遺跡に於て、このような例は、第1号住居址、第14号（B）住居址、などにみられ、第12号住居址も煙道に甕形土器片を使用したものとみられている。

### 遺物の出土状態

カマド内の出土状態はカマドの項で触れ、その他の出土状態も先に述べたが、これらの出土状態は、火災住居址という特殊な状態であった為に、ほぼ床面上の出土であり、本遺跡中数少ない住居址と出土遺物が結びつくものであった。須恵器の麁形土器片なども出土した。

また、鉄鍔と砥石の出土も、それらの関係を考える上で注意したい。



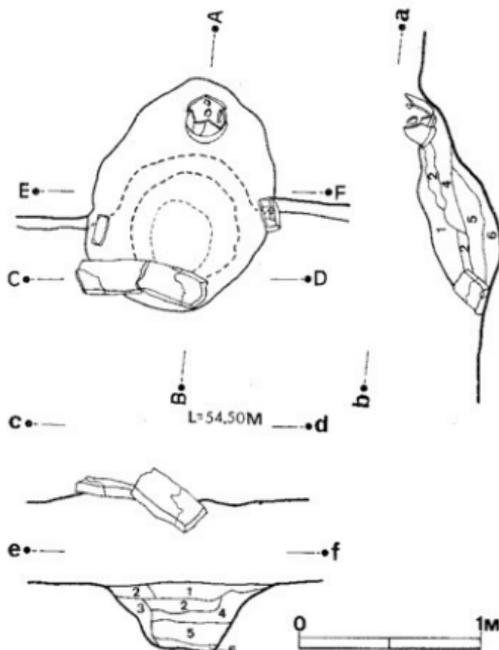
第37図 第16号、第17号住居址実測図

#### 16号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子、白色粒子を含み、粘性がややある。
2. 暗褐色土層 赤色粒子、白色粒子、黄色粒子を含み、炭化物が部分的に見られる。粘性がややあり、土は比較的締っている。
3. 暗褐色土層 ローム粒子及び3~4cmのロームブロックが所々に見られる。粘性がややあり土は比較的しまっている。又本土層の北側には、3~4cmの炭化物が非常に多く見られる。
4. 暗褐色土層 赤色粒子、白色粒子を含み、粘性はあまりなく、土の締りもあまり良くない。
5. 暗褐色土層 多くのローム粒子、スコリアを含み、土の締りが良く、粘性もある。

### 17号住居址土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子, ローム粒子, 炭化物を含み, 上の締りはあまり良くなく, 粘性がややある。
2. 暗褐色土層 ロームブロックの混入が見られ, 土の締りはやや強い。
3. 暗褐色土層 赤色粒子, ローム粒子が見られ, 土の締りは強い。
4. 黒色土層 白色粒子, ローム粒子が見られ, 粘性はややある。



第38図 第16号住居址カマド実測図

### 16号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 白色粒子, スコリア, 粘土粒子を含み, 粘性はあまりない。
2. 暗褐色土層 赤色粒子, 粘土粒子を含み, 粘性は強く, 土の締りも良い。
3. 赤褐色土層 赤色粒子, 焼土ブロックを含み, 粘性, 土の締り共にあまりない。
4. 暗褐色土層 赤色粒子, 粘土粒子を含み, 所々に焼土ブロックが見られる。2層より粘性が強い。
5. 暗褐色土層 赤色粒子, 白色粒子, 粘土粒子, 焼土ブロックを含み, 所々に炭化材の含入が見られる。粘性は強く, 土の締りも良い。
6. 暗褐色土層 本層はカマドの煙道部に当り焼土化した赤色粒子, 焼土ブロックの含入が多く見られ, 下部には, ローム粒子が多く見られる。上の締りは良くない。

(17) 第17号住居址

本住居址は、第16号住居址に西側が破壊されており、全体の約2分の1程しか残っていなかった。しかし、残存した部分については、比較的保存状態が良好であり、おおよそその全体像を把握できるものであった。東壁の南側には、方形の張り出しが認められた。

16号住居址よりも、床面は浅くつくられており、その境界付近は段差を示していた。

形状……ほぼ方形を示すものと想定できた。

規模……3.70（東西）メートル×3.70（南北）メートル（東西メートルは推定）

主軸方向……N-13°-W

壁……壁面はよく保存されていた。東壁はわずかに外側に膨れる様な形になっており、その南側は、方形の張り出し状になっていた。住居址の床面より約5センチメートル程高くテラス状になっていた。

カマド……カマドは、西側約3分の1程は、第16号住居址により壊されていた。しかし、保存状態は比較的良好であった為に、土層等はよく把握できた。カマドは、北壁のかなり東側に作られていた様であった。カマドの東側から東壁へは僅か70センチメートル程のところであった。カマド内からの出土品はほとんどなく、僅かに須恵器坏形土器片と土師器甕形土器片などが出土しただけであった。

遺物の出土状態

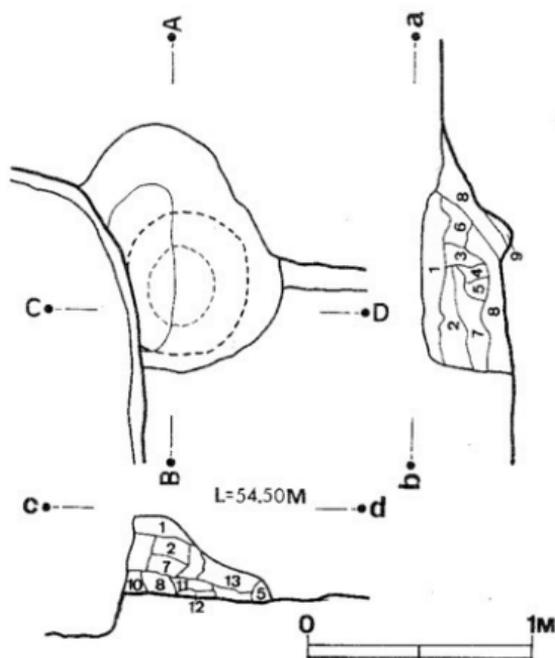
出土品は比較的少なかったが、ほぼ中央のところと、南壁のやや東側へ寄ったところで、底部にヘラ切り痕をもつ須恵器坏形土器が半分欠損した状態で出土した。それぞれ、ほぼ同じ位のレベルであり、床面より、3～4cm程上位であった。

張り出し部……東壁……約98センチメートル

南〃……約54〃

北〃……約50〃

床面は、ほぼ平坦であり、やや固く踏みしめられた様子であった。



第39図 第17号住居址カマド実測図

17号住居址カマド土層説明

1. 暗褐色土層 赤色粒子，粘土粒子を含み，粘性はあまりない。
2. 暗褐色土層 粘土を主体とする層で，所々に1層と同様な土が見られる。
3. 暗褐色土層 粘土ブロックの混入が見られ，粘性はあまりなく，土の締りは強い。
4. 暗褐色土層 3層に比べ，土の締りは少ないが，粘性はややある。
5. 暗褐色土層 粘土粒子の中に1～2cmの炭化物が所々に見られ，粘性はややある。
6. 暗褐色土層 2層と同様な層であるが，赤色粒子，白色粒子が見られる。
7. 暗褐色土層 ローム粒子の混入少なく，土は良く締っている。木層の中には，赤色粒子の含入が多く見られ，下部に行くほど，その割合は多くなる。
8. 暗褐色土層 黒色土の混入がよく見られ，粘性，土の締り共に弱い。
9. 暗褐色土層 ローム粒子の混入が多く見られ，土の締りが良く，粘性はややある。
10. 暗褐色土層 赤色粒子，1～2cmの粘土ブロックを含み，土の締りは良く，粘性もある。
11. 暗褐色土層 赤色粒子，白色粒子，炭化物を含み，土は良く締っている。
12. 暗褐色土層 11層に比べ，赤色粒子，粘土粒子の含入が多く見られる。本層下部の土の締りは弱い。
13. 暗褐色土層 所々に黒色土が見られる。粘性，土の締り共に弱い。

#### (18) 掘立柱建物址

本遺構は、第1号、4号、5号、6号、3号、2号の各住居址に「コ」の字形に取り囲む様な状態で確認された。東西3間×南北2間の広さをものものであった。P 8は、第6号住居址と、その一部がやや重複した状態で確認された。これは、本建物址が第6号住居址構築以後に建てられたものとしてとらえることができた。大きさは、約4メートル×3.2メートルであった。床面積は、12.2平方メートル程であった。(鷹巣遺跡のものは、12.9㎡であった。)P 4のやや南側では、やや赤味があった石製の紡錘車が発見された。これは、断面形が台形を示し、体部には、面とりをもつ、保存状態が良好なものであった。P 5は、最初土塚とも考えられたが、出土遺物はなく、土のしまりも弱く、異色土が堆積していたために、近世のものとして判断した。

本建物址は、大宮町鷹巣遺跡で発見された1号掘立柱建物址とよく似ており、当地方の掘立柱建物址の姿を知る上で貴重であった。

これらの建物址は、倉庫址とも考えられ、これは、第15号住居址の墨書土器と「土垣倉」と考え合わせるとき1つの材料となりうるものであろう。

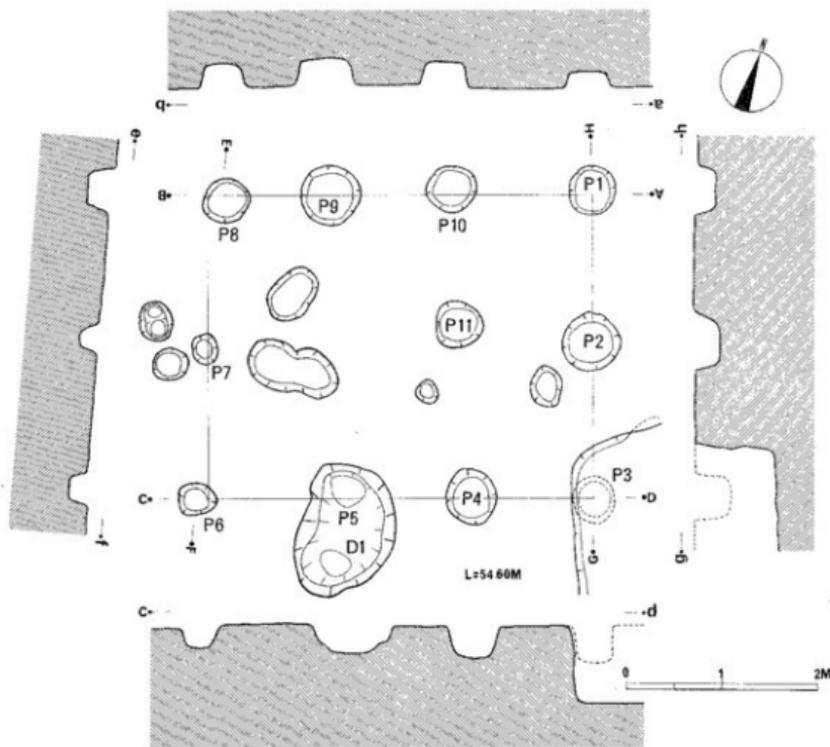
#### (19) 土壌(D1)

本土壌は、掘立柱建造物の南辺上に確認された。その一部は、P 5と重複しており、更に南側にもピットが重複していた。形状は、長楕円形になっており、南北の長軸は、1.39メートル、東西の短軸は0.99メートル・深さ26センチメートルであった。新旧関係は、本土壌が古く、両ピットが新しかった。

出土遺物は、土師器片が2～3片発見されたのみであった。

住居址の大きさについて

以上のように、17軒の住居址を調査したが、それぞれの住居址は様々な特徴があるものばかりであった。住居址の大きさは、 $10\text{m}^2$ 以下のものは少なく、 $10\text{m}^2 \sim 20\text{m}^2$ 程のものが約7割を占めており、 $20 \sim 30\text{m}^2$ のものが約2割程、 $30\text{m}^2$ 以上のものは、第10号住居址のみであった。



第40図 掘立柱建物址実測図

(……は推定)

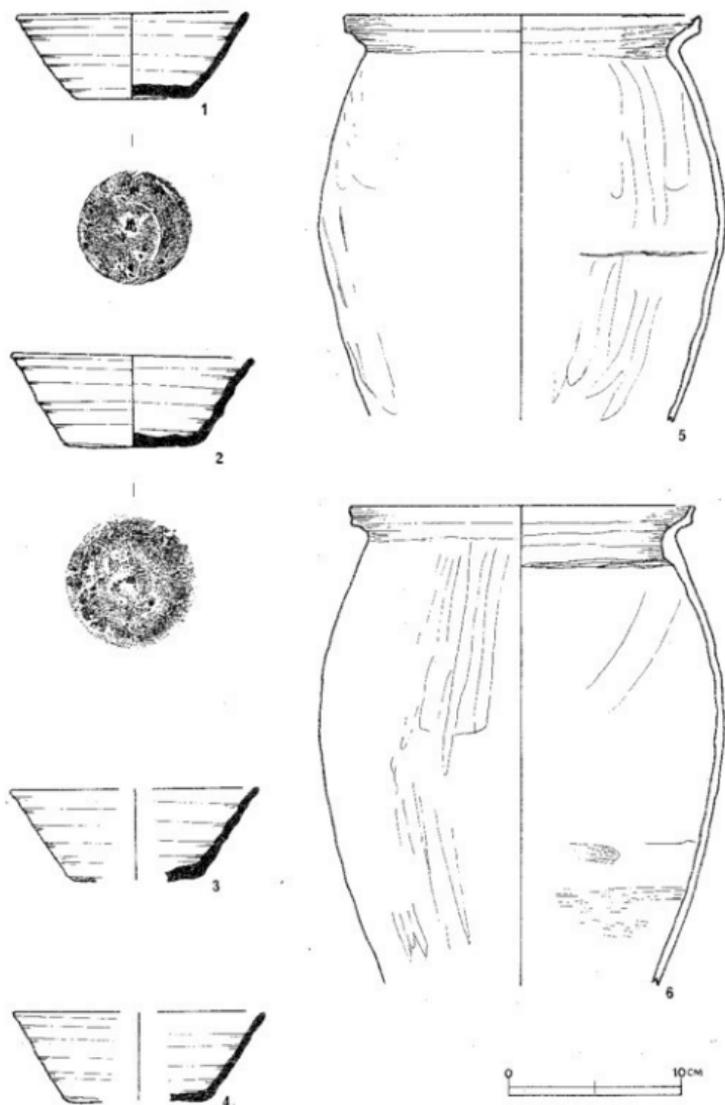
## 第5節 出土遺物

### 第1号住居址出土土器説明表

(A 口径 B 高さ C 底径 D 胴部径 ( ) は現存からの推定計測値)

— 器形については、技法等の特徴に含めている。 —

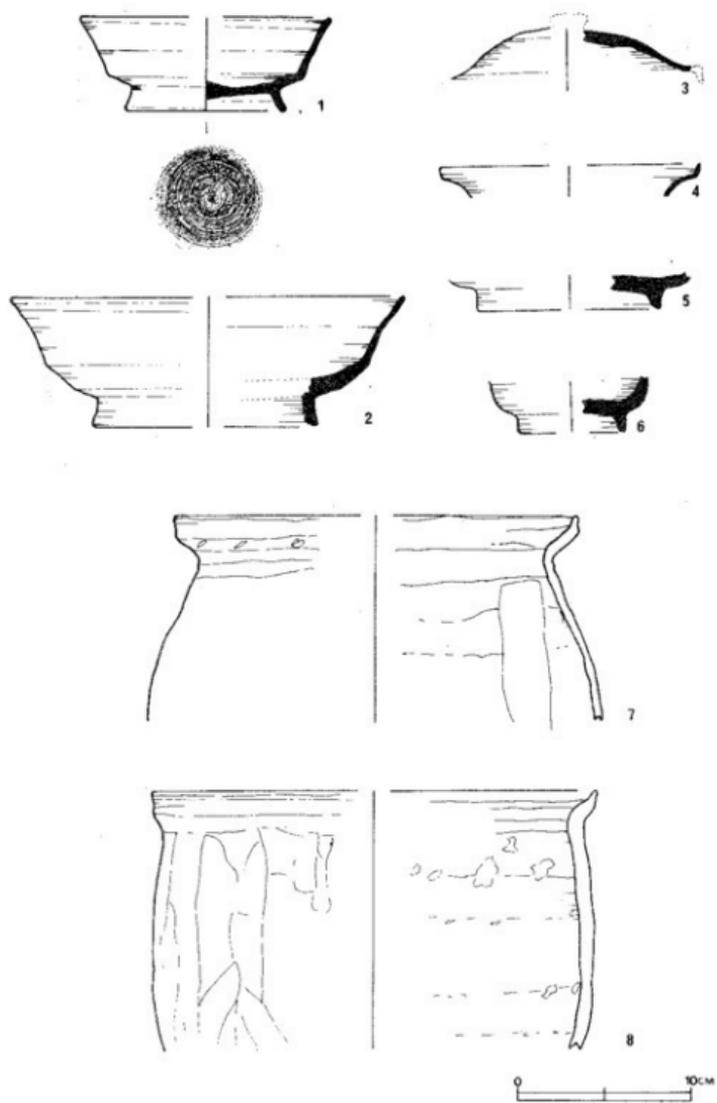
挿図 番号	器種	法 量 (cm)	(調整) 技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
41 -1	環 (S)	A 13.6 B 4.9 C 7.1	底部にヘラ切り痕をとどめ、上げ底風になっている。「へそ」のように突出した部分か中程にみられる。	平滑であり、底部から口縁部へは、やや内湾ぎみに立ち上っている。	小石まじりだがきめ細かい。	灰褐色。良好。	1号住居址上層床面上より出土。
-2	環 (S)	A 13.7 B 5.4 C 8.8	底部は、回転ヘラ切り痕をとどめ、底部と体部の境界は、やや丸まっている。	体部は、中程より外反しつつ口縁部に至る。壁厚は、底部中央より口縁部にかけて順次薄くなっている。	小石英を含みあまりよくない。	灰褐色。	同上。
-3	環 (S)	A 14.4 B 5.4 C (7.4)	底部は、大部分欠損しているが、回転ヘラ切り痕が観察できる。	2によく似ている。体部はやや外反しながら開く。底部と体部は接ぎ合わせた様にも観察できる。	小石英、小石まじり。	白灰色。良好。	1号住居址上層の覆土中。
-4	環 (S)	A 14.4 B 5.2 C (8.2)	底部は大部分欠損しているが、回転ヘラ切りである。	器厚は底部、体部ともにあまり変わらない。底部と体部の大きさを比べると比率は小さい。	小石英まじり。	暗灰色。良好。	1号住居址下層。
-5	壺 (H)	A 20.8 D 23.9	口唇部は垂直に立ち上がり、稜がみられる。この部分は横ナデ。胴部はヘラ削りののち丁寧なナデが行われている。	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデののちナデ。粘土雜質を残す。	砂、石英まじり。	淡褐色。良好。	煙道に使用。(上位)
-6	壺 (H)	A 20.0 D 23.6	口唇部横ナデ、胴部ヘラ削りのちヘラナデ。一部赤変している。	口縁部ヘラナデ、横ナデ、胴部ヘラ削り、ハケ目、粘土雜質。	砂まじり。	外黄褐色。内暗褐色。良好。	煙道に使用。(下位)



第 41 图 第 1 号住居址出土土器实测图(1)

第1号住居址出土土器説明表

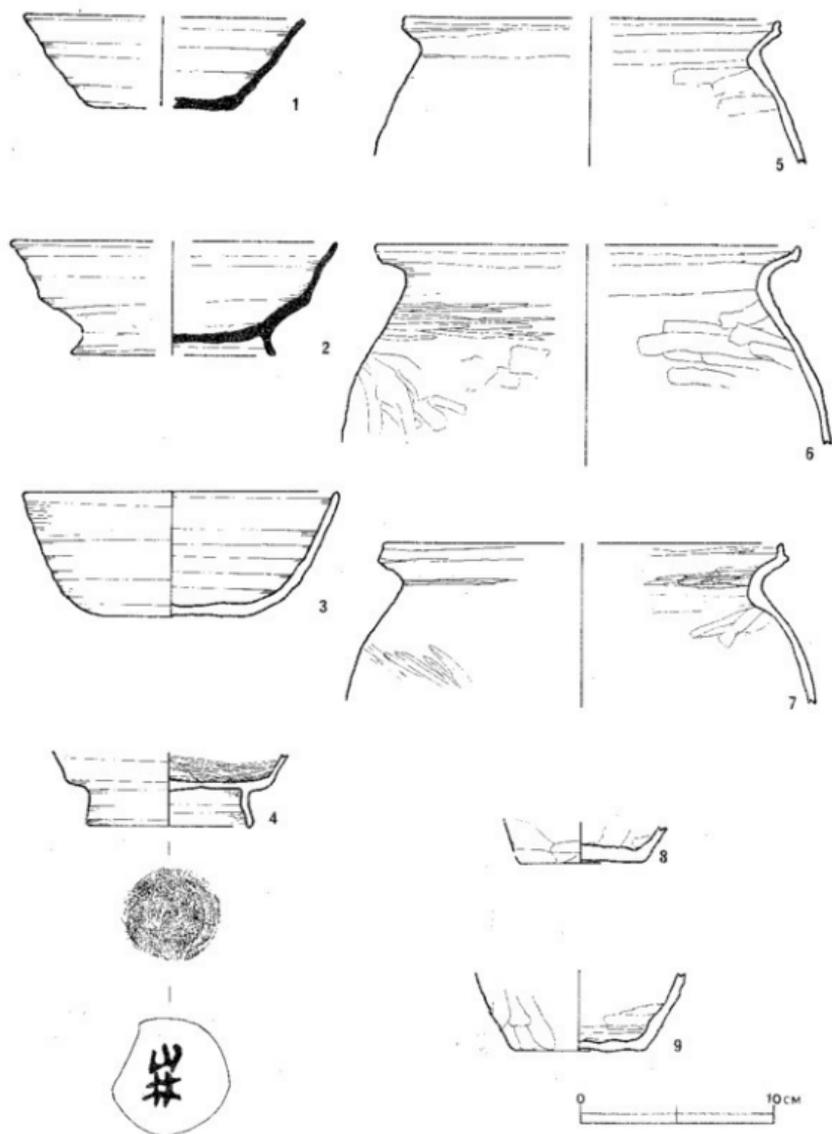
押図 番号	器種	法 量	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
42 -1	高台付 坏 (S)	A 15.6 B 5.5 C 9.4	高台部は「ハ」の字に開く。底部は回転ヘラ削り調整がなされている。	底部の器壁はやや凹凸を示す。	小石夾まじりでありあまり精選されていない。	灰白色、高台付内側は暗灰色。	1号住居址上層覆土中北東部。
-2	高台付 坏 (S)	A (23.2) B 7.6 C (13.1)	底部の切り離しは不明である。高台部がつけられた様子が観察できる。高台部はやや開く。やや異った器形を示している。	大形のものである。体部の中程までは器壁も厚く内湾ぎみであるが、そこから一度直線的になり、器壁も薄くなり外反する。	小石夾まじりできめ細かい。	暗褐色。良好。	1号住居址上層より投棄状態で出土。
-3	蓋 (S)	A (15.4) B ( 4.3)	体部の上位にはケズリがみられる。やや深めのものである。	磨滅が著しい。つまみ部と端部は欠損している。	2～3mmの小石を含む。	灰白色。やや悪い。	1号住居址下層
-4	甕 (S)	A (15.2) B ( 2.0)	口縁部の破片である。口唇部は真直ぐ立ち上がる。頸部は外反しつつ口唇部に至る。	薄手のもので、きゃしゃな感じがする。	よく精選されている。	青灰色。良好。	42-2に同じ。
-5	高台付 埴 (S)	C (11.3) B 高台部 0.8	回転ヘラ削りで調整されている。高台部はしっかりとしたつくりで外に開かない。	比較的平滑である。	同上。	灰青色。	1号住居址上層。
-6	高台付 埴 (S)	C 6.0 B 高台部 1.0	小ぶりのものでつくりがしっかりしている。	器厚は底部より体部の中程まではほぼ同じである。	やや荒い。小石は含まない。	灰青色。	42-2に同じ。
-7	甕 (H)	A (23.7) B (12.2)	口唇部は真直ぐに立ち上がり胴部上位に最大径がある。刺空あり。	口縁部横ナデ、接合痕あり、ヘラケズリ痕位がみられる。ハケ目。	砂まじり。	茶褐色 ※口縁部下にケズリ。(横)	1号住居址上層カマド。
-8	甕 (H)	A (26.0) B (15.2)	横ナデーケズリ(縦位)の順がはっきりしている。口縁部に最大径。	横ナデー横ケズリ、ハケ目、接合痕。	砂まじり。	黄褐色。良好。	同上。



第42图 第1号住居址出土土器实测图(2)

第2号住居址出土土器説明表

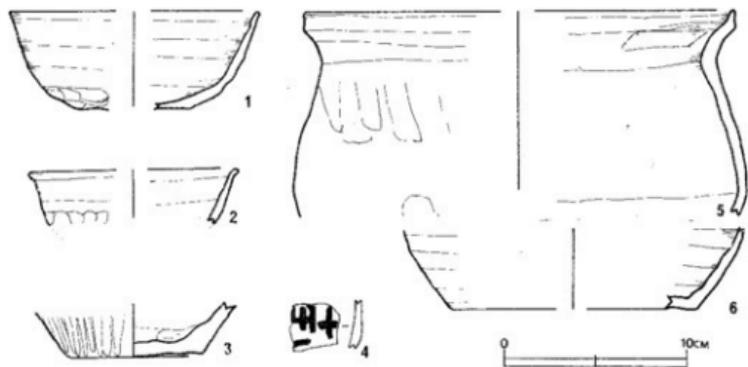
挿図 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
43 -1	坏 (S)	A 15.8 B 4.8 C (7.1)	底部は回転ヘラ切りである。底部より約50度の角度をもって立ち上る。	器厚は薄く、底・体部もほとんどかわらない。ザラザラした感じがする。	石英粒をまじえている。良好な上質である。	青灰色。良好。	2号住居址P1底面より出土。
-2	高台付 坏 (S)	A (17.0) B 6.0 C (11.9)	底部は回転ヘラ削り。高台部と体部の境は丁寧なナデにより消されている。器壁は体部下端が厚い。	底部は中心部に向けて低くなる。体部は1度反り気味になり中程より外反しつつ立ち上がる。	精選されており、小石英を含む。	青灰色。良好。	カマド粘土上の出土。
-3	埴 団	A 16.6 B 6.6 C 7.5	底部は回転ヘラ削り。ロクロ成形による。体部上位には横位のヘラ磨きがみられる。	底部より丸味をもちながら立ち上がる。内面黒色処理	小石まじりで良い。	紅茶褐色。	北東コーナー付近。接合により完形。
-4	高台付 坏 団	B (3.8) C 8.4	底部は回転ヘラ削り。高台部はやや高く作られているが力強さがない。横ナデがみられる。底部に墨書。	底部中央はやや厚みがある。しかし、厚さは全体的に薄い。黒色処理。横位ヘラミガキがみられる。	砂まじり。	茶褐色。	東城中程のセクションベルト中。墨書「山井」がある。
-5	甕 団	A (19.6) D (22.3)	口縁部は横ナデ、胴部ヘラ削り(横位)。胴部中程に最大径があるものとみられる。	口縁部は横ナデ、胴部ハケ目。	小石まじり。	暗褐色。良好。	43-3に同じ。
-6	甕 団	A (22.2) D (25.5)	口縁部は横ナデ+頸部はヘラ磨き胴部ヘラ削り。	口縁部横ナデ+ヘラ削り+ナデ+ハケ目。	小石まじり。	黄褐色。良好。	同上。
-7	甕 団	A (21.8) D (25.6)	口縁部横ナデ+横位のハケ目+ヘラ磨き、ヘラ削りがみられ胴部上位に最大径あり。	口縁部横ナデ+経部は横位ヘラ削り。	砂まじり。	黄褐色。	同上。
43 -8	甕 団	C (7.8)	底部に木葉痕あり。胴部は横位ヘラ削り。	底部はやや凹凸がある。ハケ目がみられる。	砂まじり。	黒褐色。ややあまい。	2号住居址の東北コーナー。
-9	甕 団	C (7.8)	底部は不定方向のヘラ削り。一部はもろくハクリしている。縦位のヘラ削り。	底部は薄手である。ハケ目がある。	雲母まじり。	暗褐色。	同上。



第43图 第2号住居址出土土器实测图

第3号住居址出土土器説明表

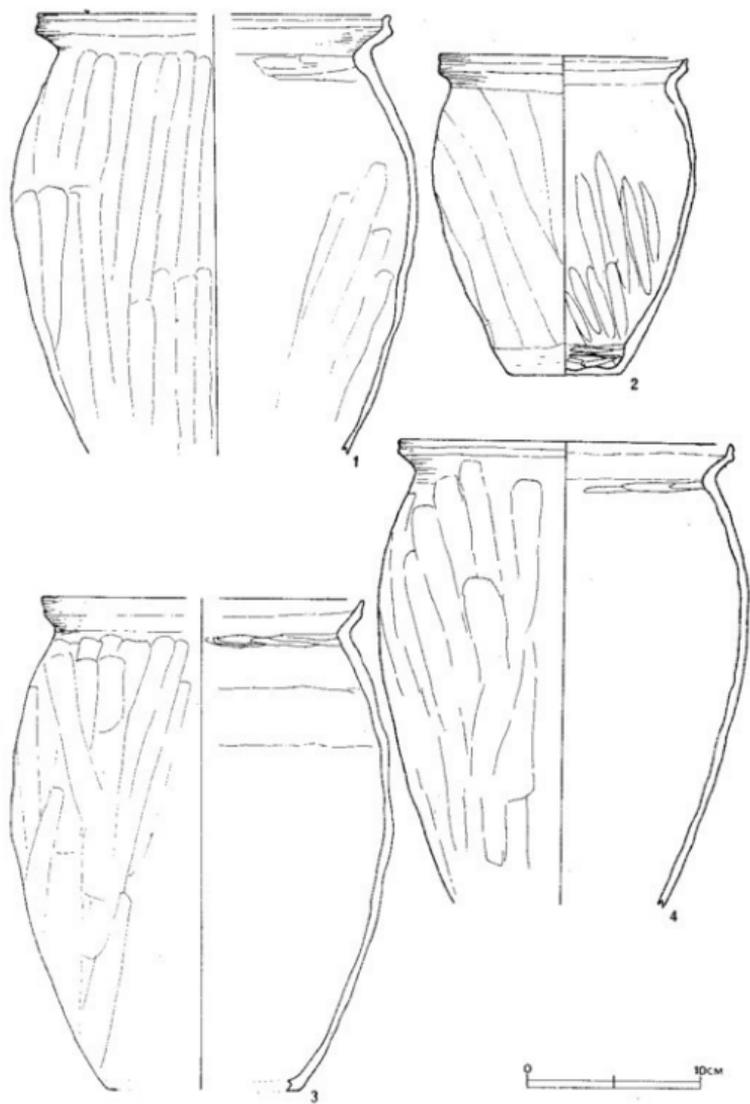
挿図 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
44 -1	埴 (H)	A (14.1) B 5.6 C (6.2)	底部と体部の境い目が比較的明確である。底部は回転ヘラ削り。体部下端に横位ヘラ削り。ロクロ使用。	黒色処理。横位のヘラ磨き。底部より口縁部に至る程器厚はうすくなる。	小石(石英)まじり。	黒褐色。	2号住の埴よりも小ぶりである。カマド内にて赤変。
-2	坏 (H)	A (11.8) B (2.6)	体部下端に横位ヘラ削り。口唇部付近は横ナデ。	黒色処理。ヘラ磨き。口唇部は外反する。	雲母、小石(石英)含む。	白っぽい茶褐色。	北東部床面上。
-3	甕 (H)	C 7.6	底部に木葉痕。縦位ヘラナデ調整(胴部)	指通痕がある。底部は凹凸がみられる。	小石まじり。	外一スス付着 → 褐色	床面上。
-4	坏 (H)		ロクロ成形。体部の破片。光沢がある。	黒色処理。ヘラミガキ。	小石まじり。	明褐色。	墨書あり
-5	甕 (H)	A (24.2) B (12.3) C (25.4)	口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。胴部上位に最大径がある。	口縁部は横ナデとハケ目。	小石、石英粒まじり。	褐色。	カマド内にてスス付着。
-6	鉢 (H)	B (13.8) C (4.8)	底部の一部は剥離しているがヘラ削り。体部はヘラ削り。	横位のナデ、粘土紐の接合痕がみられる。	小石砂まじり。	赤褐色。	カマド内。



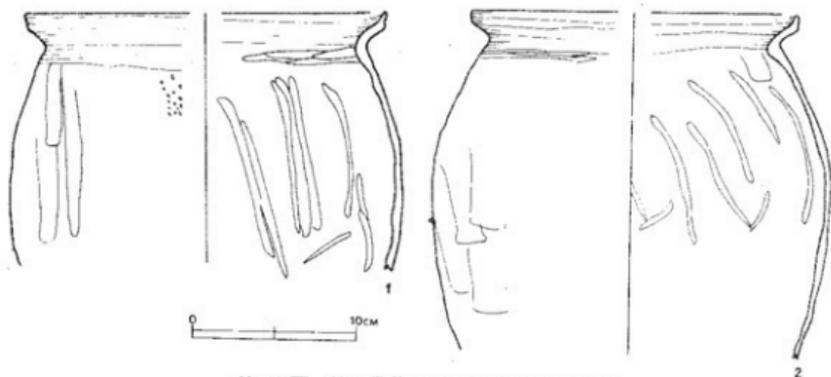
第44図 第3号住居址出土土器実測図

第4号住居址出土土器説明表

押図 番号	器種	法 量	技 法 等 の 特 徴		胎 上	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
45 -1	甕 (H)	A (20.6) B (26.0) D (23.8)	口縁部は横ナデ。1 度外向し、そこから やや内向しつつ立ち 上がる。胴部上位に 最大径。タテのヘラ 削り。	口縁部横ナデ。横位 ヘラ削り。ヘラナデ。 器壁は胴部下方が薄 手になっている。	雲母、石英 まじり。	茶褐色。	底部欠損。
-2	甕 (H)	A 14.6 B 19.6 C 6.6 D 15.4	口縁部横ナデ、やや 外向して立ち上がる。 胴部上位に最大径。 縦位ヘラ削り。胴部 は最下位に1周する 横位のヘラ削り。底 部はヘラ削り。	口縁部横ナデ。胴部 縦位のナデ。最下部 位横位のナデ。器壁 は口縁部より胴部中 程にかけてやや薄く なるが、底部に向っ て厚みをます。	小礫、雲母 含む。	暗褐色。	本遺跡中数少ない小甕 住居址南壁 中央付近の 2層より出 土。16号住 のものと同 似。
-3	甕 (H)	A (19.8) B 29.0 C (11.4) D (21.4)	口縁部横ナデ。胴部 タテのヘラ削り。胴 部中程やや下方に最 大径。	口縁部横ナデ。頸部 ヘラ削り。胴部粘土 紐の接合痕。	小石、砂ま じり。	茶褐色。	底部欠損。
-4	甕 (H)	A 19.4 B (26.2) D (22.6)	口縁部横ナデ。口唇 部は真直に立ち上が る。胴部は縦位ヘラ 削り。胴部上位最大 径。	口縁部は横ナデ。頸 部は横位ヘラ削り。 胴部はヘラ削りとハ ケ目がみられる。	雲母、小石 粒(石英) を含む。	明褐色。	底部欠損。
46 -1	甕 (H)	A (22.4) B (16.0) D (24.2)	口縁部は横ナデ。胴 部上位に最大径。胴 部は縦位のヘラ削り。 小さな刺突が胴部上 位にみられる。	口唇部は外反しつつ 立ち上がる。頸部は 横位ヘラ削り。胴部 は縦位のナデがみら れる。	砂まじり、 雲母を含む。	茶褐色。	底部欠損。
-2	甕 (H)	A (20.2) B (20.9) D (25.6)	口縁部は横ナデ、頸 部に横位のヘラ削り が入る。胴部は縦位 のヘラ削りがみられ る。	口唇部はやや外向し て立ち上がる。口縁 部横ナデ、頸部ヘラ 削り。胴部は縦位ナ デ。	石英、雲母 含む。	明褐色。	底部欠損。



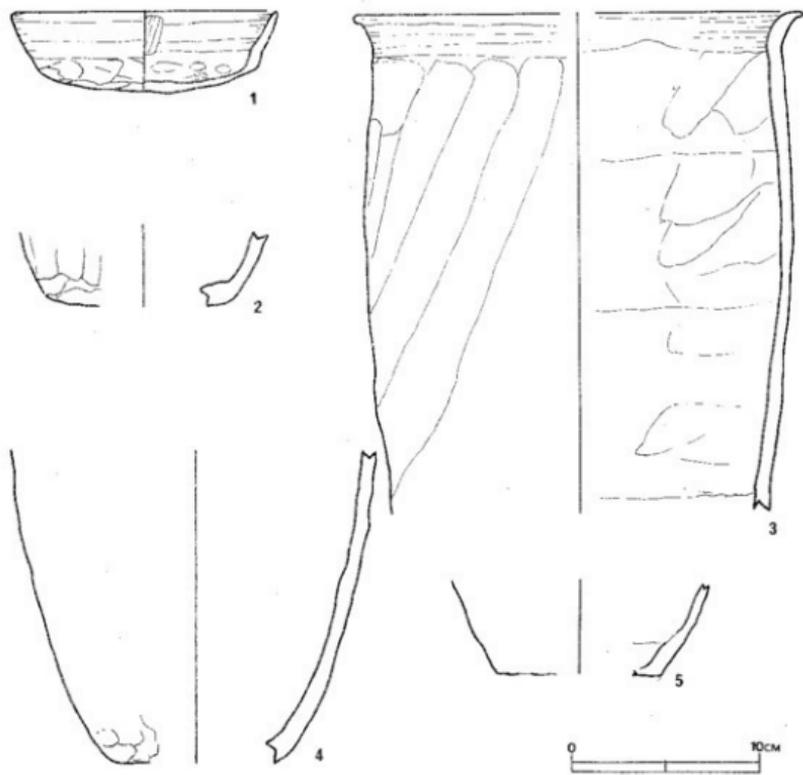
第45图 第4号住居址出土土器实测图(1)



第46図 第4号住居址出土土器実測図(2)

第5号住居址出土土器説明表

種別 番号	器種	法量 (cm)	技法等の特徴		胎土	色調 焼成	備考
			外面	内面			
47 -1	环 (甲)	A 14.3 B 4.4 C 11.4	口縁部横ナデ、体部 ヘラ削り、横ナデ、 底部ヘラ削り、やや 丸底。	口縁部横ナデ、体部 一部にタテのハケ目 底部ナデ、指頭痕。	砂まじり、 きめ細かい。	一部内黒に なり、茶褐色。 色。	カマド内、 スス状のもの の付着。
-2	甕 (甲) 底部	C (8.8)	横位ヘラ削り。底部 も不定方向ヘラ削り。	胴部ヘラ磨き、底部 指頭によるナデ痕。	きめ細かい 小石まじり。	暗褐色。	カマド内
-3	甕 (甲)	C (8.8)	底部はやや丸底風に なっている。胴部縦 位ヘラ削り→底部付 近横位ヘラ削り。	ハケ目と指頭による ナデと抑えの痕跡が みられる。	石英、小石 まじり。	暗褐色。	一部にスス が付着して いる。
-4	甕 (甲)	A (24.2) D (23.2)	口縁部は単唇口縁、 最大径がある。横ナ デ。胴部は縦位ヘラ 削りで口縁部のナデ の後に下位より上位 へ調整されている。	口縁部横ナデ。胴部 にもナデがある。接 合痕も明瞭に残っ ており、粘土層を積み 上げていった様子が わかる。	石英、小石 まじり。	白褐色。	カマド東袖 付近より出 土。内面に スス付着。
-5	甕 (甲)	C (9.8)	底部はやや丸底風 になっている。胴部縦 位ヘラ削り→底部付 近横位ヘラ削り。	ナデがみられる。ハ ケ目も一部にみら れる。	小石(石英)白っぽい部 がみられる。分が やや荒い。	白っぽい部 がある。 暗褐色。	風化が進ん でいる。



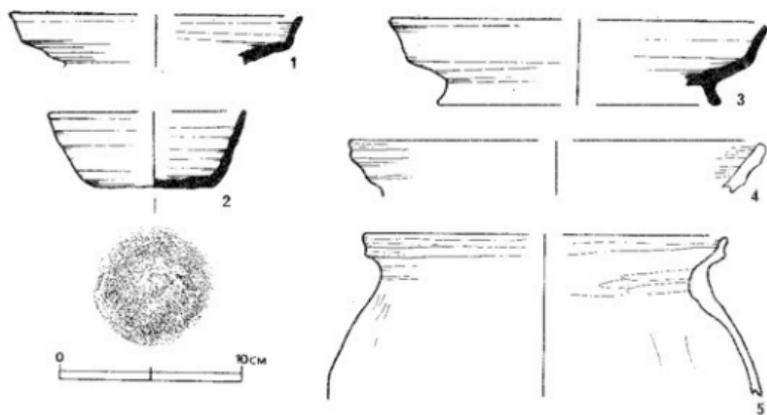
第47图 第5号住居址出土土器实测图

第6号住居址出土土器説明表

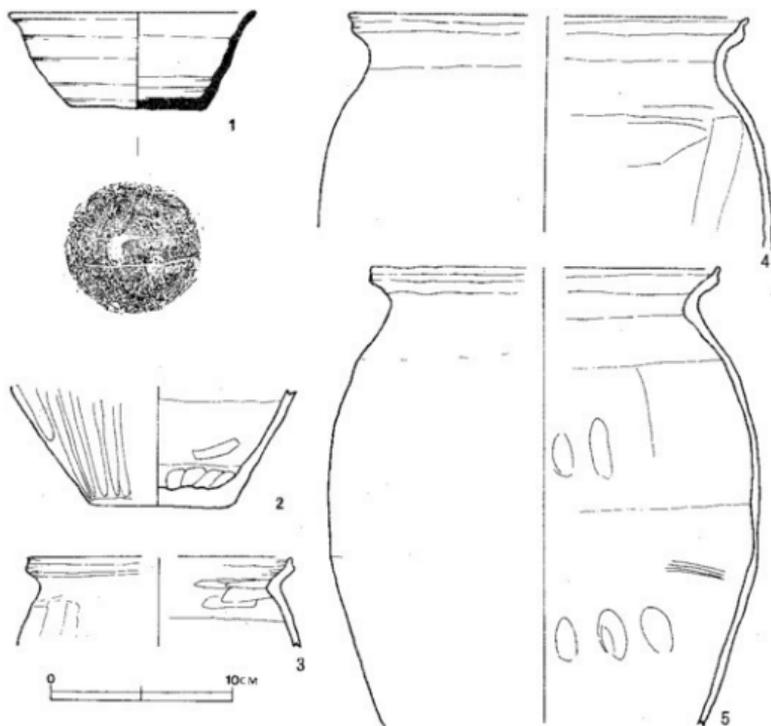
押図 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 上	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
48 -1	高台付 盤 (S)	A (21.4) B (2.6)	ロクロ成形。体部下 方にはロクロ目の凹 凸がみられる。口縁 部がやや外反する。	体部下方より上方 向って器厚はうすく なる。	石英、小石 まじり。	青灰色。	平たい感じ がする。
-2	盤 (S)	A (11.1) B 2.1 C 6.4	底部は回転ヘラ切り ののち不定方向のヘ ラ削りがみられる。 直線的に立ち上がる。	底部はやや凹凸がみ られる。器厚は口縁 部に向うほどうすく なる。	石英、小石 まじり。	灰白色。	小ぶりの環 である。北 東コーナ ー付近。
-3	高台付 杯 (S)	A (21.4) B (4.7) C (16.0)	やや低めの高台が外 側へ「ハ」の字形に 強く外反する。口縁 部もやや外反する。 高台部と体部の接合 部は明瞭に残ってい る。底部は回転ヘラ 削り調整。	底部の器厚は中央へ 向ってやや薄くなっ ている。器肌はやや ざらついている。	石英をまじ える。	エンジ色。	1よりもや や深めの環 である。
-4	甕 (H)	A (23.2)	口縁部の破片である。 なだらかに外向し、 口唇部がわずかに立 ち上がる。	器厚は、口縁端部に 向って一度厚みをま し、中程から厚さを 減じていく。	砂まじり。	暗茶色。	
-5	甕 (H)	A (20.3) B ( 9.2) D (24.4)	口唇部が立ち上がる 口縁部は横ナデ、胴 部はハケ目とタテの ヘラ削り。ナデ。	口縁部は横ナデ、頸 部は横位のヘラ削り、 胴部は縦位のハケ目 がみられる。	砂まじり。	暗褐色。	

第7、8号住居址出土土器説明表

挿図 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	特 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
49 -1	坏 (S)	A 13.6 B 5.4 C 7.6	底部は回転ヘラ切りのち不定方向のヘラ削りがなされている。体部はややふくらみをもち、口縁部が少し外反する。	器厚は、口縁部に向って薄くなり、凹凸は体部中程に僅かにみられる。	小石、砂まじり。	青灰色。(わざみ色に近い。)	底部「ニ」のヘラ書きあり。その他、坏(S)には、糸切り+底部周辺ヘラ削りの調整のものがある。
-2	甕 (H)	A 7.4 B (4.1)	底部ヘラ削り、胴部下方より上方ヘラ削き(削り?)を行っている。底部周辺横位ヘラ削り。	胴部は、ヘラナデ、ハケ目が見られる。指頭、あるいはヘラによるおさえの様なものがみられる。	雲母、砂まじり。	暗褐色。	東郷付近より出土。
-3	甕 (H)	A (7.8) B (5.8)	口縁部横ナデ。胴部は上方より下方へのヘラ削り。	口縁部横ナデ、頸部横位ヘラ削り。	砂まじり。	暗褐色。	8号住居址小ぶりの甕形土器。
-4	甕 (H)	A (2.22) B (1.22)	口唇部はやや外反し立ち上がる。胴部はナデ、口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。胴部ヘラ削り。	小石、雲母含む。	黄褐色。	口縁部はややゆるく立ち上がる。
-5	甕 (H)	A (20.1) B (25.4) D (23.8)	口縁部は強く外反しつつ立ち上がる。横ナデ。胴部はヘラナデ。	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。ハケ目、指頭によるおさえの痕跡あり。	雲母、砂まじり。	暗黒褐色。	4に比べて口縁部が強く外反する。



第48图 第6号住居址出土土器实测图



第49图 第7号、8号住居址出土土器实测图

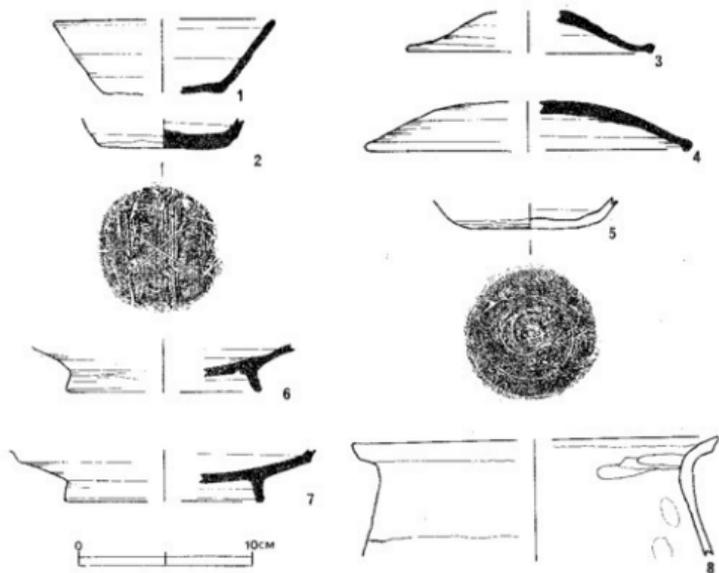
第9、10、11号住居址出土土器説明表

持図 番号	器種	法 械 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
50 -1	坏 (S)	A (13.8) B 2.2 C (7.0)	底部は回転ヘラ切り、 体部は直線的に外へ 開く。	底部がやや上げ底風 になっている。	小石まじり。	暗灰色。	表土中。 (10号住 居址)
-2	坏 (S)	C 7.7	まず、円形の粘土板 を置き、粘上籍で体 部を巻き上げて後に ロクロ成形したもの であろうか。底部は 一定方向の手持ちヘ ラ削りがなされてい る。 ヘラ記号「X」があ る。体部下端にナデ がみられる。	やや凹凸がみられる が、ロクロ成形の跡 が残っている。	小石、石英 粒まじり。	青灰色。	10号住居 址覆土中。 底部のみを 残して(そ の接合部?) がきれいに 割れている。
-3	蓋 (S)	A (14.2) B (2.4)	あまり膨らみを示さ ずに、いわば「山形」 の形である。上部に は、回転ヘラ削り調 整が行なわれている。	断面形は、端部が内 側へ縁り込まれず やや外側へ開きみ になっている。かえ り名残りを示すもの か。	小石、石英 まじり。	青灰色。	同上。 つまみ部欠 損。
-4	蓋 (S)	A (18.8) B (2.9)	端部よりやや膨らみ を示しつつつまみ部 方向へ向う。上部は、 回転ヘラ削り。	端部が中へくり込ま れている。	石英まじり 黒点がとこ ろどころに 認められる。	青灰色。	つまみ部欠 損。 11号住居 址。床面。
-5	坏 (H)	B (1.2) C 9.1	底部は回転ヘラ削り 調整。体部との境界 は明瞭ではなく、や や丸味がある。	黒色処理。 不定方向のヘラ磨き がみられる。	雲母、砂ま じり。	白茶褐色。	11号住居 址覆土。
-6	高台付 坏 (H)	B (11.3) C (2.8)	高台部がやや強く、 外側へ向って張り出 す。底部は回転ヘラ 削り調整。	器厚は、体部がやや 薄い。体部と底部の 境はやや厚い。	小石まじり。	灰色。	11号住居 址覆土。

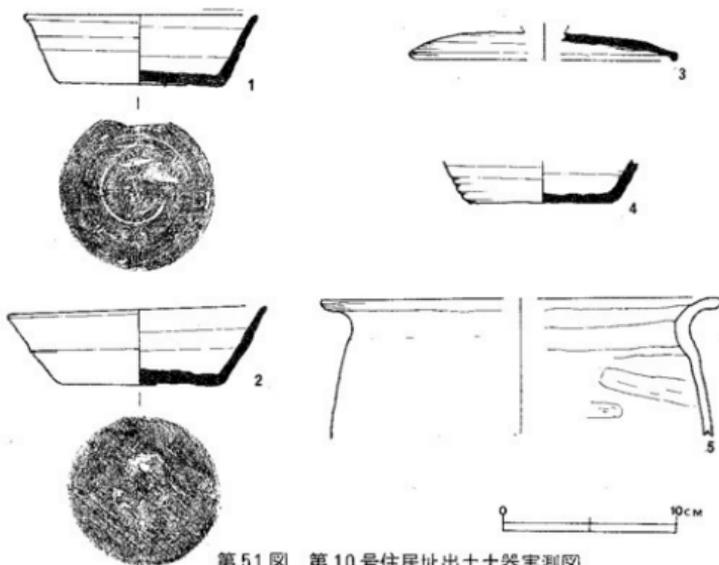
神田 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 上	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
50 -7	高台付 坏 (S)	B (2.8) C (6.7)	底部は回転へら削り。 高台部は、ほとんど 外反しない。	器厚はほぼ一定で安 定している。体部上 位より口縁部方向へ かけて陵を残し外反 しつつ立ち上がる。	石英粒まじ り。	内側は暗赤、 外側灰色。	11号住居 址。
-8	甕 (H)	A (21.4) B (7.2)	口縁部は単口縁に近 く、横ナデされている。 胴部中程のところ に最大径があるよう である。	口縁部は横ナデ。頸 部は横位へら削り。 胴部に指頭の痕跡が 認められる。	雲母、砂ま じり。	茶褐色。	10号住居 址覆土。

第10号住居址出土土器説明表

神田 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 上	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
51 -1	坏 (S)	A 13.6 B 4.0 C 9.8	底部回転へら削り調 整。刻書文字「大」 がある。やや上げ底 風。約60度の角度 で外側へ開く。	丁寧なナデにより調 整されている。底部 より口縁部に向うに つれ器壁は薄くなる。	石英粒まじ り。 焼成良好。	うすい紫灰 色。	カマド左袖 の外側。刻 書「大」あ り。
-2	坏 (S)	A 15.0 B 4.3 C 9.4	底部の切り離しは回 転へら切りであろう。 底部は、手持ちへら 削り（一定方向）調 整。体部は直線的に 立ち上がる。	底部はやや上げ底風 になっている。 器壁はほぼ一定して いる。	石英粒まじ り。	灰白色。	南壁中央付 近。 No. 1
-3	蓋 (S)	A (15.2) B (1.6)	平たい形をしている。 端部がやや内傾して おり、膨らみをもち つつ上方向。	やや凹凸がある。	石英粒まじ り。	青灰色。	つまみ部欠 損。
-4	坏 (S)	B (2.2) C 8.3	体部はやや膨らむ。底 部はやや丸味をもつ。	器厚は底部が比較的 うすい。	石英粒まじ り。	青灰色。	No. 2 南壁付近。
-5	甕 (H)	A (23.2) B (7.8)	単唇口縁。口縁部に 最大径があるよう である。口縁端部は丸 味をもつ。	口縁部横ナデ。胴部 へら削りとナデ。	小石・砂ま じり。	薄紫色。	カマド内よ り出土。



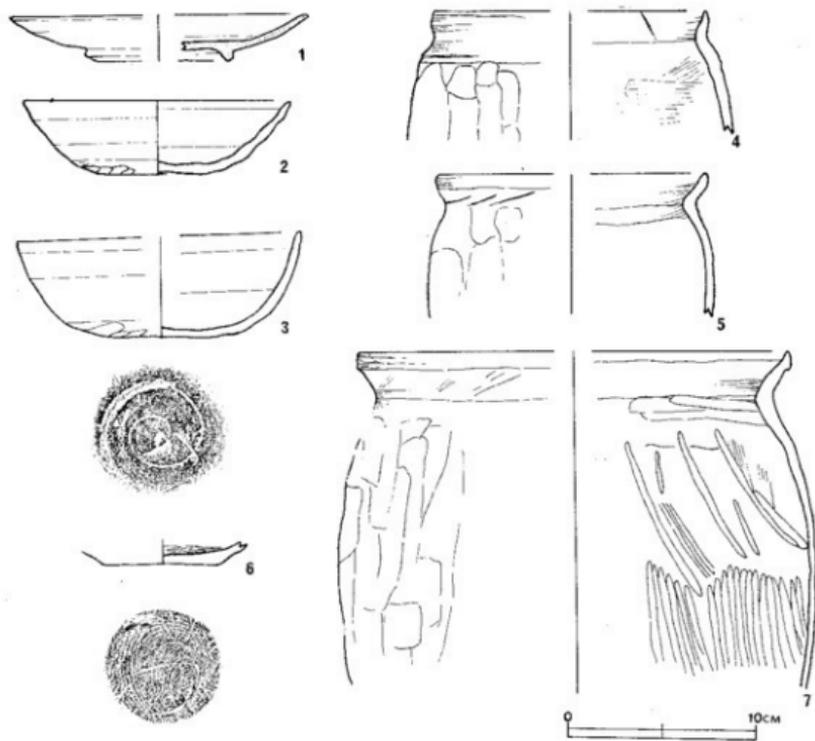
第50图 第9号、10号、11号住居址出土土器实测图



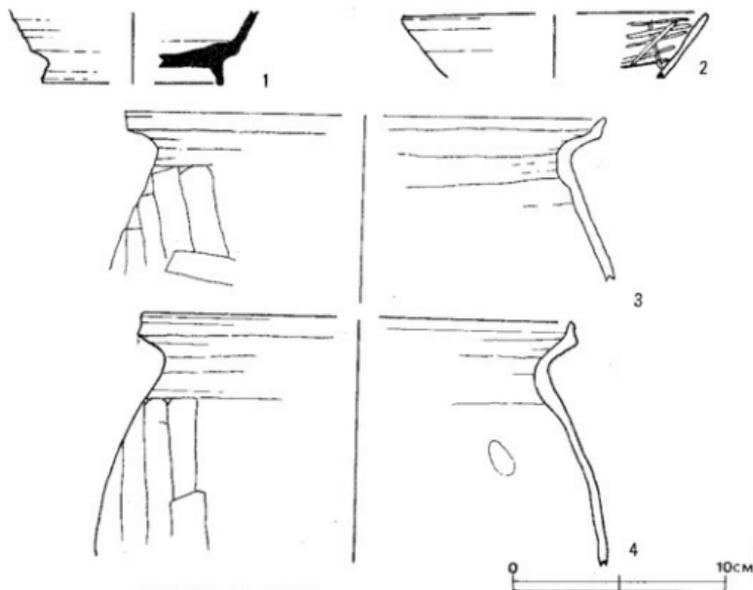
第51图 第10号住居址出土土器实测图

第12号住居址出土土器説明表

採掘 番号	器種	法量 (cm)	技法等の特徴		胎土	色調 焼成	備考
			外面	内面			
52 -1	甗 (K) 灰釉	A (16.1) B (2.6) C (6.2)	体部の中程まで薄緑色の釉がかかっている。体部が膨らみをもちつつ口縁部に至る。	高台の端部が尖る。器厚はほぼ一定である。底部中央付近に緑色の「釉だまり」がみられる。	よく精選された白灰色の粘土。	薄緑色及び白灰色。	唯一の灰釉陶器。
-2	坏 (H)	A 14.3 B 5.4 C 7.6	底部と体部の境界が明瞭でない。体部ト端に手持ちへら削り、丸底風。ロクロ整形、回転へら削り調整。	器厚はほぼ一定である。口縁部がやや丸味をもちながら外向。	雲母を含む。	赤褐色。	カマド内。
-3	埴 (H)	A 15.2 B 5.4 C 7.1	底部は回転へら削り(右向き)。体部はへら削り(手持ち)調整。ロクロ整形。体部は膨らみをもちつつ真上に立ち上がる。口縁部には横ナデがみられる。	黒色処理。カマドにあったせいか、かなり赤変しており、内面も光沢がなくなっていた。また、このためへら磨き調整も観察できなかった。ロクロ製。	小石、砂まじり。	外側は赤褐色。内側は黒褐色。	破片は底部が丸く割れており、体部と底部の接合部分を示すものか。
-4	甗 (H)	A (15.6) B (7.2)	胴部中程に最大径があるようである。口縁部横ナデ。胴部タテのへら削り(かなり明瞭に残っている)。	口縁部横ナデ、ハケ目。胴部ハケ目(横位、斜位)。口唇部は外反せず、真直ぐに立ち上がり、先端は先細りになる。	砂まじり。	暗褐色。	小型の甗形土器。
-5	甗 (H)	A (14.1) B (7.5) D (15.4)	胴部中位に最大径。口縁部横ナデ、頸部に沈線。胴部へら削り。	口縁部横ナデ、単口縁。胴部に粘土紐の接合痕あり。	小石、砂まじり。	暗褐色。	小型の甗形土器。P1より出土。
-6	甗 (H)	B (1.2) C 6.2	底部と体部は明らかに分かれる。回転糸きり痕。	黒色処理、へら磨き。(不定方向)	砂まじり。	明褐色。	数少ない糸切り痕を残すもの。
-7	甗 (H)	A (23.1) B (18.6)	胴部中位に最大径。口縁部は、先尖りになって立ち上がる。横ナデ、胴部は横位へら削り。	口縁部横ナデ。頸部横位へら削り。胴部丸棒状工具により斜位の沈線が数条みとめられる。へら削り。	小石を含んでいる。砂まじり。	赤褐色	4号住居址の甗形土器に近似している。カマド内出土。



第52图 第12号住居址出土土器实测图



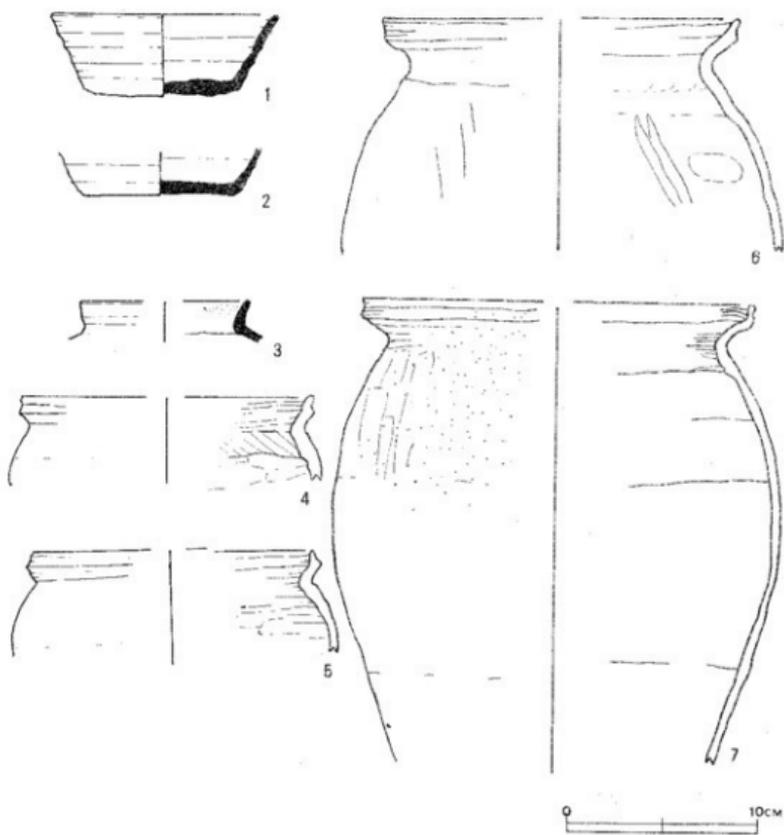
第53図 第13号住居址出土土器実測図

第13号住居址出土土器説明表

種 番 号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
53 -1	高台付 坏 (S)	C (83) (2.9)	高台部は「ハ」の字 形に開く。器厚は底 部が厚くつくられて いる。	底部の中程が凹んだ ようになっている。	精緻だが粘 性。	青灰色。 焼成良好。	覆土中。
-2	坏 (H)	A (14.1)	ロクロ成形の際生じ た稜がみられる。	黒色処理。不定方向 のヘラ磨きがみられ る。	雲母まじり。	明褐色。 焼成良好。	覆土中。
-3	甕 (H)	A (20.7) B (9.2)	口縁部横ナデ。胴部 タテヘラケズリ。口 胴部に稜。	口縁部横ナデ。口唇 部はゆるやかに立ち 上っている。胴部上 位に最大径。	砂、雲母ま じり。	暗褐色。 焼成良好。	床面上。
-4	甕 (H)	A (20.1) B (10.8)	口縁部横ナデ。胴部 タテヘラケズリ。口 縁部が小さくなって いる。	口縁部横ナデ。口唇 部ゆるやかに立ち上 る。胴部上位に最大 径。指頭痕。	砂、雲母ま じり。	暗褐色。	北東コーナ ー付近。

第 14 号住居址出土土器説明表

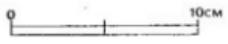
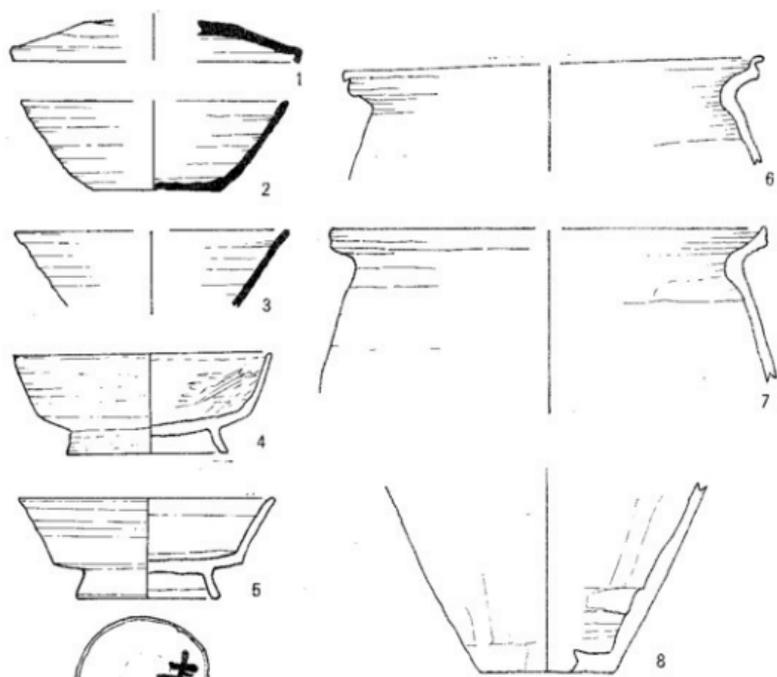
図 号	器 種	法 寸 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 成	備 考
			外 面	内 面			
54 -1	坏 (S)	A 11.9 B 4.5 C 8.2	底部回転ヘラ削り調整、やや凸凹がある。	底部の一部は凸になっている。	小石まじり。	灰色。	
-2	坏 (S)	B (2.2) C 8.1	底部回転ヘラ削り調整、器厚は体部が薄い。	なめらかで平らである。	小石まじり。	青灰色。	
-3	短筒壺 (S)	A 9.0 C (2.4)	胴部がやや外向しつつか立ち上る。	自然釉が一部に観察できる。	砂まじり。	暗灰色。	
-4	壺 (H)	A (15.4) B (4.6)	口唇部が立ち上る。胴部上位に最大径。	口縁部横ナデ、器厚がある。	砂まじり。	暗褐色。	
-5	壺 (H)	A (14.4) B (6.1)	口唇部が内向しつつかや立ち上る。口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ、胴部にヘラ削り痕。胴部は他に比べ丸味をもつ。	小石まじり。	暗褐色。	
-6	壺 (H)	A (18.8) B (12.4)	口縁部横ナデ。胴部ヘラ削り、中程に最大径。	口唇部はなだらかに外向する。指頭痕。ヘラ削り。	砂まじり。	明褐色。	
-7	壺 (H)	A (20.7) B (25.2)	口唇部は直上に立ち上る。頸部のくびれが強い。胴部中程のところを最大径。	口縁部横ナデ。接合部が数か所で観察できる。ヘラ削り。	小石まじり。	茶褐色。	焼造に使用 スス付着。 (B)



第54图 第14号住居址出土土器实测图

第15号住居址出土土器説明表

挿 図 番 号	器 種	法 量 ( <i>cm</i> )	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
55 -1	蓋 (S)	A (15.4) B (2.6)	頂部付近は回転ヘラ 削り、やや内湾さみに 端部に至る。端部 は内向し、断面は四 角形である。	ナデが行われており 一部が磨滅している。	砂まじり。	灰白色。	つまみ欠損
-2	坏 (S)	A (14.3) B 4.8 C (7.0)	底部は回転ヘラ削り 調整、やや上げ底風 丸味をもちつつ立ち 上がる。	底部は中心付近の器 壁が薄い。口縁端部 はやや厚みをもって いる。	小石まじり。	暗灰色。	半欠品。
-3	坏 (S)	A (14.6)	口縁部はやや外反す るが、体部は直線的 である。	平滑で器厚は同様な 厚土である。	小石まじり。	暗灰色。	体部の一部 のみ。
-4	高台付 坏 印	A 14.0 B 5.4 C 8.7	全体が磨滅している。 底部には回転糸切り 痕がある。高台部は 「ハ」の字形に外向 し、体部はやや内湾 気味に立ち上る。	内面黒色処理。ヘラ 磨きが不定方向にみ とめられる。底部は 中稜に向って凹んで いる。器厚は体部下 端・底部が厚い。	小砂まじり。	暗褐色。	底部は、糸 切りの後外 周をヘラ削 りされ高台 が付される。
-5	高台付 坏 印	A 13.7 B 5.4 C 7.6	底部回転ヘラ削り。 高台部は「ハ」の字 形に開き、底部と体 部の境の稜は明確。 墨書「土垣倉」あり。	内面黒色処理。不定 方向のヘラ磨き。ロ クロ痕跡が明瞭。 体部は外向する。	小砂まじり。	暗褐色。	カマドの東 袖上。漆紙 文書付着土 器。体部下 端ヘラ削り。
-6	壺 印	A (22.4)	口唇部が著しく外向 する。口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。胴部 は斜位のナデなど。	砂まじり。	暗褐色。	
-7	壺 印	A (23.6)	口唇部がやや肥厚し 稜をもち立ち上る。	口縁部横ナデ。	砂まじり。	暗褐色。	覆土中。
-8	壺 印	C (6.2)	縦位・横位ヘラ削り。	ハケ目、ヘラ削り。	雲母まじり	黒褐色。	覆土中
-9	漆紙文書「解」	5 5 図-5	の土器に付着。				
-10	漆紙文書	土器内に於ける付着状態。③が文字の現れた紙片。裏側より文字を確認。 「解」の異体字である「解」がある。 「縮尺不同」 他にも文字があるが不鮮明である。解状の一部。					

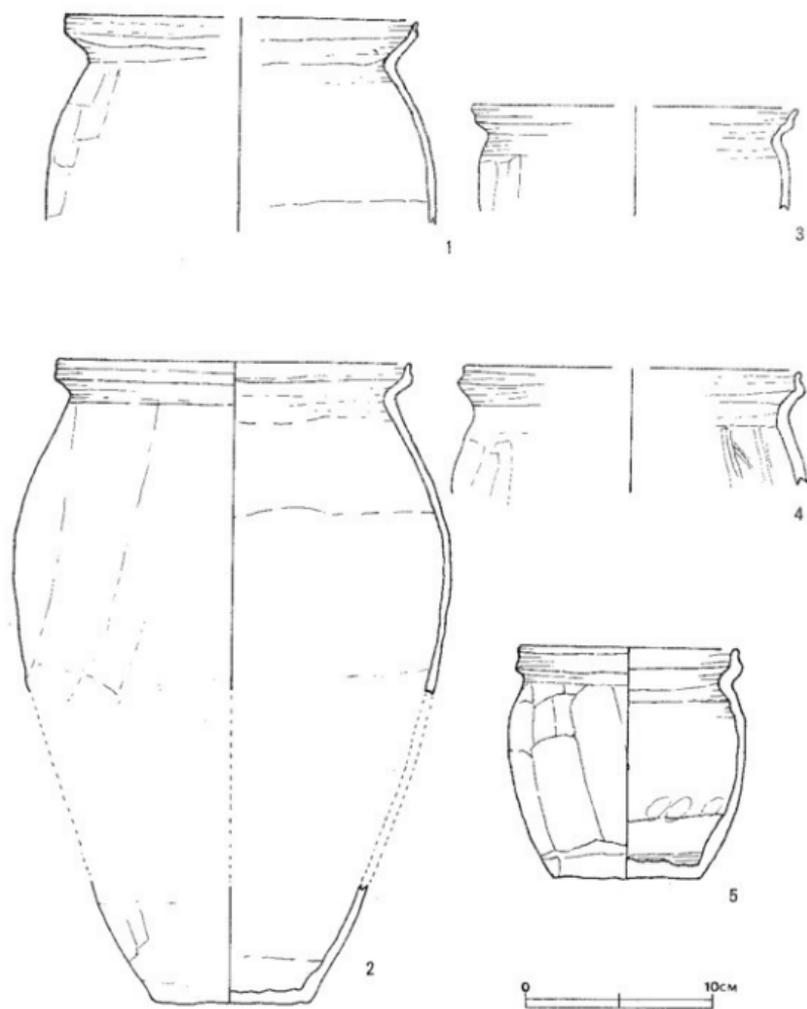


(漆紙と付着状態)

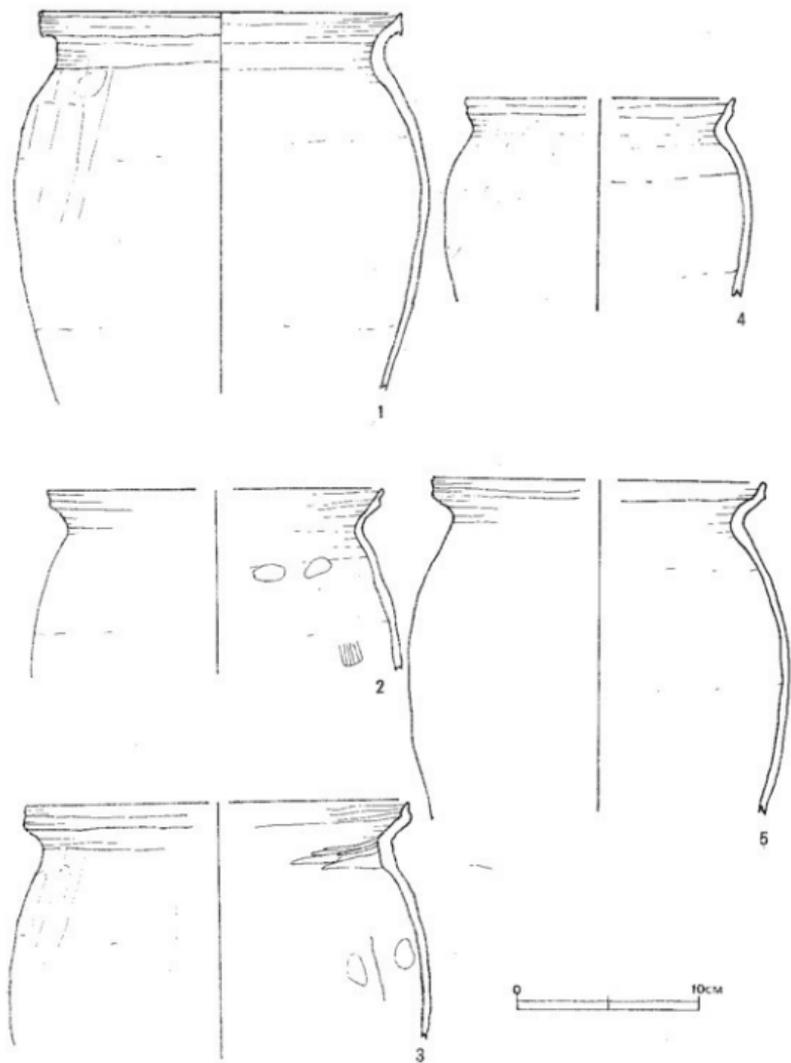
第55図 第15号住居址出土土器実測図

第 16 号住居址出土土器説明表

挿図 番号	器種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 調 焼 成	備 考
			外 面	内 面			
56(1) -1	甕 埴	A (190)	口縁部横ナデ、接合	口縁部横ナデ、	雲母、小砂 まじり。	暗褐色。	
		D (212)	口縁部横ナデ。長制	口縁部横ナデ、口唇			
		B (345)	的な長さの胴部。	部は真上に立ち上る。			
		C 84	ナデとケズリ。	器厚は頸部と底部付			
		D 234		近がやや厚い。			
-3	甕 埴	A (167)	口縁部横ナデ。胴部	口唇部外向し立ち上	小砂まじり。	暗褐色。	
			タテヘラケズリ。ナ	る。最大径は口縁部			
			デ。				
-4	甕 埴	A (182)	口唇部一度内向した	口縁部横ナデ。胴部	小石、雲母	暗褐色。	
			後外反する。ヘラ削り。	ササラ状ハケ。	まじり。		
-5	甕 埴	A 11.8	口縁部横ナデ。胴部	口縁部横ナデ。器厚	小砂まじり。	赤褐色。	二次焼成を うけている。 ひずみ小窓。
		B 12.6	タテのヘラケズリ。	は一定しない。胴部	石英含む。		
		C 7.9	下端傾位ヘラケズリ。	はナデ、指頭痕。			
56(2) -1	甕 埴	A 20.0	口縁部横ナデ。胴部	口縁部横ナデ。胴部	小砂まじり。	黄褐色。	須恵器模倣 器。甕道に 倒置使用。
		D 23.1	指頭痕。ヘラナデ。	ハケ目、指頭痕、ナ			
			ヘラケズリ。	デ。			
-2	甕 埴	A (186)	口縁部横ナデ。胴部	胴部に指頭痕。ハケ	小砂まじり。	暗褐色。	胴部中位に 最大径。
			ナデ。口唇部外向。	目。			
-3	甕 埴	A (213)	口縁部横ナデ。胴部	口縁部横ナデ、頸部	雲母、小砂	暗褐色。	胴部中位に 最大径。
		D (224)	ナデ、削り。	ヘラ削り。胴部指頭	まじり。		
				痕。ナデ。			
-4	甕 埴	A (158)	口縁部横ナデ。胴部	口唇部外向する。胴	雲母、小石	暗褐色。	胴部上位に 最大径。
			ナデ。ケズリ。	部ナデ、ケズリ。	まじり。		
-5	甕 埴	A (184)	口縁部横ナデ。胴部	口唇部腹をもち真上	砂、小石ま	暗褐色。	胴部中位に 最大径。
			ヘラケズリ。ナデ。	に立ち上る。頸部ヘ	じり。		
				ラケズリ、胴部ナデ。			



第56图(1) 第16号住居址出土土器实测图(1)



第56图(2) 第16号住居址出土土器实测图(2)

第17号住居址出土土器説明表

挿 番 号	器 種	法 量 (cm)	技 法 等 の 特 徴		胎 土	色 焼 調 成	備 考
			外 面	内 面			
57 -1	坏 (S)	A 136 B 45 C 48	ハケ目。底部は上げ 底風になっている。 回転ヘラ削り調整。	底面はなめらか。器 厚は、底部・体部と もあまり変らない。	よく精選さ れている。	暗灰色。	
-2	坏 (S)	A (126) B 47 C (46)	ハケ目。底部回転ヘ ラ削り調整。	底部から体部上方に かけて器厚はうすく なる。	小石まじり。	白灰色。	重厚な感じ がする。
-3	甕 Ⅱ	A (199) B (63)	口縁部に最大径。口 唇部に綾がみられ、 外向し立ち上る。	口縁部横ナデ。胴部 ヘラ削り。	小石まじり。	暗褐色。	
-4	甕 Ⅱ	B (94) C (63)	胴部ケズリ。ナデ。	ナデ、ハケ目。	砂まじり。	暗褐色。	



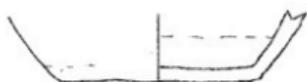
1



3



2



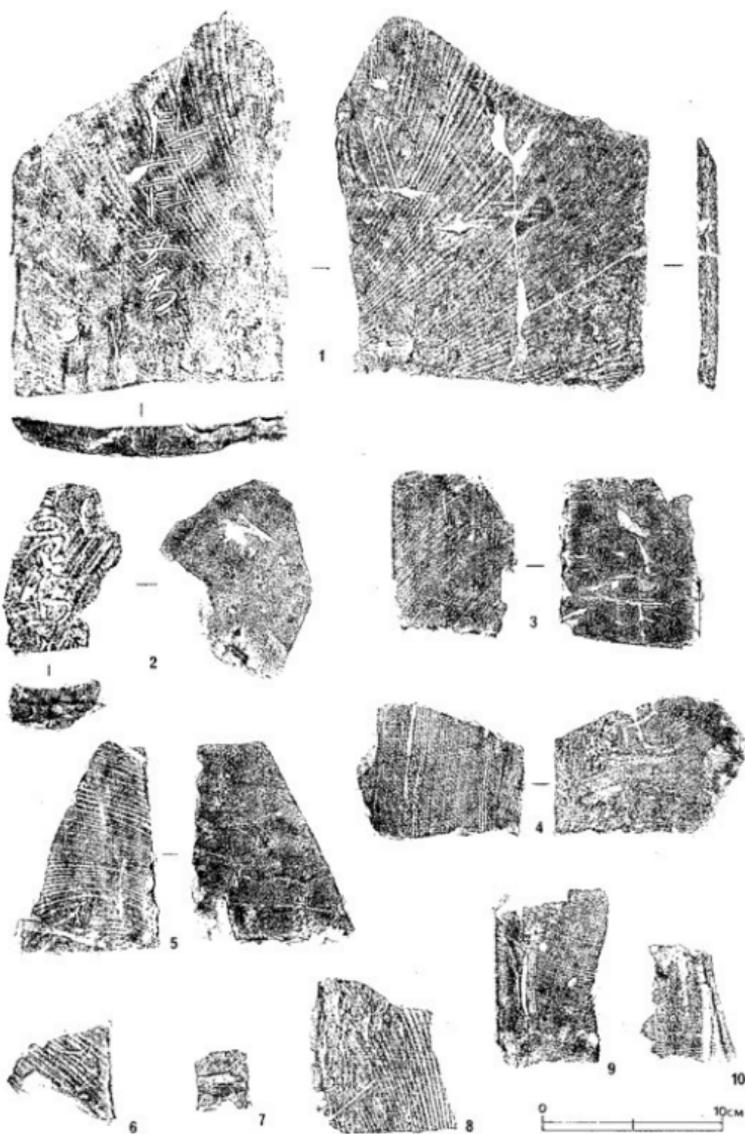
4



第57図 第17号住居址出土土器実測図

瓦片説明表

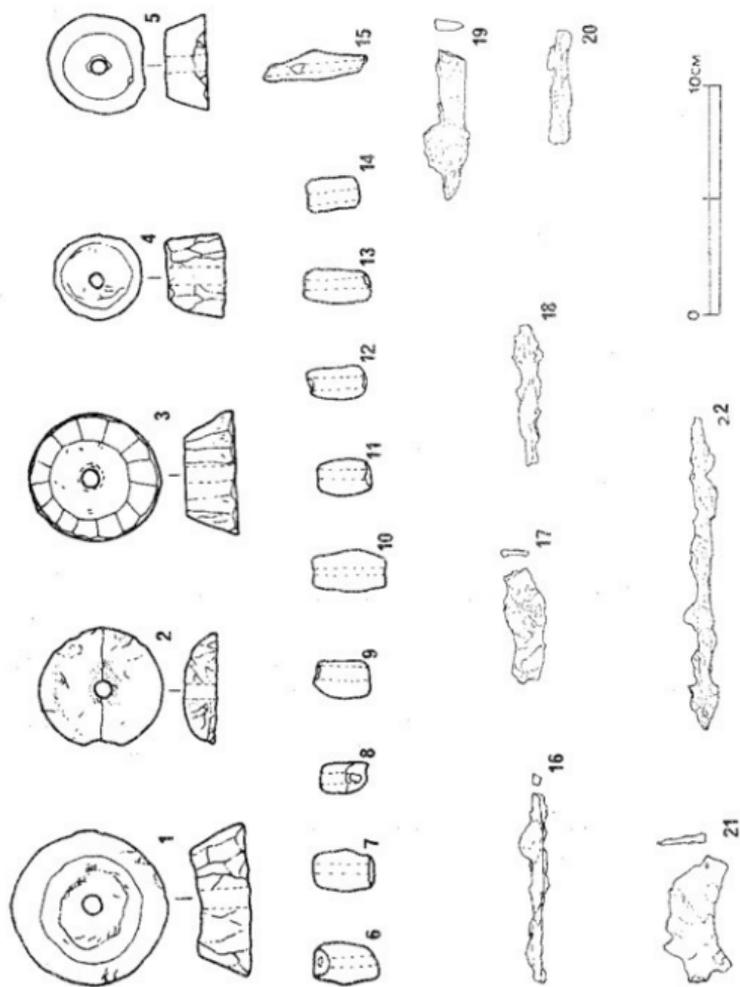
挿図番号	器種	技法等の特徴	備考
58 -1	平瓦 (文字瓦)	凹面・凸面ともに糸切り痕が認められる。粘土板による一枚作り。凹面には、籠書きにより「□鳥取郡文功」の文字が記されている。下方には、指頭痕がみられる。凸面は、一部にヘラケズリ痕がみられる。下方に指頭痕がある。側面・端部ともにヘラケズリ。二次焼成を受けている。	14住(A)ベルト中。
-2	平瓦 (文字瓦)	凹面は、布目の圧痕が残っている。また、籠書きにより「鳥部嶋」の文字が記されており、上端は欠損している。凸面は、ナデにより調整されている。	9、10、11 住表採。
-3	平瓦	凹面は、布目の圧痕。凸面はナデによる調整。	1住覆土。
-4	平瓦	凹面は、糸切り痕、布目の圧痕かのこる。凸面はナデ調整。側面・端部はヘラケズリ。	9、10、11 住表採。
-5	平瓦	凹面は、布目の圧痕。凸面はナデ調整。側面はヘラケズリ調整。	14住表採。
-6	平瓦	凹面は糸切り痕。凸面はナデ調整。	14住No 1。
-7	平瓦	凹凸面には糸切り痕。側面はヘラケズリ。	14住No 2。
-8	平瓦	凹凸面に糸切り痕。凹面に布目の圧痕。	14住No 3。
-9	平瓦	凹面に布目の圧痕、凸面はナデ。	14住No 5
-10	平瓦	凹面に布目の圧痕、凸面はナデ。	14住No 6。



第58図 瓦片の拓影

## 紡錘車・土鍾・鉄製品説明表

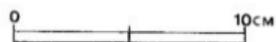
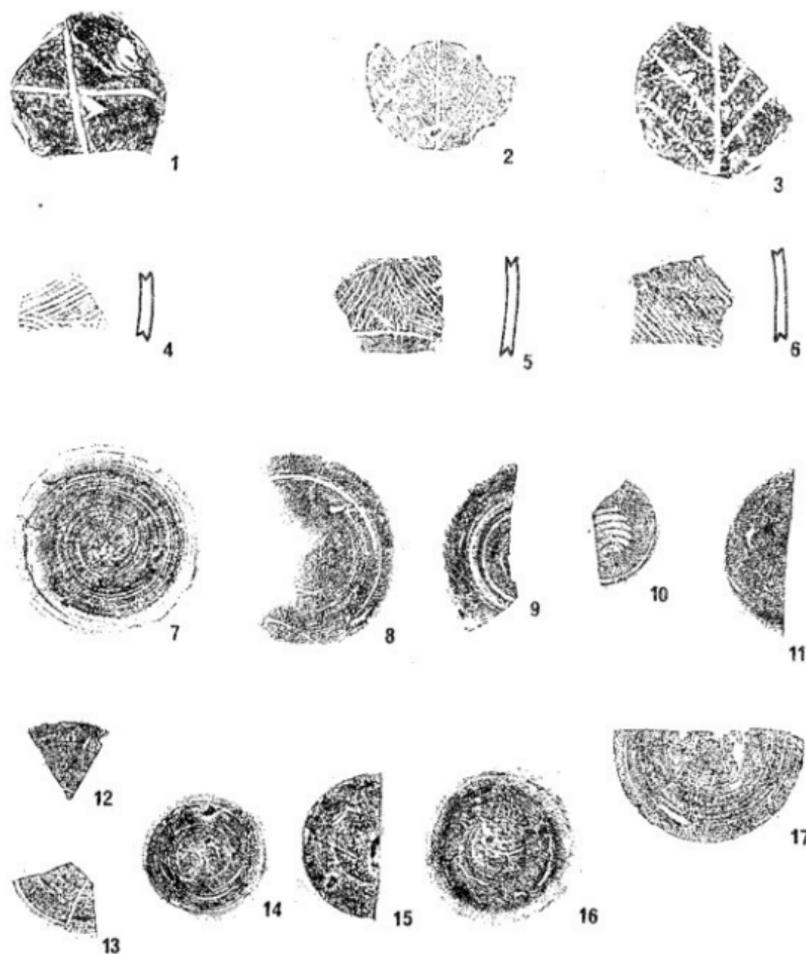
番号	器種	技法上の特徴	重量	備考
59 -1	紡錘車 (3号住)	石製品。直径68cm, 厚さは縁で約23cm, 孔径0.8cm。断面は台形状。面とりが側面にみられる。底面には、糸の擦痕が円形にみられ、一部外側へ流れておりこの面を使用面としていた様子がわかる。	115.5g	西壁より出土。
-2	紡錘車 (3号住) No 2	土製品。上面径約3.2cm, 下面径5.4cm, 厚さ1.4cm, 孔径0.6cm。断面コマボコ形。二つに割れている。底面の周囲には磨滅。また、上面の孔の周囲も同様である。	38.8g	
-3	紡錘車 (楕立柱 建物址)	石製品。上面径約3.6cm, 下面径5.6cm, 厚さ2.2cm, 孔径0.9cm。13面の面とりがあり、側面下方の扁円にはケズリがみられる。上面の孔周囲に擦痕がみられる。	70.6g	
-4	紡錘車 (6号住)	土製品。上面径3.1cm, 下面径3.8cm, 厚さ2.6cm, 孔径1.6cm。断面は台形状。下面の一部にヘラケズリ。上面から側面にかけてスガが付着、側面にもタテのヘラケズリ。	49.8g	胎土に長石、燧石、雲母を含む。
-5	紡錘車 (15号住)	石製品。上面径1.5cm, 下面径2.2cm, 厚さ1.8cm, 孔径0.8cm。断面は台形状。側面はややふくらみをもつ。全面にわたって磨かれて整形されている。	49.6g	カマド上。
-6	土 鍾	長さ2.8cm, 幅1.8cm, 孔径0.4cm。	11.8g	3住No15
-7	土 鍾	長さ2.4cm, 幅2.0cm, 孔径0.4cm。	11.0g	3住No 2
-8	土 鍾	長さ2.0cm, 幅1.4cm, 孔径0.2cm。(半欠品)	3.6g	3住No 3
-9	土 鍾	長さ2.6cm, 幅1.6cm, 孔径0.6cm。	48.5g	3住No13
-10	土 鍾	長さ3.2cm, 幅1.8cm, 孔径0.4cm。	1.4g	3住No14
-11	土 鍾	長さ2.4cm, 幅1.6cm, 孔径0.4cm。	7.2g	3住No10
-12	土 鍾	長さ2.4cm, 幅1.4cm, 孔径0.6cm。	5.8g	3住No 6
-13	土 鍾	長さ3.0cm, 幅1.5cm, 孔径0.4cm。	5.4g	3住No 4
-14	土 鍾	長さ2.2cm, 幅1.4cm, 孔径0.7cm。	5.2g	3住No11
-15	土 鍾	長さ4.6cm, 幅1.4cm, 孔径0.4cm。	5.3g	3住No13
-16	鉄製品	角柱状。現存長8.2cm。		2住No15
-17	鉄製品	板状。現存長5.0cm, 幅1.6cm, 厚さ0.2cm。		11住
-18	鉄製品	角柱状。現存長6.2cm, 幅0.4cm 20番も角柱状(16住)		15住No14
-19	鉄製品	刀子。現存長6.4cm, 幅1.1cm。(先端部)		16住No 3
-21	鉄製品	板状。現存長4.2cm, 幅2.0cm。		16住No 2
-22	鉄製品	鉄線。現存長1.38cm, 幅0.6cm。		16住No 5



第59図 錘（石製・土製）と鉄製品

出土土器（拓影）の説明表

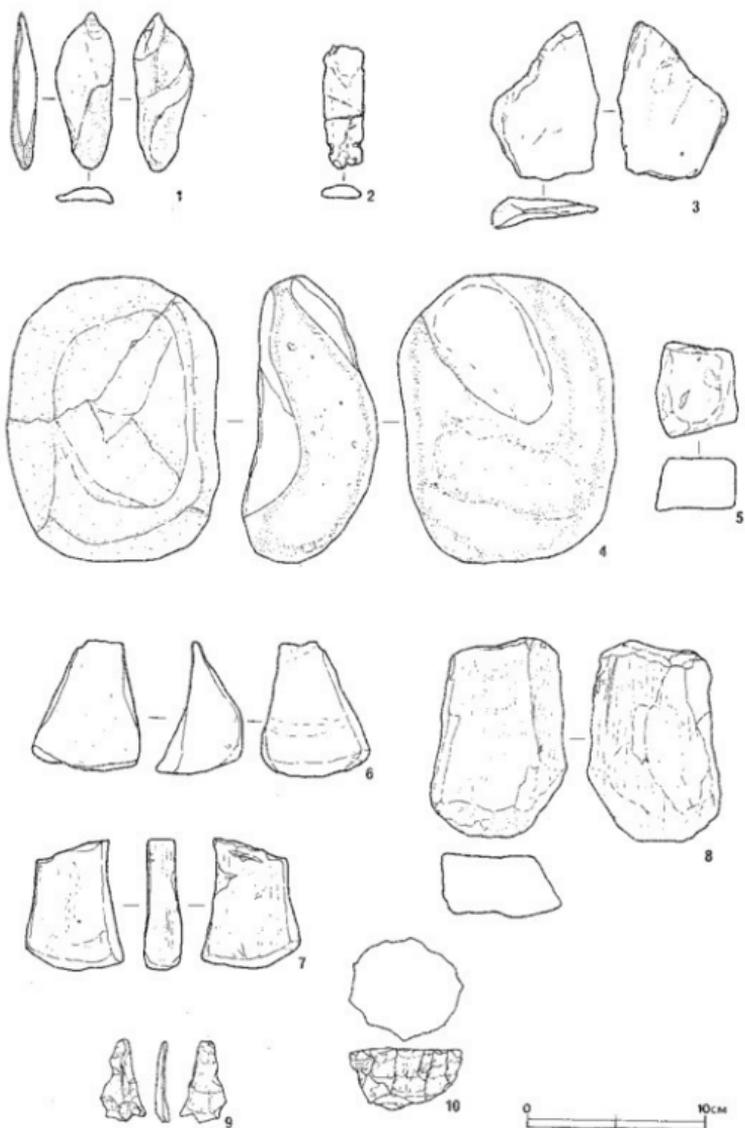
挿図 番号	器種	技 法 等 の 特 徴	備 考
60 -1	甕 印	底部の破片。ヘラ記号「×」がみられる。かなりの凹凸がある。	2号住居址。
-2	甕 印	底部の破片。木葉痕がみられる。	2号住居址。
-3	甕 印	底部の破片。木葉痕がみられる。	3号住居址。
-4	甕	弥生式土器。横位、斜位の沈線文が施されている。焼成良好。赤褐色の色調を示す。	12号住居址。
-5	甕	弥生式土器。斜位と横位の沈線文により区画された中に斜位・縦位の縄文様糸文が施文されている。一部に赤形（丹塗）がみとめられる。	14号住居址。
-6	甕	斜位の縄文。色調は黄褐色を示す。弥生式土器。	14号住居址。
-7	高台付 環 印	右回りの回転ヘラ削り調整がみられる。墨書「ㄨ」がある。同様な墨書は鹿の子遺跡より出土している。	1号住居址。
-8	環 (S)	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。	1号住居址。
-9	環 (S)	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。	7号住居址。
-10	環 (S)	底部外面の拓本。回転糸切りののち底部外周を回転ヘラ削り調整。	7号住居址。
-11	環 (S)	底部外面の拓本。手持ちヘラ削り調整。	9, 10, 11 号住居址。
-12	環 (S)	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。	9, 10, 11 号住居址。
-13	環 (S)	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。ヘラ記号の一部がみられる。	9, 10, 11 号住居址。
-14	高台付 環 印	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。同住居址出土環形土器に糸切り痕のあるものがあり、本例も糸切りの可能性を有している。	15号住居址。
-15	環 印	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。ヘラ記号「二」がみられる。	15号住居址。
-16	高台付 環 印	底部の中央のところに糸切り痕が残る。また、回転ヘラ削り調整が周囲に行われている。	15号住居址。
-17	環 印	底部外面の拓本。回転ヘラ削り調整。	17号住居址。



第60図 出土土器の拓影

石器と石製品

挿図 番号	器種	技法上の特徴	備考
61 -1	石製小 刀	粘板岩。刃部は打剥により作出されている。刃部は磨滅している。また、両面とも、自然面と剥離面との境は磨滅しており光沢がある。先端部は尖っている。長さ8.9cm。	3号住居址 No9。
-2	石 錘	粘板岩。磨製により整形されている。長方形。長さ7.9cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm。裏面は剥落している。長軸に1対、短軸に2対それぞれ切り込みがある。	1号住居址 (A)南壁付近 No16。
-3	砥 石	青灰色の石材。不整形のものである。片面に打割の痕跡がみられる。剥片を素材とし側面に研磨の跡がよくみられる。	4号住居址。
-4	凹 石	葉研状石器ともいうべきもので、表面の中心に大きな凹があり、裏面にも一部凹んでいる。安山岩。長楕円形。長さ16.4cm、幅12cm、厚さ6.6cm。	3号住居址。 南壁付近。
-5	スリ石	軽石の長軸5.1cm、短軸4.6cm、方形。断面形は台形状。	4号住居址。
-6	砥 石	台形状。凝灰岩。表面はえぐれており、上端は下部と遠いかなり薄くなっており、約0.4cm程しかない。	13号住居址。
-7	砥 石	正面観は、13号住居址のものと近似している。現存長7.4cm、最大幅5.7cm、厚さ2.1cm。片面には、長軸に平行するひっかき傷のような擦痕がみられる。断面形は長方形。	16号住居址 13号住居址 と同一石質。
-8	砥 石	流紋岩。表面の下方はよく整形されておらず、丸味がある。側面はよく使用されており平滑である。裏面は、一部剥離している。	16号住居址。
-9	剥 片	縦長剥片。珸岩製。表面の一部に自然面を残す。また、不定方向からの剥離がみられる。長さ2.3cm。	15号住居址 覆土。
-10	石 核	石材不明。かなり磨滅が進んでいる。岩石の中に結晶質の粒子を含む。上面は打剥により打面が作出され。打面より石刃状の剥片が剥離された痕跡を残す。	2号マウン ド状遺構付 近。



第 61 図 石器と石製品

## ま と め

源氏平遺跡は、那珂郡大宮町大字小野字源氏平に所在する。本遺跡は、水戸北部中核工業団地の造成事業に伴い発掘調査が行われた。調査は、昭和58年8月29日より同年11月15日までの約2ヶ月半にわたって行われ、発掘面積は、約3500㎡を対象とした。

遺跡は、那珂川支流の小野川（仮称）により開析された舌状を呈する段丘上の平坦部に立地している。小野の台地より、遠く那珂川の対岸の常北町石塚方面や桂村阿波山方面が一望できる。標高は約55m、水田面との比高は約25mである。台地上には、旧道が台地の中央やや東側より縦断して走っている。調査地域は、山林及び畑地になっており、山林では樹木等の繁茂がはげしく、調査に非常に手間だった。

遺構は、台地の先端部東側寄りに集中していた。住居址17軒前後、掘立柱建造物1棟などを主なものとしている。住居址は、土層確認の段階に於て黒色土層中からの掘り込みであることが確認できたが、プランはローム層上面まで掘り下げなければ確認できなかった。発見された住居址は、長方形またはほぼ正方形に近いものが多く、北壁中央にカマドを有するものが多かった。カマドの中には、切石を構築の際に使用しているものもあった。床面は、ほとんどの住居址が貼り床になっており、調査では、掘り方についてもそのあり方を明らかにすることに力を注いだ。

出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器等のほか、紡錘車（石製・土製）、土唾（管状）、鉄製品（鉄鍔、刀子）、石製品等が出土した。文字資料は非常に豊富であり、木簡こそ発見されなかったが、それ以外の考古資料の中で考えられる多くの種類が出土した。それは、墨書土器、刻書土器、文字瓦、漆紙文書等である。

漆紙文書は、15号住居址のカマドの南袖上に於て、内面に黒色処理が施された土師器の高台付環形土器（「土垣倉」の墨書が底部にある）の内面に、はりついた様な状態で発見された。解状の一部であろうか。漆紙文書は、石岡市鹿の子C遺跡でその出土をみているが、本遺跡のものは、これに続き茨城県内で2例目の出土であり、全国的にも20数番目の出土例として認めることができる。また、漆紙文書を容れた墨書の意味も未だ全国でその出土例をみしていないものとして特筆すべきものであろう。一般的に漆紙文書は、公的性格をもつ、都城・官衛・あるいはそれらに付属近接している工房址などからの出土がほとんどである。しかし、ようやく最近になって集落址に於ても漆紙文書が発見された。本遺跡出土例もこの事実を再認識するものである。このように、今後、当地方のみならず当該時期の集落址の発掘調査に於いて、漆紙文書が容易に出土する可能性を示したものととして、その意義は深いものと考えられる。時代的には、奈良時代～平安時代前期ごろを中心として営まれたようである。

### 参考文献

- (1) 平川南・後藤勝彦・白鳥良一「宮城隼下窪遺跡の漆紙文書」研究紀要Ⅷ 宮城県多賀城跡調査研究所（1980）
- (2) 拙稿「源氏平遺跡」第5回茨城県考古学協会発表要旨 茨城県考古学協会（1984）

# 圖 版



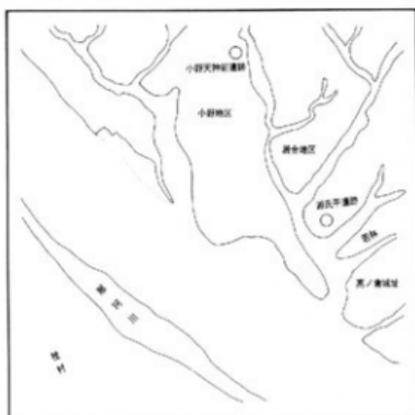
源氏平遺跡遠景



土層の堆積状態



源氏平遺跡付近の航空写真

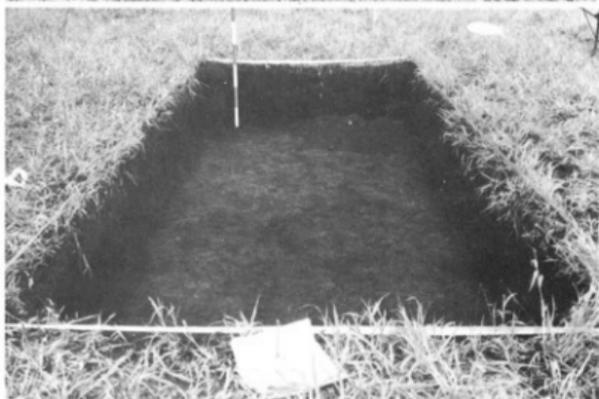




発掘調査前の状態



発掘調査中



グリッドの掘り込み  
状態



1号塚の調査トレンチ



発掘調査中



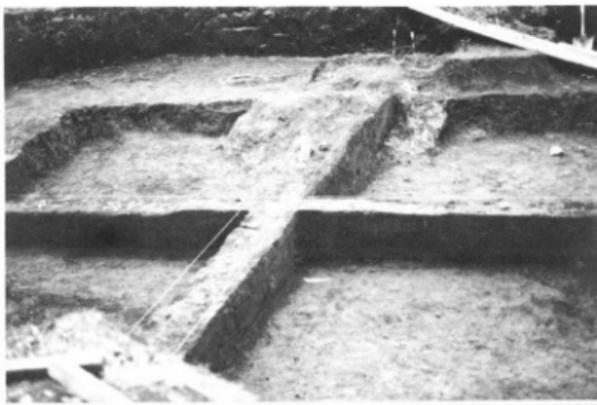
1号塚調査前の状態



1号塚の土層状態



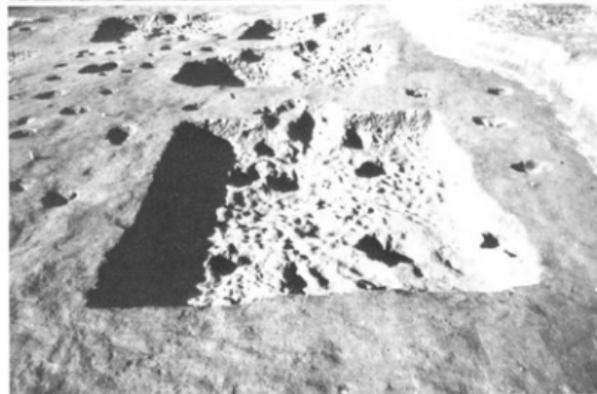
2号塚の調査トレンチ



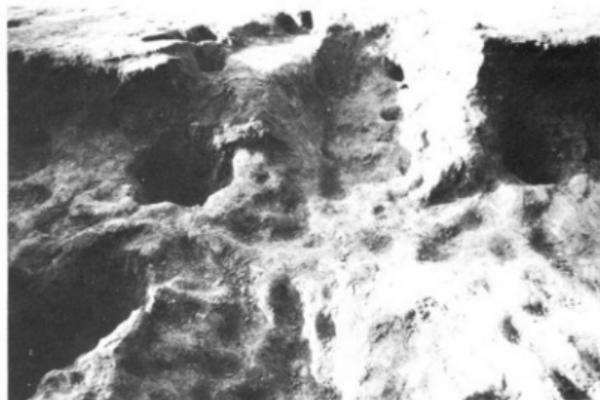
1号住居址の床面の  
状態と土層



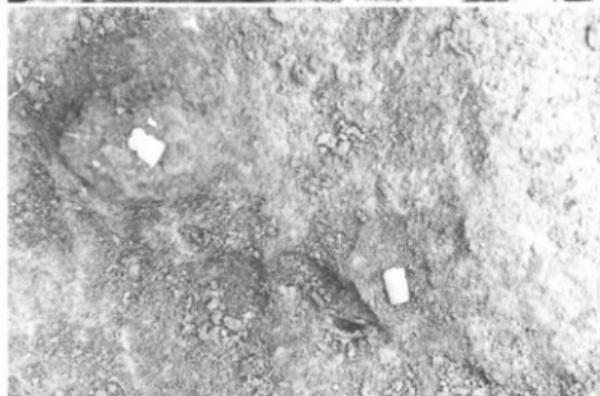
1号住居址のカマド  
煙道部とその土層



住居址のあり方  
(手前より 1号 4号  
5号 6号)



1号住居址のカマドの掘り方



1号住居址の石錘  
出土状態



2号住居址の土層と床  
面の状態



2号住居址の掘り方  
と3号住居址  
(手前) (向う側)



3号住居址の完掘状態



3号住居址  
石器出土状態



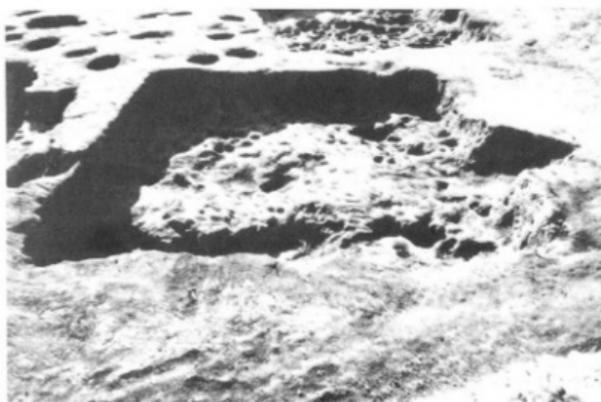
4号住居址の完掘状態  
(東方より)



4号住居址カマド前の  
土器出土状態



4号住居址土器出土  
状態



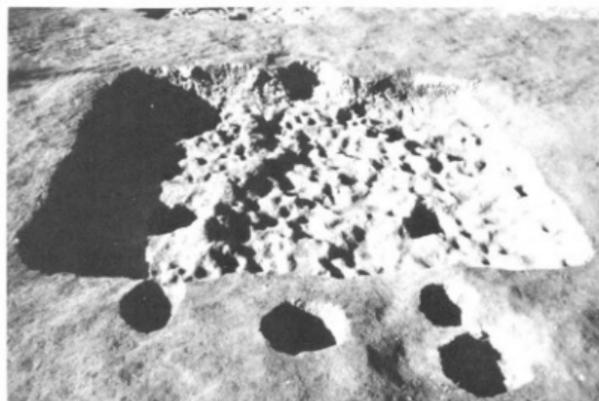
5号住居址の完掘  
状態（東方より）



5号住居址のカマ  
ド状態



5号住居址のカマ  
ド部分



6号住居址の完掘状態



7～11号住居址の  
完掘状態



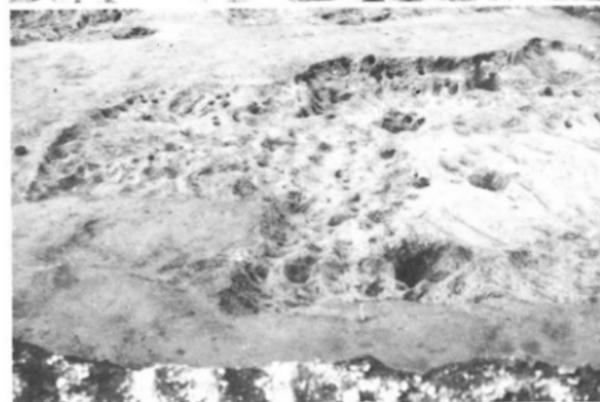
7号住居址の完掘状態



7号住居址の変形土器  
出土状態



8号住居址の完掘  
状態 (南方より)



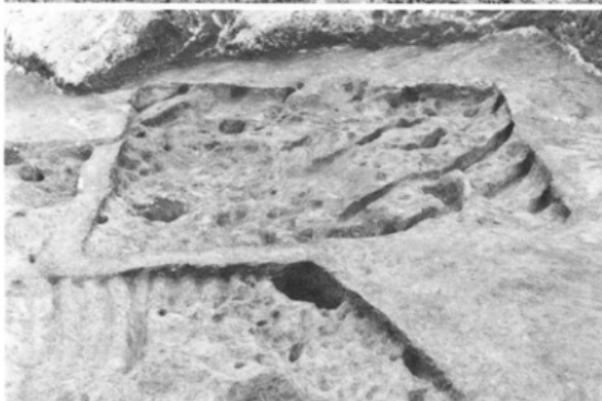
9. 10号住居址の  
完掘状態



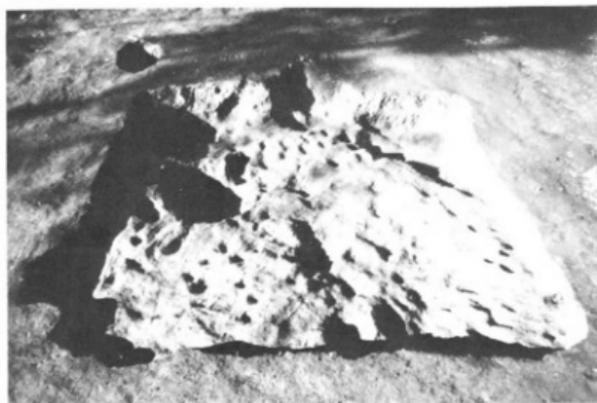
10号住居址の土器出土状態



10号住居址の土器出土状態



11号住居址の完掘状態



12号住居址の完掘  
状態



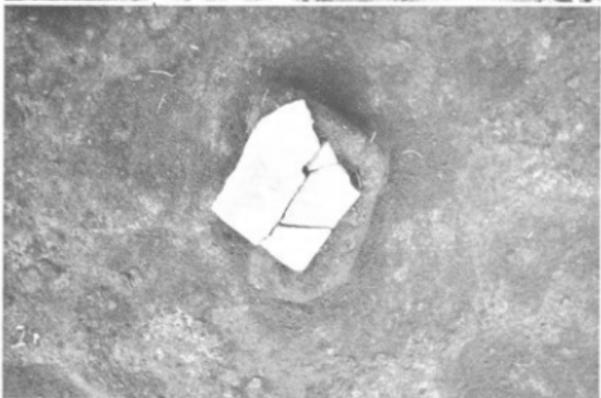
12号住居址のカマド  
内の土器出土状態



12号住居址のカマド  
内の土器出土状態



13号住居址の床面の  
状態



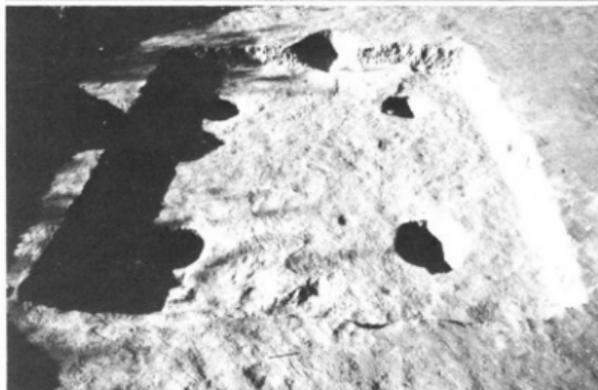
14号住居址の文字  
瓦出土状態



(左) (右)  
15号 16号住居址の  
位置



15号住居址の床面の状態



15号住居址の床面の状態  
(カマドの完掘状態)



15号住居址の白色粘土の確認状態



15号住居址の漆紙付  
着土器の出土状態



15号住居址の坏形土  
器の出土状態



15号住居址の坏形土  
器の出土状態



16. 17号住居址の位置



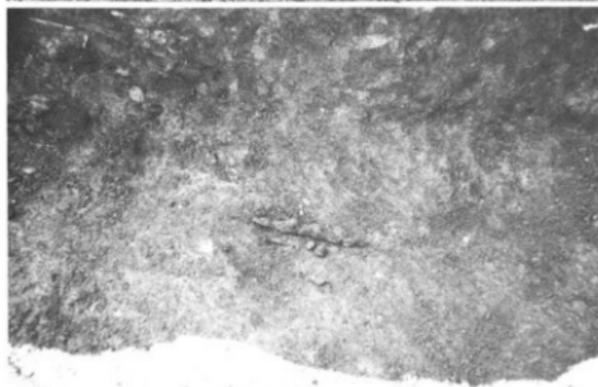
16号住居址の遺物  
出土状態



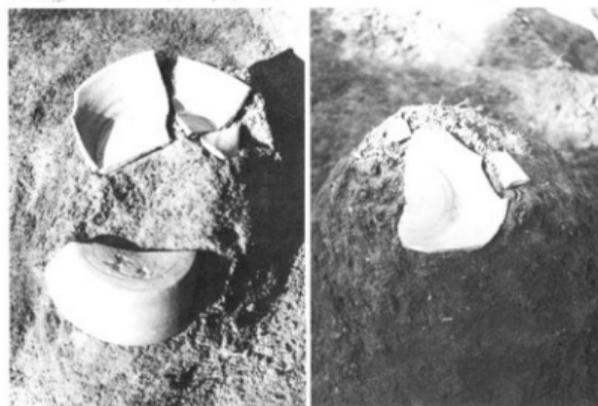
16号住居址の遺物  
出土状態



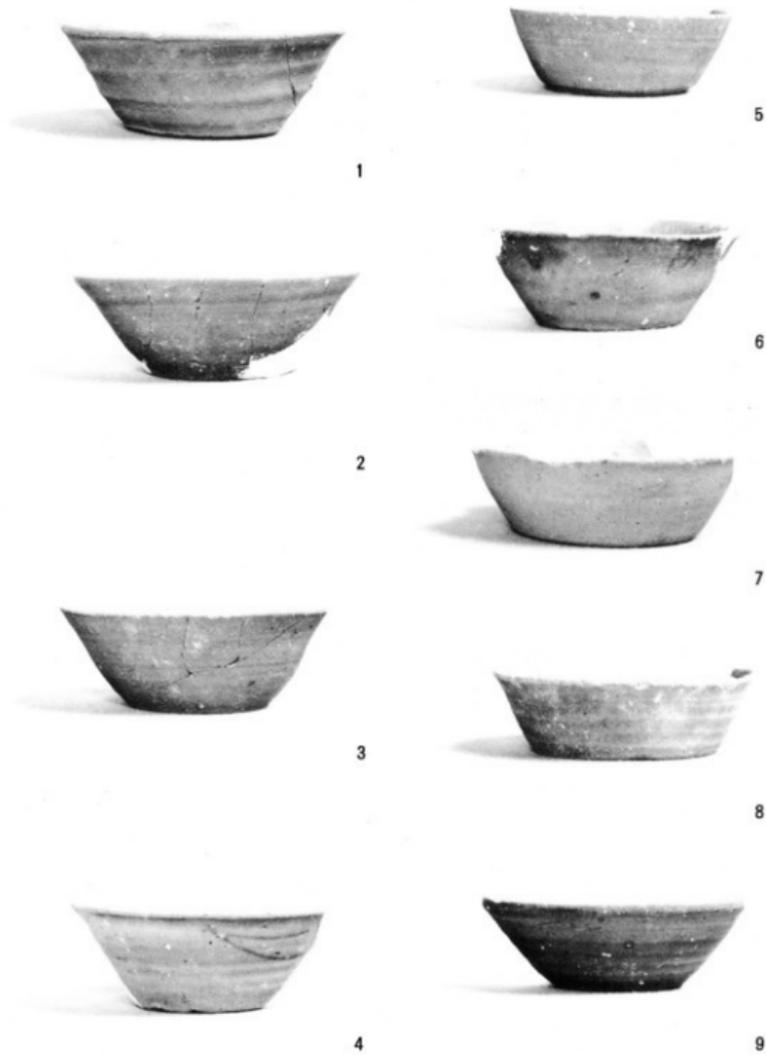
16 住居址の甕形土器  
の出土状態



16 号住居址の鉄鏃出  
土状態



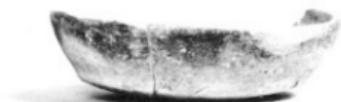
17 号住居址の環形土  
器の出土状態



(出土遺物1) 1. 第1号住居址の土器(S) 4. 第1号住居址の土器(S) 7. 第10号住居址の土器(S)  
2. 第1号住居址の土器(S) 5. 第6号住居址の土器(S) 8. 第10号住居址の土器(S)  
3. 第1号住居址の土器(S) 6. 第7号住居址の土器(S) 9. 第15号住居址の土器(S)



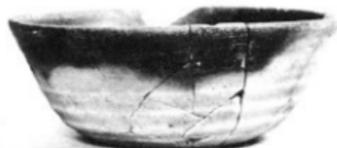
1



2



3



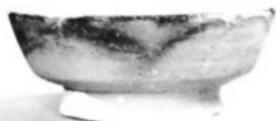
4



5



6



7



8

(出土遺物2)

1. 第1号住居址の土器S)

2. 第1号住居址の土器S)

3. 第15号住居址の土器H)

4. 第15号住居址の土器H)

5. 第5号住居址の土器H)

6. 第2号住居址の土器H)

7. 第12号住居址の土器H)

8. 第12号住居址の土器H)



1



2



3



4

(出土遺物3) 1. 第1号住居址の土器H  
2. 第5号住居址の土器H

3. 第1号住居址の土器H  
4. 第7号住居址の土器H



1



2



3



4

(出土遺物4) 1. 第4号住居址の土器H  
2. 第4号住居址の土器H

3. 第4号住居址の土器H  
4. 第4号住居址の土器H



1



2



3

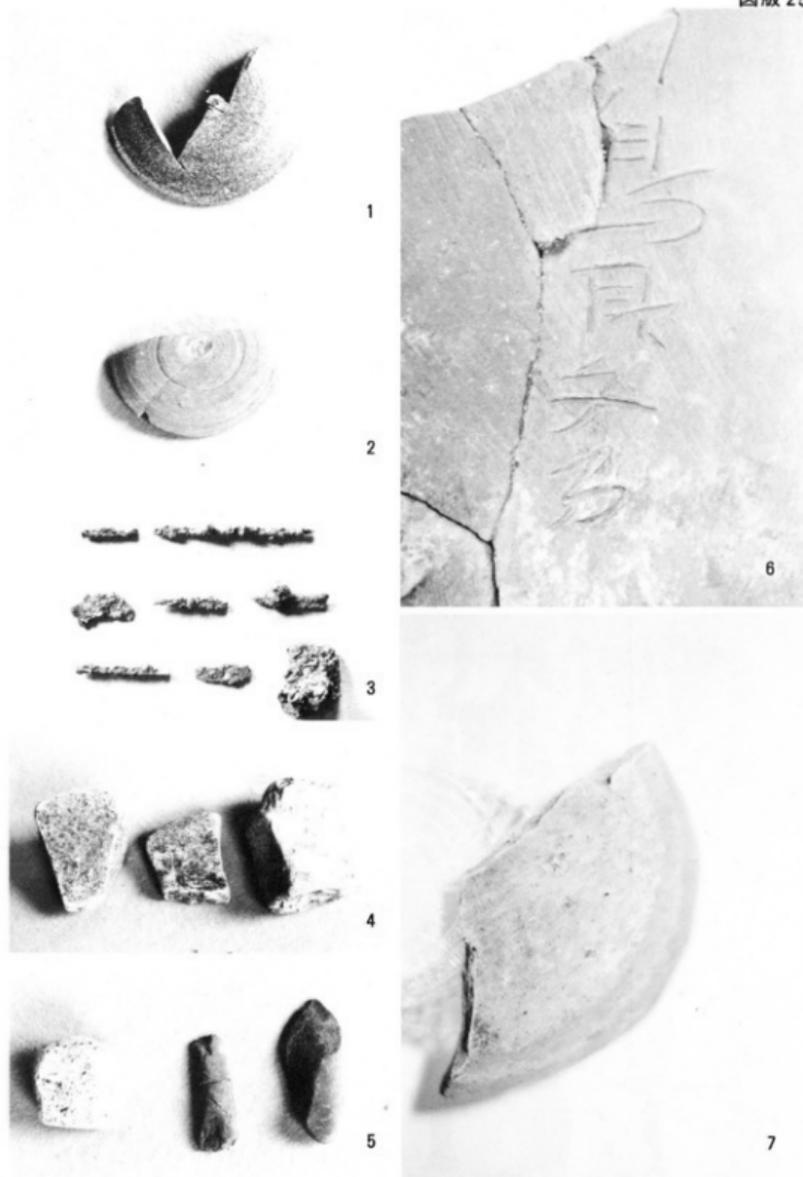


4



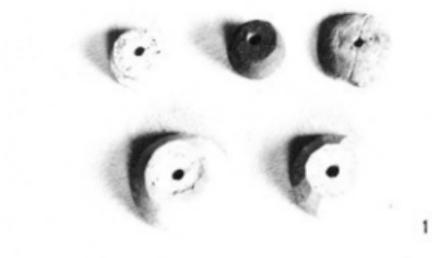
5

(出土遺物⑤) 1. 第1号住居址の土器Ⅱ 3. 第16号住居址の土器Ⅱ 5. 第16号住居址の土器Ⅱ  
2. 第16号住居址の土器Ⅱ 4. 第16号住居址の土器Ⅱ

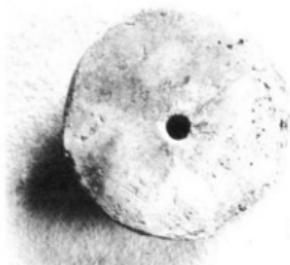


(出土遺物6)

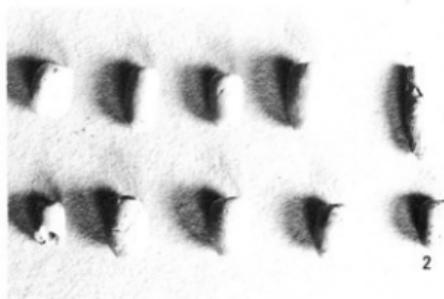
- |                 |           |                     |
|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 第11号住居址の土器S) | 3. 鉄製品と鉄滓 | 6. 第14号住居址Aの文字瓦(部分) |
| 2. 第10号住居址の土器S) | 4. 砥石     | 7. 第13号住居址の土器(底部墨書) |
|                 | 5. 石製品    |                     |



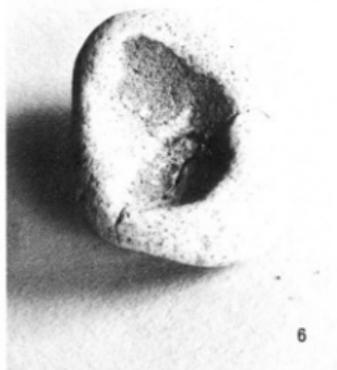
1



5



2



6



3



7



4

〔出土遺物〕

1. 紡錘車

2. 土鐘

3. 瓦片（凹面）

4. 瓦片（凸面）

5. 3号住居址の紡錘車

6. 凹石（表面）

7. 凹石（裏面）



1



2



3



4



5

〔出土遺物⑧と周辺の神社①〕

1. 第12号住居址の灰釉陶器（内面）
2. 第12号住居址の灰釉陶器（外面）

3. 第15号住居址漆紙文書（断片）
4. 第15号住居址漆紙文書付着土器（底部墨書）
5. 阿波山上神社拜殿（権現造）（東茨城郡柱村）



〔周辺の神社(2)〕

1. 石船神社の石造明神造鳥居 (東茨城郡柱村)
2. 石船神社の御舟石 (東茨城郡柱村)



[周辺の神社(3)]

1. 石船神社の石船(神体石)(=兜石)(東茨城郡柱村)
2. 鹿島神社(東茨城郡柱村)のお禊舎(祭器具庫)

常 陸 源 氏 平

HITACHI GENJIGADAIRA

— 那賀郡阿波郷丈部里比定地に於ける

集落跡の調査（遺構・遺物）—

発行日 昭和60年3月  
編集責任 那賀郡大宮町教育委員会  
発行 水戸北部中核工業団地内  
埋蔵文化財発掘調査会